生の門に遊びたるもの、海東に洽ねく、岡崎は先生一人のために文字の街巷となりたれども、先生一たびみまかり給ひてより、斯業亦地に墜ちて拾ふ可らずなりぬ、一人活動の力も亦おそろしからずや。

かばかり博覽なりし先生は、必ずや家に萬卷の書を天椽にも達くばかり積てやあらむと想像せらるれど、豚くべきは赤貧洗ふが如しといへる文字通りにて書籍とては一卷もなきことあり、酷たしきは筆硯さへ備はらぬことあるほどにて、身邊に殘れるは、手稿若干卷のみ、先生何が故にしかく貧なるやと問へば、他に幾何の理由あらむが、余は何を措いても、先づ酒ゆゑと答ふるの適當なるを見る。

先生は實に酒を嗜む、酒なくんば夜も日も明けぬといふもの、恐らく先生の人生觀ならむ、その酒を飲むや交はるところ貴人も可なり、百姓町人愈よ可なり、詞人も可なり、一丁字を解せざる大俗物甚だ可なり、之を要するに與に同ずるにありて、人を異しむことなし、さればその岡崎にありたるころも、時に駿河や遠江に出遊することあれど、必ず一杯引ッ掛けざれば往かず、一杯一杯亦一杯、一里にして飲み、三里行きては居酒屋に飛びこみ、行人を捉へては飲を奬め、己も亦飲み、蹣跚として途に上る

が故に、一日平均四里を捗取るに過ぎざりしことありと云ふ、先生の文中飲酒の記事に『杯行愈急、狂酣咲傲、傍若無人』とあり、十二字猩々曉齋翁の漫畫といへども、その活躍に及ばず、かばかり酒にかけては律蕩をきはめて制束なかりしが如くなれど、生醉ひ本性違はずにて、文字の談となれば、諧に應じて輙ち滔々捲くし立て、決して底を現はすことなし、こは別の話なれど、先生の門人が語るところに依れば、彼等詩文の作ありて、雌黄を伏請する毎に、他の儒者の如く『いづれ見て置かう』など、躊躇することなく、即刻筆を加へて眼前に删正し、之を返す、しかも原文は云々、添削したる個條は云々といふことを、記憶して、門人が件の手稿を失ひたる後も、先生に質せば聲に應じて敎ふること掌を指すが如くなりきと云ふ、その記憶力の卓絶はこれのみにあらず、京都にありたるころ、人と與に東山に遊び、諸ろの碑碣の文を精讀し、可矣と稱して歸宅するや直ちに筆を走らして、その全文を腦中の刻版より紙に透寫するに、千百言と雖も、未だ嘗て一字を誤まらざりしといふ。

博覽、强記、詩文を善くし、世事に疎く、酒を嗜み、細行に拘はらず、云々。以上の斷片文字を綜合して之を恰好の人躰に摸造すれば、宛如として舊幕時代の、所謂儒者な

るものゝ概念を彷彿し得べし、しかも斯の如き有り觸れたる文字を以て、その皺線を描かれむには、先生の風丰はあまりに脫俗かりき、先生の自讃に曰く『泊然無求乎世』と六字の名號、以て先生の墓木に刻むべし。

先生は必ずしも當初より、世外に超然として自ら儒者の本義を瘁くしたりとなすものにあらざりき、只だ藩侯水野越前守忠邦、天保の末年に幕政を執るに當り、その頭や冷石、その腕や硬鐵、旋風の如く起りて殆んど解体に近き政事を四角八面に料理し、制令嚴苛をきはめたるため、一時風紀を振肅したるに似たる外觀ありしも、不平の聲は四郊に滿つるばかりなりき、先生竊に之を患ひ、天下を遍歷して備さに民情を視察するに意あり、飄然暇を乞ふて去りぬ、幾ばくもなくして水野侯の政策は失敗に歸し、はては封邑を移さるゝに至りぬ。

事志と違ひて、先生亦還るを欲せず、鏞へりて修史の大業を就さんとするに意ありしかば、足跡は山陰、山陽兩道より九州に至り、凡そ八年を費して又飄然歸任す、その往くや風の如く迅く、その還るや舞葉の如く悠揚なりき、その間一通の音信を寄せざりしなり、藩主その期を愆まれるを罪として、之を某氏の宅に幽屏したれども、野鶴

は永く囚ふべきにあらず、數月ならずして先生窮屈に堪へ兼ね、竟に一家の眷屬を挈げて出奔す、こゝに至りて全く藩籍を削除せられ、天下晴れての風流使者となれり、

先生是より筇を索して四方に遠遊し、天下の名山大川を歷覽せずといふことなく、詩文の草藁懷に溢る、飛驒を縱貫したるも實にこの秋にして、初め越中神通川の梁上に立ち、その水の晶くして透れるを熟視して、嗟嘆すらく、かくの如き麗水を生む飛驒の國は、いかばかり美はしき山國なるそやと、俄かに飛驒に游ばむとする念、矢も楯も堪まらずして、翌日より直に飛驒を指して立てり。

先生の游踪は、固より飛驒に止まらざりしなり、然れども『幽討餘錄』は當時の紀行文中より、飛驒にのみ關する條を抄き出して、剞劂に付したるものにして、十が一に過ぎざる旨先生自ら言へり、先生この山水州のために立言して曰く『雖地之平衍貢賦之出不多、然崇山峻嶺、重巒相倚、宛轉間夾巨壑、合沓際天、曼衍横塞乎北陸東山二道、蔚然爲之奥區、宜其幽奇險恠之觀、海内蓋罕其比焉』と、今この書を讀むに、彩畫の如き高山急川の叙事より、棊局を指すが如き史蹟の詳らかなるに亘り、習俗、物産、天候、錢法、談理等、片言隻句の中に網す、時に唐土の古書を博引して、險恠迂腐の

說を吐くことあれど、その文品の高古にして幽奇なる、一代に卓絕し、大石刻立して水之を嚙むの奇態を横生す、後代飛驒史を編むもの、この書より取材するもの多き、殿として一典據なり。

先生の飛驒旅行は、いかなる話柄を作りたるかと、いふに、その滑稽なるものに至りては、十返舍一九が膝栗毛中に挿むに足るものありき、一日旅宿の團欒話に迷信深き山國民の常とて、主人頻りに妖怪を語るにぞ、居合はす旅客一同、おのづと膝を促して、肌寒げに見えたるが、已にして灯ともす頃になりぬ、その中の一人、内迫りて堪ゆる能はず、躊躇の末に圖に上りたるが、やがて消魂ましき物音して走りかへり、悸めく胸を抑へて語るらく、やつがれ只今數多き妖怪變化に出で遇ひ、生命も危ふくさふらひきとて、生きたる面色もなく、一座しらけて見えたるとき、家の病婢泣さて來り、この客人拳を擧げて妾をしたゝか打ちたるを、人々の力を借りて免れぬとて、愈よ啜り泣く、さてはとばかり擧座絕倒して、笑ひくづるゝ聲戸外に徹りけるとなり。

先生かこの長途にして且つ長年の漂泊の間、旅費等はいかにして支辨したるかを知らずと雖も、先生は最も詩に長ぜられ、幼年のころ早くも柳眼詩の作ありて、世に讃へ

られたるほどなれば、或は詩を隻り、翰墨を與えなどして、流轉せられたるにあらざるかとおもふ、三河の岡崎にて私塾を開きたるは、按するにこの旅行を終へての後なるが如し、岡崎に在りたる時の先生は、前に述べたる如く、徒弟を聚めて講習する外に、閑あれば著作に從ひ、倦めば杯を銜み、或は猫額大の庭内を、手を懷ろにして悠々右往左往して、簞瓢の空しきを知らざるが如くなりしといふ。

明治元年、朝廷先生を徵す、先生病を以て辭したれど聽納せられず、止むを得ず岡崎を去つて京都に赴きたるが、未だ任に就かざるに先ちて、例の如く逆旅にて日夜の長飲をなすのみ、貴紳に謁するが如きことは、先生の最も蒼蠅がるところなれば、詩を作り毫を揮ふにのみ他念なし、ために譴責を蒙むりて、京都に囚はるゝに至りぬ。

この時幕臣血氣に逼るの士、函館に聚まりて、朝命に抗す、三河は德川氏勃興の地なれば、その黨に加擠するものこの地の士人多く、この地の士人は先生の門下殊に多かりしため、先生に罪を累及するに至りしなり、先生の恬淡無私なる、自ら囚はれてその何故なるやを解せず、解せざれども晏如として穴居す『五倫名義辨證』はこの間の作なり。

本多侯先生のために、救解甚だ努め、明年九月を以て漸く赦を得たり、その恩誼に酬ゆるため、留まりて侯の藩士に教ふるところありしが、幾何もなく病沒せられぬ、著書は『幽討餘錄』の外に『蘭雪齋彙考』の稿ありたるが如くなれど、未だ完からず、隨ひて梓に上らずして止み、その他若干の詩艸文艸あれど、孰れも纒まりたる冊子とならず、『幽討餘錄』のみは、安井息軒先生の『讀書餘適』(日光山の紀行)林鶴梁先生の『續鶴梁文抄』(多摩川上流及び昇仙峽の記事あり)等に伍して、間漢文の叙事を愛する、極めて少數の讀者に、瞥視せらるゝ事あるのみ。

其四　近畿中國の山嶽

濃飛高原の盡くるところ、山勢漸く夷陵、しかも近江に入りて伊吹山あり、『玉あられ茅原萱原關ヶ原』の古戰場を俯瞰して、最も高く峻立し、宛として山的晴雨計(マウンテンバロメター)をなせるを以て、畿内の人、朝々暮々その玉幢峻を仰ぎ『冬ちかく野はなりにけり近江なる伊吹の外山雪ふりぬらし』(曾禰好忠)の古歌を想ふ、高原の南に接する地方は、美濃、尾張、伊勢の低原、低原の西に鈴鹿山脈(關ヶ原に起り、南下して紀伊に行く)笠置山脈

(山城に起り、南走して吉野川北岸に至る、多武の峰や、奈良の春日山や、この脈中の貴公子)葛城山脈(同しく山城より起り、紀伊に迫る)等の三脈、共に南北に並走す、生駒山や、二上山や、はた楠公酣戰の地なる金剛山は、實に葛城山脈中の高山なり、これらの山脈、北方は中國山系(東端を濃飛高原に結ひ、西端は長門に終り、その間分明に瀨戸内海と日本海との分水線を劃す)中、近江の比良、山城の比叡愛宕等と脈絡す、愛宕山は丹波を過ぎて、但馬播磨境上に雲屯せる紫山碧峰を累起し、美作因幡伯耆の境に蟠屈する三國山となり、伯耆の蛭山、大山に列なる、この山の誕生地を背にする低原は、則ち京都の在るところ、「山背(ヤマシロ)」の名從ひて起り、山河襟帶自然の城廓を成せるを以て、亦「山城」の改稱に背かず。

別に南の方四國山脈と連絡し、北の方伊勢の海に入る紀伊山系あり、高野山こゝに起り、玉置山、大峰、吉野山、大臺原山等、屈曲頗る多き横谷を擁して、縱横に雲幻し、或は人跡不到の靈谷を蔽む。

之を要するに、近畿には火山尠く、是れあればとて絶小殆と言ふに足るべきものなく、僅に大和に大和富士、室生山、二上山、及び三笠山、攝津に兜山あるのみ、山城近江

其他には一も見ず（三笠山の巉石は、赤熱熔岩、地表に迸發して、冷氣に凝固せるもの）近畿の名山と稱する三上山は、近江富士の稱あれど、實は石英質の山にして、琵琶湖より分離し、上部破壞して、偶ま圓錐形を作り、木之に貧綠し、綠潤蒼澤、黯然として空翠を揮ひ、愈よ火山に酷肖し來るのみ、愛宕山亦京都平原陷沒のために、高聳するを得たる秩生古生層の山にして、比良、（雪白比良山一角、春風猶未到江州、竹外）比叡、金剛、妙見、六甲、葛城、笠城の諸名山、皆同層の山に花崗の大塊を兀々噴起し、その性堅緻なるを以て、風化作用に堪へ、他の粘板岩、砂岩等、脆弱の部分を削剝せらるゝも、己れひとり殘留、肯へて頭を下さず、儼として、時に奇傀の貌を作るを、多として見るべし。

まことに畿內中國の山岳は、幾折して連嶺屏を繞ぐらし、殊に高野山附近の如きは、「果無嶺」の名を有するまでに、長く延亘すれども、かの吉野川の南岸を壓して、屏立する大峰（オホミネ）を除けば、悉く低山性の通相を呈せざるはなし、則ち黑風白雨に刄剝せられ、形態は尖銳ならずして圓楕、傾斜は急峻ならずして緩滑、比叡、愛宕、吉野、高野皆是れにして、赤石山系の如く突兀ならず、東夷粗剛の態なくして、雍々大雅の風骨に

入れり、『布團着て寢たる姿や東山』は、その小塑像とも見るべく、圭角なくして濃潤なる四條派山水畫の、此間に生るゝ、實に偶然にあらず。

髮あらへば髮に花さる山みづに

さくらいざよふ清瀧の里　　增田雅子

は、畿內山岳中、畫（ピクチュレスク）樣の溪谷を咏じて、繪畫よりも繪畫的、關東人士は不二の白、筑波の紫に親しめども、嵐山の紅綠趣味を解せず、關西の詩人をして『東人爭賞芙蓉雪、誰作嵐山春色圖』の嘆あらしむ。

かくの如く近畿の溪谷に色あり、韻ある如く、山岳又有情の眷屬、一杯の土も歷史を含める羅馬府の如く、一勺の水も王朝時代を偲び、一拳の石も南朝を追懷す、『ほとゝぎす初瀨の山を啼くなかれ』（鳴雪）は、吉野初瀨に紛紅駭綠の歷史を思ひ、芭蕉は高野山に低徊して『父母のしきりに戀ひし雉子の聲』と悲歌す、もし富士を以て「靈」の山となし、信濃飛驒の列岳を以て「力」の山となせば、畿內中國は夫れ「情」の山なるか、たとひ天上の麒麟閣に名を顯する能はざるも、永へに人間の「情史」に刻まるべし、情を以て生命とするところ、まことに是れ女性的の山、碧潭花の如き人を葬れる千鳥が淵（橫笛

の身を投ずるところ)淺流淨うして弔盃水心に酹せしむる桂川(お半長右の悲劇を以て名あるところ)人間の哀情を搖りて、清涙轉た多きかな。

然れども中國亦大丈夫の山なきにあらず、白山火山脈、加賀飛驒の境上に起り、雲漢を靡して兀々西走、若狹丹後の境に入りて、青葉山を勃起し、但馬の神鍋山より「伯耆富士」の稱ある大山(ダイセン)となり、出雲の三郡山、出雲石見二州の境上に跨立せる三瓶(サンベ)山となり、石見の青野山に列なる、就中三瓶と大山とは、山陰道中名山の冠冕たり、三瓶山は子、孫、男、女の四峰、環狀を成して相連なり、男三瓶最も高く、海拔三千六百有尺、駿河の愛鷹山に比して僅に高きのみなれど、緩斜漫延せる四周の花崗岩地、及び第三紀層の低夷丘陵地より孤聳して、雲際に近づけるを以て、堂々偉丈夫の觀あり(其石多孔質にして、奇雲を面に霞爛し出たすを以て、三瓶石と稱し、硯に作られ、文人に愛藏せらる)麓より高距五百米突にして、男三瓶の頂に達す、諸峰圍繞の中央盆地は、舊噴火孔にして、「鳥地獄」は炭酸質噴氣孔なり、頂上やゝ平夷にして、自然の花園を作し、東西に綠蕪烟るが如き大裾野を布き、中國第一の大河、江(ゴウ)ノ川眼下に銀蛇を蜿ねらし、藝備と雲石を限る山、紫塊を揑して北方一帶は、茫邈たる日本海、八荒

の碧落、隱岐の群嶋を呑吐す、山陰絕景の地、この山を王となす。

大山は白山以西の本州に在りて、第一の高山、米子より山麓なる尾高に至り、坂路を躋ること半里にして「大山原」なる裾野を突貫し、絕頂に到る、平曠にして天水を停蓄し、火口壁劒刃の如く屹立す、三瓶山の切截錐體を西に、但馬丹波の列岳を東に控へ、大觀實に大山の名に負かず。

其五　四國九州の山嶽

四國に二山系あり、一系は紀伊より來り、他の一系は和泉より來り、共に海に伏して四國に再起す、和泉より來れるものは讃岐阿波境上に屯し、大麻山、登尾山、大川岳、雲邊寺山等を起せども、總じて一千尺を出入せる高原性を呈し、山としては低卑言ふに足らず、然れども紀伊より來るものは、阿波の東部より西走して讃岐を除いたる他の三國境に起伏凹凸し、四國の頑壁なる脊椎骨を作る、試に高知灣頭に佇立して、北方を仰がんか、東西に走れる山岳、階段狀を成して複層し、漸々北方に至りて高く、愈よ北にして益す嶙峋を聚む、第一層は高知平原に接する土佐の山列、第二層は其北

に當れる古生層の山列にして、稍や高く、更に其後方第三列の結晶片岩より成れる、中央帶の高山は、四國山系の主脈にして阿波の劍山、祖谷(イヤ)山、伊豫の石槌山（安山岩より成る、四國全山嶽中の最高點、劍山之に亜ぐ）等、歴落碧宵に衣皺を劈して、冬は天雪を布き、夏は天火に炙られ、この靈境をして愈よ淨潔ならしむ。

四國の山、延ひて九州の南部に連なり、四國と同じく地勢高原性をなせども、その高峻なるものに至りては、豐後日向の境に傾山、祖母岳となり、日肥の境上には江代山より、市房山石堂山となる、この三山海拔六千尺、竟に薩摩に入りて、陵夷、朝日岳、國見岳、御岳等の低山となり、甑島の大岳に終る、別に日向の南部に起れる一脈は、屋久島の八重嶽に連絡せり、屋久島は相環くりて山、故に「八重」を以て岳に名く、全部皆花崗岩、翠綠蒙翳、深谷底無きが如く、絶壁空より垂れ、苔々爾々、喬樹長幹蒼穹に入る、熱帶に近けれども冬はなほ氷雪を冠る。

里はまた冬のけしきの見えなくに
ひつしか屋久の雪は八重たけ

の歌、地文學の材料となすに足る、蓋し八重嶽の最高點は宮浦岳（千九百二十米突）に

して、從來九州本土の最高點として知られたる市房山に比し、高きこと百米突を加ふ、實に全九州中の聖座なり。

山の翠綠、是れ實に九州の特相、しかもその特相を發揮し盡くすものを、三派の火山脈となす、即ち其一派は霧島山脈にして、琉球列島に起り、河邊七島を經て九州に入り、海角の最南端に聳起せる、「薩摩富士」(開聞(カイモン)岳)を峭立し、薩摩灣に臨める活火山櫻島となるや、全島皆火山岩、噴出の尖石峭岩、磊砢として路に狼藉し、村女が破三味線に合せて

島におじやるなら草鞋穿(ヒ)いておじやれ
島は石原小石原

と唱するを聞く、山は樹木拳曲、石巉兀、二里にして北峰の頂なる一笏の平地に出づへく、南嶽は更に峻高、火口障壁の一部、馬脊の如く狹長なり、西南に開闊の秀色、最も近く、最も鮮やかに、東北に霧島山彙の峰嶂を仰ぐ、左右に韓國岳（西霧島山最高點）高千穗峰（東霧島山）あり、日隅の諸山、亦簇々、遠くは南天低く垂れて海と合す。

霧島山は日向大隅の國境に聳へ、鹿兒島灣の北方に白烟を吐き、鋏尖四錐、鈍頂圓錐、

相列なれる一群山を繞ひ、環狀の噴火孔あり、東邊に高く西邊に低く、內瞼にして底深し、周回約二千米突、時々硫煙を噴騰して風物豪壯をきはむ、凡そ九州の山、東北及ひ、關東に比して、寧ろ平凡のみ、獨り此山彙、奇拔嶮怪、萬古の秀色を見はし、幻氣を磅礴す、霧島より西北折し、肥前の溫泉岳、多良岳に至つて止む。

他の一派は阿蘇山脈にして、阿蘇は九州の群火山錯綜して相衝突するところに屹立し、山甚だ高らずと雖も、その規模の宏大匹儔を見ず、即ち五岳より成りて、肥後の北東に端座し、中央に富士形を嶋起するを中岳となし、日常硫烟を揚ぐ、中岳の東方を環れるを高岳と稱し、海拔五千尺に迫る、本山彙の最高點なり、五岳を匝ぐりて一帶の平原あり、北を阿蘇谷と稱し、南を南郷谷と稱す、いづれも谷丘、こゝに村落ありて三萬七千の生靈を襄括す、この大襄の四周は、內に急聳して、外に緩斜せる連山を以て包繞す、直徑六里餘、蓋し全世界第一の噴孔なり、內に一大欠陷を生じ、白川の大奔流を筑紫海に朝するに至らしむ、阿蘇は熊本市よりする豐後街道に當り、道を夾んで街樹(松杉を主とす、他の雜木も交はれり、)整列

大道坦々砥不如　　熊城東去總平蕪

老杉夾路無他樹　　缺處時々見阿蘇　　(賴山陽)

は天然

兩行驛樹蟲無風　　蘇岳硫煙衝大空

一路炎塵人患渴　　林間好有賣瓜翁　　(久保天隨)

は人事、兩樣より阿蘇を描いて目睹する如し。

阿蘇を主火山として、粗ぼ東西に延亘し、金峰山、涌出山、黑岳、久住岳(久住驛の北に蹲踞せる舊火山の總稱、或は九重岳に作る)より耶馬溪の誕生地なる彦山に列なり(彦山に女も登る霞かな)鶴見岳、(別府港の西に兀立す、峨々たる數峰より成る)より漸次東北に低伏して、鹿鳴越に及ぶ、その西隣は由布岳に至る、由布岳は謂ふところの豐後富士にして、第三紀層を破つて噴出せるもの、頂東西二岳に分れ、南方より遠望すれば欠尖圓錐形を成す、しかも此山は熔岩のみならず、灰砂礫等を以て成層せる火山なるを以て、五合目以上、樹木の大なるものなく、頂上は山毛欅、山躑躅等、風勁うして蒲伏折戟の如し、山毛欅の如きは宛然小灌木の觀ありといふ、東西二岳中間の窪地は、一大噴火孔にして、周回一里、懸崖刃劃、樹その底に欝葱す、寄生火山

亦多し、これより海を渡りて、四國の高縄山に絡む、

要するに九州の山は、暖氣に蒸されて木は青蒼、土は濕潤、故に山紫水明にあらずして、山蒼水綠といふを適すべく、その秋を代表するものは、却つて田塍隴畔に植ゑられたる櫨にありて、山木にあらず、年少山嶽の地の文として、肉豐かに、骨細く、色鮮やかにして丈低し、その溪流に回轉して後靜止せる石の如きも、郁蘭翠竹、糾紛して之に簇がり、水と映發して濃綠厚蒼、膏腴の味を佩ぶ、東北の山瘦せて尖峭するに比すれば、轉た積極的なるを覺ゆ、殊に久住群山、祖母山四近、霧島山彙等の在るところ、火山岩類迸濺連亘して、宏大の地域を占め、開闢、由布、二子群山、鶴見群山、矢筈群山の如き、吐噴岩液より凝成し、風雪に鉋せらるれど、依然當年熔岩の通路なりし噴火孔を殘存し、造化の大活力を人間の想像以上に舖張したり。

其六　日本の名山

日本山嶽の累々疊々、天空に挿み、人の踏破を待つもの斯の如く夫れ多し、今に至りて猶日本にアルプス倶樂部の組織せられざるは、必竟世人が山を以て、人間交渉の以外

に置くためのみ、「登山の風は比較的日本の下層社會、しかも迷信の道客輩にのみ行はる、日本の士人は、山岳の價値を解せざるもの〻如し」とは、近日英京發行の地學雜誌に、一知名の登山家が說くところ、日本在住の登山家ウォルタア、ウエストノ氏は、披いてその文を余に示し、且つ語りて曰く、是れ二十年前の日本のみ、現今は決して然らず、日本の紳士競うて登山するの風あり、本國(英國)の人、蓋し之を知らざるが故に、這の臆斷をなす、余歸國すれば、日本山嶽のため、日本愛山家のために、その寃を辯ずべし、且つ余の手を把りて曰く、尠くとも足下の如き、青年登山家(ヤングマウンテニア)あるにあらずやと、余亦一哄す、然れとも全國を通じて、一アルプス倶樂部を見ざるところ、何の「愛山」か是れあらむ、余日本國民のために、竊に慙色あり。

道客の所謂登山講中は、素より山嶽崇拜より出づ、山嶽に鎭座せる荒神を崇拜するに近し、これ歐州アルプス山地方の迷信に異なれり、例へば塔ヶ嶽頂(相摸)の尊佛(石體)に於けるが如き、金峰山頂(甲斐)の五丈石に於けるが如きは、岩石崇拜にして、陸中上衣川村の大石神社、岩代郡山の赤石神社、下野那須鄕谷の殺生石の如きは、山嶽にはあらざれど、亦山岳の一片たる岩石

崇拜の一部として見るべし、斯の如く動もすれば自然に賀縁せぴと欲する國民は、アルプス倶楽部を組織するに、決して不適當なる人類にあらず。

既に山嶽の絶愛すべきを知りたる人は、閑あれば則ち登るを要す、日本山嶽中、最もその壯大豪宕を見るに便なる名山は、千島にてはシトカップ、アトシヨ(擇捉)チヤチヤノボリ(國後)北海道にてはスタカヤウシベ(石狩)男阿寒(訓路)恵庭、樽前、有珠(膽振)駒ヶ岳、恵山(渡島)等を尤とし、東北にては岩木山(陸奥)鳥海山、月山(羽前、羽後)岩手山(陸中)藏王嶽(陸前)吾妻山、磐梯山(岩代)那須嶽、日光山(殊に男體山及び白根山、以上下野)等にして、中央日本にては筑波山(常陸)赤城山、榛名山、妙義山、白根山(上野)大山、箱根(東京横濱附近最近の火山は、箱根にして、殊に箱根は二重式火山を作し、外輪山(明神岳、明星岳、乙女峠、金時山等)中央火口丘(二子山、駒ヶ岳、神山等)外輪山と中央火口丘間の低地なる火口原(仙石原、宮城野)、火口原内に潴水したる火口原湖(箱ノ湖)外輪山を突破せる火口瀦(早川、須雲川等)硫氣孔(大地獄、早雲地獄等)等を悉く具有し、火山標本としては完備に近きもの故、必ず探遊すべし、湯本塔の澤の溫泉を知る外、一切他に及ばざる如きは、火山國民の恥辱にあらずや、以上相摸)天城(伊豆)富士山(駿河)駒ヶ嶽、金峰山(甲斐)淺間山、八ヶ嶽、戸隱山、

妙高山、駒ヶ嶽、御嶽、乘鞍嶽(信濃)彌彦山、妙高山(越後)立山(越中)白山(加賀)等、近畿にては、比良(近江)比叡(山城)金剛山及生駒山(河内)を最とし、中國にて大山(伯耆)三瓶山(石見)四國にては石槌山(伊豫)劍山(阿波)九州にては阿蘇山(肥後)彦山(豐前)霧島山(日向)櫻島(大隅)等を最とせむか。

以上の諸山は、宗教上歴史上、或は名勝として、一州一國の山岳代表者として、最も多く世に知られ、路は一二を除く外は極めて宜く拓かれ、年々の登山者至つて多く、何人も登攀容易なるを擇びたるものにして、必ずしも山の大小高低に關せず。

然れども人間の境を脱して、寥廓神代の如く、太古の如き奇怪貌の深山幽谷を端睨せむと欲せば、信、飛、越、境上の危峰、常念ヶ岳、大天井岳、槍ヶ岳、穂高山、笠ヶ岳、燒山、鹿島槍ヶ嶽、白馬嶽、大蓮華山等を跋渉せざる可らず、殊には赤石山系中の白峰(北嶽、荒川嶽、農鳥山)地藏嶽、千丈嶽、鳳凰山(以上甲斐)及び赤石山(信濃)等、峻峰崇嶽、連綿横亘、雲を截り天に攄せるところを、探險せざる可らず、所謂アルプス連嶺と天峻を競ひて、寧ろ之を凌ぐもの、この圏内の山嶽に在り、殊に嘗生心神を鍛えむと欲するもの、この谿澗に露臥し、この尖點に孤立して、天風に嘯き、八

荒を呑むの意氣を養はざる可らず。

日本山谷中、眞個の危峰荒谷に至りては、信州大町を發足して、越中立山に出づる針木峠越えと、飛驒大白川を溯りて、加賀白山に登るものと、この二つを推して無二となす、殊に前者の如き、英國公使サトウ氏、『日本事情』の著者チャムバレイン氏、『日本アルプス』著者ウエストン氏、皆之を横絶し、『日本の僻阪能登』の著者、米人ローウエル氏の如き、上海在住の故フランシスの如き、たとへ成功せざりしと雖も、幾んど半ば之を踏えんとしたりき、日本人豈獨り能くせざるの理あらむや、起たむかな、愛山家。

第五章　登山準備論

登山に當りて、先づ第一に顧慮すべきは準備如何に在り、登山は時に無人の境土に數十日の淹留、彷徨あるが故に、登山者は創世紀中の人の如く、天曠地狹の間に特立して、人間の事は我自ら總てを主宰せざる可らず、氣候の炎暑沍寒も之を避くべき棲處を有せざるが故に、天然をも支配する術を講ぜざる可らず、衣食及び日常の擧措（測量

探險採集等）又平生と異なり、奴婢に一任したること、例へば炊を取り爨を主る如きも、自ら之を試みざるを得ず、故に携帶品も普通の旅行と違あるや言を俟たず、併せて山頂の氣候天象等の變化が、人間に及ぼす關係をも研究する用あり、斯の如き準備と注意とは、登山の成績に影響すること大なり、衣薄く餉糧缺かず、運搬不如意にして、器具缺乏する如くんば、體力の剛健、意志の强固も之を何かせむ。

所謂登山準備の方法如何、先づ平生目的地の地圖を多く集めて、相互に之を比較し、其距離并に方向の正否を試み、若し地名等に異同あらば更に之を考按し、山麓に達する道路の廣狹難易遠近等に就き、十分の檢覈を加へて巡回線を假設し、或は里程の長短に隨ひて日割を豫定し（必ずしも豫定の如く行はるものにあらずと雖も）又紀行文、寫眞、旅行談等に就いて、山川森林里閭の記事に注視し、大體を暗記或は抄錄して、座右に控ゆるを可とす、若し一二里の迂路なれば、時日に餘裕を存する限り、附近の勝地をも併せて巡覽するを要す、然らざれば一時の勞を吝んで永久に悔を貽すことあらむ、況んや同一土地の、跋涉再舉を企つる如きは、臆劫にして殆と行ふ可らざるをや、然れども〻に一條の注意すべきことあり、人惡河を說く、何ぞ知らむ其人は雨後水量嵩ま

り、濁浪洶湧岩石を轉ばして聲四山に反響するが如き時に於て之を相したるを、而して平生水涸れ、沙長く、石の大小凹凸相撲ち、起伏互に背き、雜草延びて三寸、小花その間に點綴するを想はざるなり、人凡山を嗤ふ、焉くんぞ知らむ、其人前に大嶽を登攀して、後之に臨みたるものなるを、而して初めて躋る人の困憊色に出づるを想はざるなり、故に榛名山を去つて妙義山に登る人は、其淺きを說くに邊あらずして先づ其奇を讃すべく、淺間山を下りて後妙義山に向へる人は、其奇を觀るに及ばずして先づ其淺きを難んずべし、畫人は山を尖描す（北齋の富士の如き、頂上の勾配七八十度に垂んとす、感情を以て視覺を支配する故なり、もし不二を寫眞に寫し、又は斷面圖を作るとせば、その傾斜の、あまりに緩漫なるに驚かん、）然れども躋る人は山中の客たるを知らずして緩歩し得、綿密なる人は野稿圖を製作するに當り、羅針を以て方向を定め、踏歩の數の多少に由りて距離の遠近を定め、其縮尺の命ずる如く紙上に線を引いて何山何水の間道程幾町といふ、然れども夕刻の一歩は、昧爽發程の一歩と寸尺を異にするを知らずや、展張障列する山中に拔きたる八千尺よりも、驛外の平楚に孤聳せる四千尺を高しとすることなきにあらず、御殿場より近く視たる富士は頗る低く、

遠望するに隨ひて愈よ高し、夏夜平靜蚤のために夢結び難かりし人は、山中石室の構造粗陋を慊らずとして、其苦を說けど、黑風白雨を避け得たる人は、其恩惠の浩大を感謝すべし。森林は時季に因りて或は蒼、或は黃、其色は水分の多少に關係するや、瀑布を或は大にし、或は小にし、隨ひて是より源を發する河流を或は急にし、或は緩にす、故に同一の山水を豪壯といふもあるべく、纖細といふもあるべく、夏は以て鬱蒼の詩を作るべく、秋は以て冷瘦の文を行るべし。故に他の巡回報告書紀行文等を誦するに當りても、その間頭腦を冷靜にし、反覆熟慮するを要す、徒に沒批評的に生呑活剝するも何の益か是れあらむ、他の精細なる報告を聽き、自己に何等苦心の準備なくして、俄に聲貌を擬す可しとなすは慢なり、而して他の做大なる探撿記類を讀みて何等の勘考なく、步驟到底循ひ易からずとするは更に怯なり、斯くの如くして居常備忘錄或は目錄の類を製し、一解ある毎に之を增補訂正して、尨然たる大冊を成すは、最も興味多き事たり。

旅行の準備に就きては、ガルトン氏の旅行の術(Galton's Art of Travel. 1876)あり、記事洽博、本邦未だ此種の著述なく、旅人をして適從するところを知らざらしむ、偶

まず登山論を艸するに際し、豫ねて私に編成せる手記中より、數節を抄して左に示す。

一　登山の時季

▲夏秋の比較　山の高低、所在地の緯度等の差違によりて、必ずしも同一ならずと雖、特殊の目的を覘ひて寒中に登山する如きは暫く措き、普通は夏期に在り、富士山は毎年舊暦六月一日（新暦七月五日）を以て所謂「山開き」となす、登山者の最多きは七月二十日頃より八月三十一日の間に在りといふ、其他の諸山亦然りと雖、大概七八兩月より九月中旬までは登山者の趾を絶たざるが如し、但だ九月は二百十日、二百二十日等の災厄ありと雖、一旦霽るれば秋空一碧水の如く、眺望却つて夏に倍す、我嘗て旅行の季節を論じ、夏秋の比較に言ひ及ぼして曰く、

夏は一年中の安息時で、旅行殊に登山は夏に限られたやうてある、夏は日も長いし水蒸氣の變化の多いのも奇觀であるし、いかなる高山の雪も三伏の酷暑には大概融解するし、「野宿」も隨分と利くし、草木も繁茂しては居るが、私は夏にも勝つて秋を愛するのてある、それは私の性分て所謂「夏負け」がするばかりてなく、

秋は總ての方面に於て多趣多樣てあると信ずるからてある。先づ空が拭つたやうに冴えてゐるから、水のやうな蒼旻に鳥一羽見落さない、高山に登つたときには殊に遠望が利くので、自然界の大パノラマは、秋の見物に限る、山の隈水の涯、樹木は樺色、黄色、紅色、綠色、赭黄色、黝玄色が參差錯綜して、四季中て最も多く彩色の變化がある、氣候も暑からず寒からずて、旭日を眞向に受けても、垂直に照らされても、汗を流さずに濟み、宿屋へ著いてからが蚤蚊蠅蚋にせゝられる患ひも少く、汗臭い白衣の道者と合宿して、隅の方て小さくなつてゐる心遣ひもない、夏の炎熱は微菌の繁殖を增す、その又化學的作用て飲食物は腐敗させる、且又蠅蚋のたぐひは繁殖の方便として、其排泄物を食物に附着する、といつても不自由勝ちな旅行中であるから、一一極熱の溫度て之を殺すといふことは出來ない、そこへ來ると秋だ、殊に山村の秋は凉風が早く立つから韮辨當の腐敗、傳染病の危險等も夏のやうなことはない、四圍の光景はどうかといふと、夏は路傍の桑の廣葉に埃が堆くて灰色になつてゐるので、見るからに暑苦しいが、秋となると柿は黄熟し、栗は殼を破つて足許へカサ〳〵と轉げて來る、野菊は亂れ咲く、

葉鷄頭はいやが上にも紅ゐになる、粟は粒々黄玉を束ねてその上に露の白玉を貫いてゐる、いかな平凡の路でも、皆趣味を生じて來る、それに水も夏のやうに旱魃で涸れるやうなことはなく、清冽透き通るやうなのが混々と珠を轉ばしてゐる

『雲の峰四澤の水の涸れてより』の暑苦しさは、秋にはない（但し高山植物採集の如き特殊の目的を有するものは、適宜の季節を選ばねばならぬ）只高山の絶頂は聊か寒いとはいふものゝ、未だ雪は落ちないから、若しくは落ちても一部分に僅かであるから、和服ならフランネルの襯衣と綿入羽織、洋服なら冬外套一領あれば、立派に凌げることは、實行した私が保證する、同じ秋でも九月は二百十日二百二十日などいふ厄日を控へて、暴風雨や水害の多い月であるから、避けて宜しい、が併し十月になると天候が全く定まる、念ふに秋の特色は洞朗である、晶明である隨ひて平生宇宙間に秘められた或絶大なる意義が、一木一草一山一水にも活きて表現されるやうな氣がする、夏は皮を蒙つてゐる、虚飾があるが、それが秋になると剝がれてしまふ、冬は寂寞に失して生色がない、夏の緑葱々と、冬の白皚々と、孰れも一本調子であるが、秋は中庸に處して調和を保つてゐる、均齊を

持してゐるから、觀るにも考へるにも、最多樣多趣である。

只秋の缺點は吊瓶落しといふ、日の短いことで、暮れたかと思ふと、直ぐ暗くなるのが、追ひかけられるやうで、氣が一方ならず急がれる、悠揚迫らずといふ點に於て、夏にも春にも若かない、併し夏の長途旅行は、十二時から三時頃まで、木蔭で憩んだり、茶店で昼寝でもして、赫奕たる日光に焦りつけられるのを避ける必要があるから、詮するところ大して差違はない、夏はよく人が夜行といふのを行るが、あれは何分昼歩めないからのことで、秋の方が白日を立派に横行濶歩される。

我が從來の經驗に徴するに、本州の山嶽殊に信濃飛驒加賀越中等の群嶺は、少しく防寒の衣に心を用ゆれば、十月中に登山すること容易なり、富士山と北緯四十度以北の高山を除いては、山頂殘雪の外に、新雪は極めて少々、山下の土人の如きは、或は秋季登山の危險を說くものあれども、我が信念にして堅固ならば、概ね耳を藉すに足らず、外人が多く土用後の秋山を愛するは、以上の意義を以ての故にあらざるなきを得んや。我が信濃の淺間山を攀ぢ、飛驒の乘鞍嶽に登り、越後の妙高山を躋めたる如き

は、皆十月中旬より下旬に亘り、他に登山者の隻影を見ざりし秋にして、導者は我を以て本年の最終登山客となせること、一齊に符合せり、登山の秘訣は『晩きに失するも早きに過ぐる勿れ』に在りとは余が一家言（勿論登山の先鞭を樹てゞとする如き一種の功名心を冷眼視したる場合に於て）蓋し十二月より四月に至る間、堅氷山を閉して生物皆蟄する時は、特殊の準備なき限り、一脚を投ず可らざること勿論なれども、五月六月の候、梅櫻桃李一時に咲き、初夏の天地亦自ら一片の春を燒盡せざるものあるに似たりと雖、氷雪融け、頽雪墜ちて、人畜を壓殺し、或は五月雨霽れの候、多孔なる岩石を潤澤して之を裂拆せしむる如き危險あり、余は三月上旬僅に五千尺に足らざる甲斐の山に登攀して、幾んど凍死したる經驗あり、早きに失するを忌む所以なり、九月十月は既に晩しと雖、その晩きは單に寒氣に在るが故に、一二領の衣を加ふれば則ち足る、況んや旅舍の如き（殊に東山道の）は、一部を除き、夏日は養蠶に忙殺せらるゝを以て、客を遇すること甚だ厚からざる不快あるをや。

▲朝夕　登山は夏秋共に早朝より發し、遲くとも正午迄に絶巓に達するの策を取るべし、或は前夜既に絶巓に近きところ（七八合目）に宿すれば可なり、其利は（一）前夜は

日沒、今朝は日出の兩絶大偉光を觀じ得ること（二）山巓に到るときは白昼なるを以て、朝夕の如く水蒸氣の四邊に屯すること少く（溫度昇まりて空氣暖まれば、雲霧の水分は氣化して透明となるが故に）隨ひて眺望宜しきこと（三）夜に入らざるが故に歸路の昏迷ならざること等なり。之に反して日高くして發程すれば（一）赫奕たる炎日の下に一樹の蔭なき裾野、或は山麓を跋涉せざる可らず（二）傾斜甚だしき山側を、午下二三點の間に流汗淋漓として躋らざる可からず（三）歸路は夜に入ると等の苦痛なき能はず、蓋し土用中は登山者、日夜絡繹として鈴鐸の聲を絶たざるが故に、假令夜に入るとも路を失する患ひは稀なるべしと雖も、夜行を企つるは徒に困憊を買ひ、且つ比較的に路程前まず一旦路を失すれば裸石の上に假臥して零度以下の寒氣に軀を曝さゞる可らず、之を要するに夜は努めて早く一睡するを可とす。

二　服　裝

▲和服　浴衣に兵兒帶、股引、脚袢の扮裝ならば、別に一二枚の着換へを携ふるも量積大ならず、手つから簡便に溪河、若しくは雨水にて毎日汙を洗滌し得、且つ乾くに早

さを以て、衣服のために旅程を停滯する患ひ尠し。

▲洋服　背廣の洋服に半窄袴、脚袢、股引（普通所謂「ヅボン下」は尻に當るところに破れ目なきために、或場合に不便を感ず、和洋服に拘はらず、股引を可とす）ならば登山に最も輕捷なり、且つ洋服は成るべく衣袋を多くし品質は不透熱のものを可とす、蓋し和服にては森林に入りたるとき、荆棘に袂を牽引され、或は岩石に摩擦して破綻し易く、偶ま雨に遭へば二個の小桶（袂）は貯水器となりて水を供給し、惡冷骨に徹することあれど、洋服は是に至りて其弊なし、但だ洗濯が利かざるを以て、數十日の旅行には、汗臭の不快に堪へざるを忍ぶ覺悟なかる可らず、但し初秋以下なれば、斷じて洋服及び外套を便利とす。

▲襯衣　フランネル、木綿、金巾、縮み等數多あれど、フランネルハ夏に在りて少しく暖に過ぐれど、健康上遙かに他の有らゆるものに優る、蓋し肌膚の軟なる人、暑中俄に冷氣にあへば感冒に罹ることあり、金巾の襯衣の汗に濡れたるもの殊に之を媒介す、フランネルは此患尠なし、就中白色のもの暑熱を導かざるを以て、他の著色に比すれば冷かなる理なれば之を用ゆるを可とす、秋は殊に輕快なり、但し夏は莫大小の

襯衣も可ならざるにあらず、綿入りの胴着亦可なり。

▲毛布　服裝の如何、季候の如何を問はず、登山に必す缺く可らざるは毛布なり、野臥は勿論山室に宿する時一夜も是なかる可からず、但し寒中山頂に越日せんと欲する時は、毛布猶風を透し、日本風の織物は冷やかなること鐵の如くなるを以て

▲夜具　を調製すべし、即ちフランネルの類、成るべく輕且暖なるものに眞綿を入れたる夜具を作り、洋服の代りに同樣の筒袖を著くべし、別に羅紗類を携ふるも可なりと雖、冬期は氣壓の低下、夏期よりも一層甚だしきが故に、夜具の類重きは胸部を壓迫して、呼吸甚だ困難なるを以て、輕きものを具ふるを要す。

▲帽子　夏ならばキャラコにて織りたる鍔廣きもの（或は白木綿の所謂書生帽）を用ゆべく、秋ならば鳥打帽最可なり、其理由は（一）極めて輕きこと（二）麥藁帽や竹にて編みたる帽に比して、軟鍔趣ち屈するを以て風に抵抗せず、故に吹き飛ばさるゝ患ひなきこと（三）同理に由りて、森林の中に入るも密枝に妨げられて歩行の自由を褫はるゝが如きことなし（四）風にあふとも脱帽するに及ばず、その上に更に管笠を蒙むることを得べく、苦熱の場合亦然り（五）帽を要せざる時は、疊みて懷中するも、衣袋に藏む

るも隨意なること(六)樹下石上に休憩する場合には、敷き布團に代用するを得(七)就中キャラコ帽木綿帽の如きは、容易に純白色に洗滌し得べきを以て、爽快なること(八)價廉なれば捨つるも惜し氣なき等、若し又

▲管笠　を戴かんとならば、深きもの可なり、淺ければ赫日を掩はず、烈風に耐へず。

▲足袋　平地の旅行には底厚なもの、足を病ましめずして可なり、或は全く穿たざるの利あるを見ることあれども、登山に足袋なくば、鼻緒擦れを生ずることあるのみならず、原野森林を跋渉する時、毒蟲に螫され、或は嚙まるゝことあり、又木根岩角に躓つきて足を傷くることあるを以て必要なり、色は白よりも紺を可とす（蛇蝎は最も紺色を嫌ふといふ、實否を知らず）汚れの著るしく目立たざればなり、成るべく底厚きを要す、草鞋を截り去らるゝも靴に代用され得べければなり、十二分に刺繍したるもの、俗に「刺しッ子」と稱して、消防夫輩の穿つもの可なり、輙ち破れざればなり、秋季の旅行は、山中宿舍の朝夕に足を冷やすこと大なるを以て、別に室内用足袋一雙を必ず準備すべし。

▲杖　金剛杖可なり、木杖竹杖は之を捨つるも惜しからず、用ある時は何時にても路

傍に求めて造るべき便あり。

▲草鞋　は必要なり、殊に敲きて後穿つを善とす、普通一山を昇降するに當りて、自己と剛力とを併せて尠くとも二人分六足以上を要す、穿法は各自の「足障り」宜しきを選びて、任意に研究して可なりと雖、要するに晴には輕且緩やかに穿ちて多少の餘裕を存すべく、雨には泥土底に粘して重量を加ふるを以て、緊且確かに結ぶべし、又賤價なる物なるを以て、少しく敗れたらば直に穿ち換ゆるを可とす、吝みて却つて足にマメを生じ「草鞋摩れ」を作る如くんば悔ゆるも亦及ばず、輕沙小石足袋内に入りて刺衝するときは、幾度も足袋草鞋を併せ、脱いて之を振ふべし、然らずんば不測の害を惹き起さむ、曲亭馬琴の紀行にいふ。

天城山を越ゆ、六里の山中人煙を見ず、右手は茂林深く左手は谷なり、足を運ぶの地僅かに二三尺に過ぎず、砂石碌々として水滴の行く迹滑かなり、登ること二里許にして、嚮導者見返りつゝ、湯が島までは人家なし、草鞋を齎らし給へりやと問ふに、其準備せざりしに、心苦しきこと限りなし、導者云ふやう、此の山にて草鞋を踏み切らし給へば、跣足にて登るの外すべなし、近頃こゝにて樵夫が草鞋

を二百錢に換へたる旅客ありき、樵夫も草鞋を買りては、其日の業を止めて徒に歸るなれば、二百錢を得たるも貪るにはあらず、心して草鞋を踏み切らし給ふなといふに、いとゞしく足の運びも捗らず。

余も又同一の經驗あり、特に此一節を抄して示す所以。

▲長靴　の登山亦可なりと雖も、雨に洗はれ沮洳に踏み入る時は、之を乾かすに日に向へば則ち損するが故に、專ら日蔭に於てし、而して後獸脂菜子油を塗らざる可らず、且つ赭土岩角にずべり易く、危險なるを以て、外人の箱根日光に游ぶ者は、多く靴の上に草鞋を結びて山道を辿れり、邦人は寧ろ初めより草靴を用ゆるの簡便なるに若かず。

▲手套

▲防水布製の雨衣

三　携帶品

▲手帖　堅牢にして雨雪の厄に耐ゆる表紙、例へばイタヽ紙等にして表裏を覆ふを可

とす、坊間にて購ひたるものに往々著色の表紙あれど、雨に潤へば剝げて四觸を塗抹し、懷中すれば汗に滲みて衣を惡彩することあり、些事と雖不快なれば、豫じめ留意して可なり。

▲鉛筆　折れ易きもの、減り易きもの、或は堅くして墨薄く、勿卒停歩の際、紙上輙ち文字を成す能はざるもの、共に皆不可なり。斯の如くんば途中に時間を耗費し、或は踏宿の後、手帖を翻するも字劃模糊として辨ず可らざる患ひあり、一本六七錢以上（鞘を蒙りたる）の品を選びて初めて可ならむ、是れ數澤に似て實は却つて節約なるを想はざるべからず。

▲地圖　參謀本部陸地測量部出版、二萬分一地形圖、最も精緻なれど、未刊の部分多く、且つ容積大なるを以て、一般は同部出版、輯製二十萬分一圖を携へて可ならむ。

▲洋傘　は大抵の旅行晴雨共に必要なれど、登山には斷じて携ふ可らず、雨を凌ぐには管笠あり、以て雙手を勞することなかべし、路の急峻なるに遭へば身を扶くるもの唯一の金剛杖あり、傘は畢竟無用の伴侶のみ、故に宿舍に托し置くを可とすれど、爾く爲し能はざる時は、帶刀式に挾ひも妨げざれど、進退の便を缺く、殊に洋服ならば

背に負ふより外に如何とも爲し難し。

▲手拭　或は拂拭の用に供すべく、風呂敷に代ゆべく、裂いて繩を作るべく、創痍を裹むべく、吸水器に充つべし、手巾などを準備する餘裕あれば、一枚にても多く手拭を携ふべし。

▲耐風マッチ

▲齒磨粉楊枝

▲石鹼　風餐雨虐の登山に、石鹼を準備するは華奢に過ぐと難んずるものは、未だ以て旅行を語るに足らず(一)人間皮膚の氣孔は、日夜蒸發を絶たず、氣孔の用たる、空氣を呼吸すると同時に、血液に有害のものを排泄するにあり、俗に所謂「垢」なるものは大空に浮游する有機物無機物と皮膚上の排泄物の附着して、氣孔を塞ぐものなるを以て、此一事躰内の機關に障碍なくとも、人を大厄に致す、故に清淨劑として一日も石鹼を缺く可らず(二)山中誤つて毒物を食したる時は、即刻に石鹼水を作り、之を飲めば膈胃を刺衝して立ろに吐瀉すべし(三)毒を拭ふに當りて、使用したる手拭手巾等は、熱湯を注いて煮りたる上に、石鹼を以て洗滌し、而して後乾燥すれば再用三用益す辨ぜ

む(四)靴擦れ等に惱める人は、足に石鹼を塗りて後穿てば痛を治す等石鹼の用たる、豈啻に身躰の爽快を感じ、皮膚に滑澤を增すのみにして止まらんや。

▲短銃　萬一の護身用具として、然れども日本の山嶽にては實際必要なし。

▲短刀　本邦夏日の登山、野獸に襲はるゝが如き患ひは幾んど絶無なり、隨ひて短刀は野獸剽盜等の害に備ふるよりも、主として榛莽を截りて、路を拓き、或は樹皮を剝きて迷途の標を作り、或は野營露臥に當りて「松火」「焚火」の材料としての枝葉を斫る用に供するに在り、殊に高山の絶頂、偃松帶に屬するところは、松幹狼藉勁風のために蒲伏すれども、强靭にして彈力あり、地盤を閉（老大に長ずるに隨ひて漸く疎となれども）して一脚を容る可らざる處多く、蹈めば則ち跳躍して人を顚倒せしむ、此際短刀を揮ひて鰭の骨を刻むが如くに、亂斫するを要す、其他或は箸を削り、或は掘立小舍を建つる等、用途極めて多し、又鉈を代用するも可なり。

▲細引　樹に攀づるとき、斷崖を下るとき、携帶品を一括するとき、洞穴を探檢する際出入の路筋を連絡するとき等。

▲油紙　時に天幕や簑笠の代理ともなり、又防水の必要ある物品を包むの用に供す。

▲天幕　使用法は別項に出だす。

▲磁石時計

▲椀　小にして深きもの可、紐を徹して斷崖より溪水を酌み上げ、或は路傍の泉水を掬ふ等、夏期の旅行に最必要なり。

▲鍋　自炊には鍋一枚なかる可らず、土鍋は割れ易く、鐵鍋は焦げ易く、且つ錆び易し、況んや果物の類を煮るときは、酸化作用を起して變色する患ひあるをや、故に陶質を塗りたる鍋を可とす(但品質に注意すべし)鍋の用たる單に沸煮に止まらず（鍋伏せ）の法を用ゐて又魚を捕ふるを得。

其方法たる、鍋上に小穴を穿てる布片を覆ひ、内に餌を入れて之を湖池沼澤に沈むれば、魚群り入るべし、即ち機を計りて徐ろに引揚ぐれば、潑溂たるもの膳羞に上らむ、亦山間の好饗應。

▲提燈蠟燭

▲望遠鏡

▲藥(内外用劑)

▲ズック製の大嚢　兩三日の登山には用なしと雖、旬日以上を期して、大山脈を横斷せんと欲する時は、いかに糧食衣服其他の携帶品を節するとも、量積膨大せざるを得ず、即ち普通の行李及び鞄の類にては、寧ろ風袋の不十分なるを覺ゆるを以て、堅牢なるズック嚢を製して、一切の藏庫となし（勿論玻璃壜、爆發物の類は、別に離隔して携ふるを可とす、且つ此際は人夫を賃せざるべからず。）偶ま山腹夜營に入りて諸品を亂抽し、空嚢となりたる時は、床褥に代へて潛り入り、首のみを顯はして寛眠し、首には手拭を覆うて、蚋蚊の襲來に備ふべし、若し山頂ならば蟲患なきを以て、毛布又は夜具類の下に敷いて、衽蓆に代用するも可なり。

其他修學旅行者に在りては別に

▲六分儀▲寒暖計▲晴雨計▲經緯儀▲傾斜器▲酒精壜(アルコール)▲昆蟲採集の網▲植物採集の錫函及び乾腊器▲夾板▲岩石採集の鐵鎚▲穿土錐▲顯微鏡▲寫眞器械等各自專門の器具を携帶すること勿論なり、要するに旅行の秘訣はなるべく携帶品を尠くし、一品にして數品の用途を兼ぬるものを選ぶに在り。

四 天幕

假寓を作るに其方法雜多なり、其主なるものを天幕となす、天幕には圓錐形なるものあり、又長方形なるものあり、厚き布もて作り、風を避くるには風の吹き到る方向の幅を狹くす、圓錐形のものは、多人數を包含するに適すれども、中央に柱あり、且つ其柱は長きを要するを以て、山間運搬の便なく、又樹木に乏しき處は殊に不便なり、又如何なる堅緻の天幕にても、雨中は屢ば漏洩することあり、故に大雨到る時は、天幕の周圍に小溝を堀りて、雨水の汎濫を防ぐべし、烈風は或は近傍の大樹を仆し、或は斷崖より石を墜落せしむることあり、殊に注意すべし、沙土は夜雨に洪水の難あり、要するに薪を獲るに便なるところ、地盤に凹凸窪隆少きところ、飲用水に近きところを選び、風の方向を斟酌して建つべし。

天幕の雨水漏洩を防ぐには、屋根に當るところに油紙を覆ひ、少しく隔たりて第二の屋を架すべし、天幕の底は或は草を刈て作り、又滯在久しきに亘る時は、木を剖きて粗板を削り、以て臥床を設くべし、故に天幕中には大抵草の上に蓆、並に毛皮毛布等

を敷きて、直に之に臥す覺悟なるを知らざる可らず、夜中翅蟲爬蟲の天幕内を縱飛横行する如き、又濕氣衣袂に滿つる如きは素より尋常の事と知るべし。

五 山中の假家

▲木皮　にて屋根と床とを造るべく、

▲草葉　にて又屋根、壁、寢床を設け得べし。

▲砂土　何物をも得ざる時は、清潔なる沙土中に穴を穿ち、風を禦ぐ堤防となして眠るべし、或は枝を折り集めて衣服を懸け、其下に一睡するも可なり。

▲茅　は刈りて寢床の敷き物とするに、柔軟にして最妙。

▲竹籔　熊笹小笹、いかに注意して刈るも、危險多し、成るべくは就かざるを智とす。

六 飲料水

本邦火山の多くは山麓に清冽なる溪水ありと雖、中腹以上は熔岩累々として一滴の水もなく、且つ山頂までの運搬極めて困難、飲料水すら殘雪を屋上に堰し、融解して僅

に其用を辨ずる程なれば、飲料水は必ず山下より準備せざる可らず、淺間山に登るが如き殊に然り。

▲氷雪　を融解して飲料水に用ゆるは胃を害す、殊に之を溶解するに口中の熱を費やすは益す渇を加へしむる所以なれば、愼しむべし。

▲雨水　飲料水は蒸餾水最可なれど、製造に多額の費用を要し、之を購ふも一升二三十錢の間に上り、一週日以上の渇を慰するに足るだけの分量を山中に携へむは、頗る困難なるを以て、雨水を飲むべし、雨水は天然の蒸餾水にして、含有物最微量、而して山中に在るものは都市の雨の如く、空氣間に浮游せる瓦斯體、塵埃、及び黴菌を含有せざるを以て、最飲料に適す、若し夫れ雨水を山中に索めむと欲せば、之を

▲森林　に於てするより善きはなし、蓋し森林の大樹小木は、その根幹枝葉を以て自ら水を支へ、其流下を防いて勢を緩漫ならしむるため、常に適宜の濕潤を保たざるはなく、加ふるに樹根の海綿的組織によりて、漸次に深く且つ多量の雨水を吸收し、漏性の土地たらしむるが故に、平地及山頂の旱燥する時と雖、森林中の土壤を深く發掘すれば、必ず多少の水を獲べし、且つ

▲苔蘚　ある地床も、能く多量の水分を吸收するの性質あり、一旦之を吸收するや、一立方米突の苔蘚は實に二百八十リットルの水を保持すといふ。

▲落葉　又同じ、要するに森林の雨水は、地表の打擊弱く、夏は苔蘚、冬は落葉の地表を覆ふより、雜多なる土壤を含まず、故に其水常に清淨玻璃の如し、雨水の外には

▲溪河　の水鹽分を含むこと少く、且つオゾン、過酸化水素等、化學上有効の化合物を含蓄する故を以て、能く腐敗物を酸化し、食料を新鮮ならしむ、亦好飲料となすべし、かの地層を經過して種々雜多の含有物を拉し來れる井水泉水の比にあらざるや論なし、多摩川上水の東京に於ける、馬入河水の横濱に於ける、百萬の生靈皆繫がりて是がために活くるにあらずや。

▲餅　水を獲る能はざる時は、餅を炙りて食すべし、やゝ水分あり。

七　食料

高山頂は、空氣稀薄なるが故に、米も滿足に煮る能はず、食物に總べて味なきが故に、食料は悉く山下より携帶せざる可らず、其食料品は分量少くして、多く味はるゝもの、

酷暑に耐へて永久腐敗變味の患ひなきもの等を選ばざる可らず、試に其一二を擧げんか。

▲鑵詰　近來販路大に開け、山間にても少しく人間の聚落するところには概ね之を見る故に、自宅より豫じめ携ふるに及ばず、成るべく山麓に近きところに就いて之を購ふを便とす。

▲ブランデー　顚倒して打傷を蒙り、殆ど昏絕せんとするとき、興奮劑の用として必ず携へざる可らず、其他の必要品は

▲麵麭▲奈良漬▲佃煮▲伽羅蕗▲梅干▲梅漬け生姜▲味噌▲鹽▲乾魚▲鰹節▲米▲道明寺粉

等を普通とす。

▲酒　は氷雪中を跋渉するときは大禁物。

▲果物　周禮に飾力長地財といふ文字あり、所謂地財は農產物を意味したるにて、力を飾すとは下種耕耘等を指したるならむも、今人間の勞力を俟たずして得らるべき地財ありとせん歟、果物は則ち其一、我が茲に菓物といふは、村家の籬落內に培養されたる梅李桃杏の類をいふにあらずして、山中自然生の木苺、栗、アケビ、椎、山葡萄、茱萸の類をいふ、之を採つて禁ずるものなく、之を口にすれば玉液津々として唾も亦馨ばしからんとす、眞個の天惠といふべし。且つ山村は乾菓澁茗、殆んど都人の喉に下す可らずと雖も、果物は割合に多く嚼げるを以て、好むところの物、數箇を購うて糧食の一に充つべし、蓋し人が最も渴したる時に、毫も害なくして渴を癒すものは、實に熟したる果實より善きはなし、果實は滋養分として價なけれど、胃に入りて消化を補くる效最も著るしく、含有せる水分多量、之を食前に喫すればシエリーピットルの胃劑より效あり、果實中に含蓄せる酸は、ポッタッシュと化合して人體の血液を清新にする力あり、又病泉たるバクテリヤを消滅せしむるに適すといふ、

▲茶　清凉劑與奮劑兩用として絕好、之を要するに、いかなる種類の食料品なるを問はず、旅行中に多食すれば、却つて空腹よりも疲勞を感ずるものなるを忘る可らず、されば空腹に過ぎては、亦如何ともす可らざるが故に、一日幾回となく少量宛食するを可とすれど、迚嶺深く踏み入りたる時の如きは、食糧の缺乏に迫られて斷食を忍ばざる可らざることあり、平生少食を練習することは探檢的登山者の第一秘訣なり

とす。馬琴が『旅人のため』なる一節に『晝の食事は一二杯宛食ひ、空腹にならば幾度も少しつゝ食ふべし、大食をすれば道を行きがたし』といへるは斯道に達人の言、平地猶然り、況んや登山をや。

八　天候の注意

馬琴又曰く、『旅にてにくむべきもの名所を過ぎるときの風雨』と、然れども名所は雨を俟ちて潤澤を加へ、豪壯一層の趣も亦是なきにあらず、只だ登山に際して風雨に遭ふときは、進退谷まりて爲す所を知らず、其山頂に在るものは雲霧に妨げられて咫尺を辨ぜず、眺望を縱まにすること能はずんば、一萬尺の高山も何かせむ、之を豫知するの法、最肝要なり、先づ

▲雲　の聚散を仰視せよ、極めて小さき雲に注目せよ、其雲の大サ次第に減少して、終に消散するときは、是れ晴天の徴候なり、之に反して其雲漸次聚合するときは、雨天と見做して可なり、蓋し空中に電氣多きときは、纖細の雲逐次に群聚し來りて降雨となるべく、晴天は之に反すればなり。

▲風　登山中に下界より吹颺するときは山頂多く快晴なれども、之に反して山頂より吹下する時は必ず山上に多少の風雨あるなり、是に於て登山を中止し、石室あらば就いて休泊するを智とす。

九　山頂の注意

▲登山に慣れざる人　に注意す、五合目邊より山頂を仰視する時は、意氣昂りて知らず識らず急速に足を前むれども、斯の如くんば七八合目に至りて呼吸迫り、殆ど頭踣して起たざることあり、登山は必ず急行す可らず、徐歩すべし、健脚なる可らず、柔く土を踏むべし、而して

▲呼吸　迅速となるは、空氣の稀薄なるに因ること言ふまでもなし、ゾッシュル氏がアルプスの最高峯なる白山（モンブラン）へ登攀したる時の如きは、其齎せる晴雨計の水銀柱が、殆ど通常の高さの半まで下りたるを見たり、是れ氣壓が半減したる故にして、氣壓の半減と共に空氣の密度も亦半減するが故に、吾人が一回に吸入する酸素の量も、亦普通に比すれば半減するに至る、故に平地に於けるが如く血液酸化の作用を爲さしめん

には、一定時間に呼吸する數も、亦二倍ならざるを得ず、斯くして呼吸も迅速となれば、身躰の困憊を來すは免る能はず。

▲脈搏　呼吸彼が如く迅速となるに隨ひ、亦血液の循環も急迅となり、皮膚は黄土色に變ずることあり、脈搏の數も增加して、山下にて一分時五六十搏なりしもの、山頂にては百搏前後に至る。

▲鼻血　山頂に到りて微熱あり、或は頭痛となり、又屢ば鼻血することあり、食慾奮はず、强性の酒を飲むを欲せず、唯水を飲むことを好む。

凡そ以上列擧したる諸變は、登山に慣れざる人或は怯れざるなきを保せざれど、下山すれば必ず直に平癒するものなれば意に介せずして可なり。又少しく山頂にて慣るれば、さまでに苦痛を意識することなし。

▲山頂天然の諸現象　を一括すれば(一)空氣稀薄なるが爲めに、白晝猶空色暗藍に見ゆること(二)夜間に見得べき星の數は、平地に於て見得るよりも、多く且鮮明なること(三)空氣稀薄なるを以て、音響甚だ弱し、震動の勢力微弱なるためなること言ふまでもなし。(四)空氣の壓力弱きがために、水は寒暖計の沸騰點以下にて能く沸騰す(五)

氣候寒冷なること(六)四境闃然、荒寞無人の光景(七)一萬尺以上に至れば、動物は絶無或は極めて稀に見ること(八)通常の植物なく、唯微細の地衣密着粘附して、時に或は岩石を彩飾す等、以上にて其大躰を了知すべし。

十　登山雜記

▲原野　等を跋涉するに當り、路は二岐し、三叉して、方向迷ひ易きときは、當面の山嶽を目標として、進むべきこと勿論なりと雖、路は必ずしも直線に通ぜず、其間に川あり、丘隴あり、森林ありて、迂曲の際自ら路を失することあるを以て、先づ高樹を攀ぢて遠望し、地勢と方角とを熟考して、豫じめ通行線を作るべし、單に磁石に據るよりも正確なり。

▲懸崖絶壁　の上、樹木鬱蒼として路なきところに身を沒して、寸尺の前途を拓くは、勞多くして功尠きを以て、寧ろ下りて溪流を涉るを便とす、成るべく石多きところを選んで、足を突き入るを可とす。

▲流水　急迅なる溪谷を横絶せむとするときは、大なる一ッの棒を數人にて握り、脚

力強きものを選んで、先頭と殿後に當らしめ、弱きもの中央を握り、恰も「めざし」狀を成して、一列に渉るべし、或は石を抱いて重量を附し、渉るものあれど、却つてそのために顚倒することあり、危險なり。

▲溫泉　溪流の磧には、間溫泉涌き出づるを發見することあり、此際大石を除いて磧を掘り、菅笠等にて汚水を酌み乾し、溫泉を湛へて入浴すべし、溫度高ければ水を調合するに又笠を用ふ、但し笠にてかくすれば傷みて復た用ゆ可らざるに至るべきを以て、他に適當の器あらば猶可なり。

▲松火　山中露營の際、焚火に煖を取り、或は炬火を照らして路を窮めんとする時、夏日は素より枯木なく、生樹を折で燻すとも火は容易に移らざるを以て、白樺の皮を剝ぎ、之を點火すれば、明煌白昼を欺く、樺は元來林學者の所謂陽樹に屬するものにして、飛散し易き種子を有し、繁殖容易にして地滑、雪頽れ、野火等にて裸出したる土地を占領するを以て、本州にては八千尺以上の高山に、上部の森林界を成せる偃松の中に交りて發生するものあるを見る、葉形皮色頗る山櫻に類す、內地の諸高山は到るところに是あり、武州日原鍾乳洞附近の山村にては樺の皮を綰ね、竹を裂きて上下

を括りたるものを松火として用ゆ、火を導くこと迅く、燼することを晩し。

▲栗　は深山に入らば之を見ること稀なり、栗樹多き林に入らば、村落に近づきたることを憶斷して畧ぼ過失なきに庶幾し、日光山奥の絕勝栗山郷の如きは、素とは義栗林なりしなり。

▲畑　山地磽确にして平野稀なるところ、往々山腹を截りて畑を作れるあり、畑は水田に比すれば、農夫の往復頻繁なるを以て、畑の所在地は概して人家に近きを常とす、故に山中に迷ふことあるも、畑を發見すれば、隨ひて人家に逢ふこと亦遠からず。

▲集塊熔岩の山嶽（例へば妙義山戸隱山の如き）は傾斜急峻にして、登攀の困難多大なれど、岩石極めて堅硬なるを以て、一角一鉈身を托して懸垂し得べし、躊躇狐疑すれば却つて身を過まる。

▲山頂の見取圖　土地一部の形勢を模寫するは、勿論寫眞に如くものあらざれども、特に或點に注目するところありて、遠近高卑の位置を明瞭に縮寫せんと欲する時は、見取圖を稿するを可とす、其方法は、天然の悉くを精寫するにあらず、山脊、河谷、森林、村落等の位置より、四近の山脈凹凸高低險夷の特性等、最須要なるものを粗畫畧

描して足れりとす、善く大要を提示したる畧地圖は、一般の所謂精圖に比して、或觀念を喚起する利あり。

▲傾斜測量　山側の傾斜は、容易に傾斜儀を以て遙に之を測ることを得、其方法は傾斜儀の面を觀者の方に向けて、鉛直面に立て、其器の一邊を山側の傾斜と並行せしめ、其方向と水平との間の角は、其器面にて知り得べし。

▲岩石採集　岩石を採集せむと欲せば、(一)必ず大なる岩塊より打ち缺きて取るべし、川の流石又は小破片より採る時は、木質を損せるものを拾ふ患ひあり(二)外部の崩壞又は變質したる處を避け、新らしき部分より採るべし(三)同一の岩石にして、異質のものあれば、各部より採るべし(四)標品は長方形に採るべし、決して不躰裁なる小片に取る可らず、略幅三寸、長二寸五分、厚五分位を可とす(五)採取岩石を荷作りする時は、相磨れざる樣、鉋屑又は藁等にて詰め、各札紙を附して採集の場所年月日を記したる後包むべし。

▲植物採集　植物を採集せむと欲せば(一)ブリッキ製の圓鑵に紐を附して、肩より斜に腋下に提げ、其蓋は絕えず開閉を要するが故に、簡且堅ならむを要す、大なるだけ採集には便なれど、携帶には不利なれば、適宜なるを選ぶべし(二)根を掘り、或は岩生のものを掻く用として、小柄の鎌、若くは有柄の鐵鉤を用ふ(三)吸濕性を有する紙帖、又は和本の不用なるものを準備して、凋落し易き花、若くは散亂紛失の恐ある小植物を壓搾するに用ふ、但し成るべく日々水吸紙を新にして腐朽を防ぐを要す。(四)斯の如くして採集したる植物は、必ず腊葉となさむことを要す、腊葉といふと雖、葉をのみ採るにあらず、草の小なるものは根より拔きて好く洗滌し、然らずんば花と果實を有するもの、若し著大なるものは上部と基部、若し又隱花植物ならば注意して芽胞又は蕃殖器を具ふるもの等、成るべく良品を擇ぶべし、殊に奇卉珍草にして專門家の判斷を乞はんと欲するものは、成るべくだけ、其全躰を具ふる大形標本を採るべし、莖の一片或は草の一部分を採り、粗雜に壓腊したる如きは、殆ど何等の用を爲さずと知るべし。

(五)花の色は腊葉となしたる後は、大概變色して遂に辨ず可らざるに至るべきを以て、採集の際に一々花色及形態を詳記すると共に、採集の時日場所をも併せて細錄し、或は採集地の小景を寫生するも至大の便あり。(六)腊葉に製したる標品は、厚紙即ち臺紙に貼付し、其一隅には名稱產地採集年月性質効用分類等必要の事項を記載し、之を架

上筐中に貯藏するときは、樟腦を紙に包みて其間に置き、以て害蟲の蝕を豫防し、爾後此藥品の補足に心を用ふべし。

▲登山者の德義　いかに珍奇の植物と雖、少數なる場合には悉く之を採ることなく、其中の良種數株を殘すべし、是れ天下の一品を則絶に歸せざるに先ちて、保護を如へ繁殖を計らしむる道にして、人間が造化に盡くす第一義務なり、徒に之を根絶して、冷酷なる自己功名心の滿足を專らにするが如きは、鄙しむべき小丈夫といふべし。動物に於ても亦然り、法律によりて定められたる銃獵期限內に於てならば、保護鳥以外のものは悉く之を獲殺し得と信ずるのもは、實に「自然」の罪人なり、其他自己の下山に際して既に設けられたる掘立小舍、或は石室の類（自己の手に成ると、他人の建てたるものとを問はず）を破毀し、或は燒損する如きは、其已むを得ざる事情に迫られたる外には、斷じて之を行ふ可らざるのみならず、時に或は力の及ぶ限り、之を修繕して後の同好の士の困厄を救ふの用に供するを以て、登山者の公德とす。凡そ一二日の登山（殊に他の上下頻繁なる富士御嶽等を出入するの類）には、以上の如き準備と戒心なくして可なり雖、數十里に綿亘せる峻山系に分け入りて、風餐雨虐の間に、多大

の日子を費さんとする人のために、聊か參考に供したるのみ、人或は以て婆心に過ぐるとなさむも、我は今茲に殘棋一坪を打了したる快感を以て、筆を洗はずんばあらず。

第六章　山と紫色

其角なりしか、誰なりしか、（作者の名は今忘れたれど）『富士は申さず先づ紫の筑波山』といふ句ありしと覺ゆ、この紫の筑波といへること、平生余の意を惹くこと甚だし。

關東平原を樹形に截り劃くこと方何十里、武藏野の名を負ひたるところ、波うつ尾花はこゝに颯々天空を蹴り、波系一たび紛紛するや、尾花は銀の穗尖を閃めかして一齊に俯し、其間を振り分けて、白蛇の如く蜿ねれる遁げ水は、四周を沮洳たらしめ、水分を含める濕風を起し、自生の榛の木は水分を吸ひて四肢節くれだち、傘を張りたる如く處々に屯ろし、翔くる禽や、鳴く蟲や、是れ自然の樂童、その蔭に一休して太古の夢を洗ひたるもの、いつしか人間に侵掠せられ、尾花は燒かれて土を肥やし、榛は枝葉を剝がれて秋穫の稻干に用ひられ、白堊の城壁兀として地平線上に挺き、人烟天に冲りて萬絲を紡ぐ如く、車輛牛馬坦々砥の如き途に相屬し、八百八町の大江戸となり

て、土一升金一升と謠はれたるまでの幾變遷を、知らず顏に人の世の時代といふものを、高く超脫したるさまになりて、愈よ白きもの西に不二山あり(『武藏野の雪轉ばし』)か富士の山』(德元)愈よ紫なるもの東に筑波山あり、『西に不二が根、北には筑波、思ひ競べん、伊達小袖』(鞘當)といひけむ如く江戸人士が到るところの武藏野的丘陵に佇みて、渴仰するところの山は、實にこの二山の外にある可らずと雖も、江戸が全體に於て最も感化を蒙れるは、近きだけ寧ろ筑波に在る如し、例へば「筑波おろし」といへば、いかに江戸の百萬戸に、震慴の警報を傳ふるぞ、筑波が江戸のために山的晴雨計となれること多きだけ、江戸人士は筑波の色に親炙すること久しきなり。

秋天霽れたる夕、吾人試に飛鳥山頭に立ちて回頭するとせよ、北東よりかけて、東方に那須野を隔て、遙かに常陸の八溝山を望むべく、更に東に轉じて、孤聳せる桔梗の閉瓣の如き、純紫色の鈍角峰を見るべし、是れ言ふまでもなく筑波山にして、その分岐の右なるは明らかに男體、左なるは女體なり、若し嚴格にいへば、男體いかに高しと雖も、海拔僅に八百米突のみ、近傍に高山なきと、平野の中央に屹立せると、殊にはこの山以南の平原杳茫、土は軟かく丘は卑きが故に、この少隆起の堅硬、光澤、傲

元を異として、無數の王冠を戴かしめたるに因るに過ぎずと雖も、江戸人士が渴仰の眼には、區々たるメートル的測量なくして、只だ透明なる深紫の秘光を、雙肩より放てる一個の巨人を視るのみ、しかもその巨人は富士及びその他の山嶽が、宗教の根原地として、徒に畏れらるゝ如くならず、一朶瑠璃の大塊に不可解不可說の藹氣をこめて、この心則ち江戸人士の心に適ふものあるがためなるなからんや。更に精しく言へば、武藏野平原は等しく洪積層地と雖も、支那や露西亞に見るが如き老年平原にあらずして、少年平原なり、今若し少年を代表する色に、縱まに紫を以てするは、獨斷に失したらむも、余は白よりも紫を以て、活氣あり、情慾ありとなす、不二と筑波とを比すれば、彼を姉なる天女となし、是を弟なる天童となさむ、即ち是れは至つて若きなり、江戸紫といひ、若紫といふ、吾人は却つて少年を聯想す、「少年平原」に君臨するに、「少年色」を帶べる此山なかる可らざる所以也。

由來我が邦語は、何につけても語類の豐富ならざるを疾とすれど、殊に色彩の名詞に乏しきを憾むは、輙ち詞人の一致するところなるべし、若し西洋人が碧に普魯士碧、伊太利碧の名を與へたる例に倣ふべくんば、吾人は紫に筑波紫なる名を許すの不可を

見る能はず、日に七たび色變るとぞいふなるこの山色を、季節、天候、時刻の如何に係はらず、漫に紫と斷ずるは早計なれど、吾人はこの山に代表せしめられ得るほどの色を求めなば、紫はいかにしても動かざらむと思ふ。

凡そ色の性質は音樂の如く、其調和と不調和とによりて人に快不快を與ふるものとすれば、抑も紫の色たる三原色中の二なる青と赤とを保ちて、所謂第二原色なるものを醞釀し、稚氣と客氣とを揑和混淆したる如くなれど、外人は青を以て「希望」を表はし、赤を以て「愛」を示し、邦人は青を以て「未熟」に比し、赤を以て「誠心」に象どる、是れ孰れも少年の事なり、然れども件の「少年色」が一たび山に刷かるゝや彼が如き神色を有するに至りては、只人間の想像以外に、不可思議なる天命の、宇宙間に存在するに懼然自失するのみ。青や赤や、決して弱色にあらず、故にその深さ比しく、印象の力迭に下らず、結局まで相補ひ相佐けて、地の色より抽きて泛ぶが故に、夕の昏や、朝の白を以て、その周圍を輪廓すれば、神光奕々、誰がその兀々たる頑石なるを意はむ、知るべし紫の成因たる、件の青といひ、赤といふ、うら若き姉妹の二原色の抱合より生れ、江戸の如き少年都會の家々の窓に、屏顔を容れらるゝ運命を負へることを、是

れ正に「紫鉢卷」に濶達豪俠なる理想の市民を觀、「紫茄子」に脆美なる肉食以外の佳味を賞する、江戸人士の趣味嗜好に合するものにあらずや。

然れども余がこゝに說かむとするは、いかなる山を以て最も紫色多きとなすかに在り、即ち山と紫色の關係に在り。

此頃頼山陽が小島船山なる人に與へたる書翰を讀むに「夕」といふことを「山紫水明の比」と洒落て言へるがあり、山紫水明、是れ支那詞人常套の熟語なるを、彼は無意識に使用したるなるべしと雖も、之を京都の夕昏に用ひて、山紫の二字最も適切に活躍す、余は京都を知ること極めて尠しといへども、今猶比叡と比良の山色を記憶す、京都の山は概ね紫影あり、紫影にあらざるまでも菫光あり、京都の山が多く花崗岩にして、筑波山の又花崗岩なるに想ひ到り、往年木曾山中に入るや、淺間、蓼科、八ヶ嶽、戸隱山、御嶽等火山の尤物が、遠近一ならざれども、概ね蒼は碧玉を半空に挿み、夕は暗鼠色の陰影を太虛に涵すが中に、ひとり駒ヶ嶽（花崗岩より成る）の純紫色に凝りて、秋空に脈搏すること、紫嚢の蜃を振ひて蹶起する如くなるを、上松の蕭條なる古驛より仰いで、はしなくも詩人島崎藤村氏の『木曾谿日記』に、

木曾川のほとりに添うて行くうちに、早やけふも暮れる、野尻の宿へつくまへに、駒ヶ嶽にうつる、美しい夕照を見た、この夕照の色は、純粋な紫で、木曾通な奇應尤の説には、駒ヶ嶽にある紅葉へうつる夕日の色が、遠くあの美くしい彩を見せるのであらうと言つた、ことにあたりの高山が、皆暗澹としてゐるなかに、獨り駒ヶ嶽が桔梗の花の色のやうで、どこやら透明な光を帶びて、靜かな空にかゞやいてゐるさまは、殆んど畏かと思はれた。いつぞや箱根の湖水にうつる富士を見たことがある、これがやはりこの紫であつた、自然の色のうちでも、黄とか綠とかいふ色は、到るところに見られる、生粋な紫の色は、自然の惜んで藏してあるものだ、容易には人間の目に觸れない。(十一月三日)

と言はれたるに想ひ及ぼし、更に近日石井理學士が、厦門(アモイ)附近を遊歷せられたる紀行を讀むに、氏は花崗岩のみ殊に際立ちて紫色に見ゆと斷言せられたる等を綜合して致ふるに、花崗岩と紫色の關係は、螺旋の如くに卷旋して、造化の秘壺中に藏せられ、千年萬年、天綬を帶べる一人の來りて、之を覬破することを待つにあらずや、余は自然に對して色盲患者のみ、しかも筑波パープルは、神手を以て花崗の大壁に塗抹せら

れたる秘色なるを、斷々として信ずるを妨げじ。

素より夕刻の山は、花崗岩以外なりとも、多少の紫色を含まざるにはあらず、ラスキンは紫色菫色藍靛色を以て、山の特色となし、一般の景象が山あるために變化あるは、實に是等の彩色を有する山嶽を背景に負へるときにして、綠樹翠田にも、幾多の紫影を宿すことあれど、純粋の紫色は、山中に在りて初めて之を觀ると言ひぬ、されどまこと全く花崗岩にあらざるアルプスを熟知して、この言の標的となしたるラスキンをして我國に再生せしめ、武藏野平原に反映して紫色の量を潑する筑波を觀せしめ、周回七十有三里の銀盤に沈んで、紫の鎔液(マグマ)を盈たせる比良比叡を觀せしめ、木曾川の畔湍、雪を吐き、山百合の葩を飛ばし、四山の秋香を搖蕩して奔るところ、駒ヶ嶽の天色、空氣の厚層を透して、水平線上に下り、水と拍つて竟に紫影を泪沒するところを觀せしめば、之を何とか言はむ。

先づ紫と花崗岩の關係を知ること、以上の如くならば、是より進みて、何故に花崗岩が、特に鮮やかに紫色を示すかを研究せざる可らず、かのラスキンは吾人を戒しめて言ひけらく、總べての山嶽に於て相等しき土塊の外、何ものを見ず、總べての岩石に

於て、相等しき固形分子の外何ものを見ず、總べての樹木に於て相等しき枝葉の外何ものを見ざる如きは、是れ其人の思想の高き證據にあらずと、吾人は徒に青山綠水山紫水明等の熟字を、有らゆる山水に應用して、止むべきにあらず、いてや花崗岩紫色の原因を視はむ。

夫れ無色透明の水も、層を累ぬれば玻璃色を呈す、今若し空氣の如きは、先づ物の無色透明なるものなり、しかもその厚層を成すや、人烟や塵埃の浮游物と映發して、一種の色と名く可らざるも、亦全く無色と言ひ難き副色を生ず、この色は淺海の水色が、その底なる岩石藻草の色によりて、變化するく、背景の如何によりて、種々に變幻し、偶ま發動する水蒸氣の量測を借りて、何物をも現實と遠からしむること、猶古代の如く、神秘の如く、詩の如く、錆の如からしむる力あり、しかして花崗の石たる、堅硬なる割合に、粗粒分解し易くして、葱の皮を剝ぐ如く爬痕白きを致す、その白きや、無味無色水より甚だしき空氣層に反映して、水が玻璃色を出だす如くに、桔梗色を生ずるなり、かの赭岩磊落、近づいて視れば奇醜なる不二山も、雪を浴びて純白なるとき、夕の空氣を穿ちて蘆湖の淨水に映り、所謂「箱根の逆さ不二」を示すときの深紫は、亦

この理に因る、是れ空氣層を通じて觀たる其一なり。

花崗岩は劍理し易きが故に、樹木を生ずること困難なれども、筑波山の如き、攝津山城諸山の如き、オニミカゲの種類に屬するものは、容易に靉靆する鐵氣に富みて、蘚苔を生ずるは、石燈籠、庭石、又は將軍廟の石塔の如き、年代久しからざるも、既に此物のために古色を生ずるを以て知らるべく、その苔は、かの火山岩や、その他の山地が、赭岩、黑松、山毛欅、樺、落葉松等の簇生に、縱抹堅塗せられて、黃褐色、帶綠黑色を呈するものと自ら異色を有するは其二ならむ、こは植物を加味して觀たるもの。

花崗岩は諸鑛物の聚合にして、その主成分なる石英、正長石雪母は言を須ひず、斜長石、角閃石の如き、皆光澤を放射すれど、之を精級に分類すれば長石の肉色を含むあり、同族の閃長石となりて更に一分の暗色を加へ、猶閃綠岩となりて、暗色は寧ろ黝暗の程度にまで進み、或は碧色を作る。是等の諸色が綜合せられたるときに、紫色を作らずして、他に何をか發せむ、是れ單に石そのものに就きて觀察したるものにして、其三ならむ。

以上の三理由は、山の紫色を呈する全部の原因ならざるまでも、一部の分子に處るべ

きを信ず。

去年余は甲斐に遊びぬ、甲斐には雄邁なる花崗岩、遙かに迦具土の神知ろし召す火山岩を凌いて、高く天にそゝり立つ、その最も高きもの、東に金峰山塊あり、西に駒ヶ嶽山彙あり二ッのもの、此國の四境に屯ろして、重且厚なる波狀線を描き、殆んど六十度の鋭角を成して鐵壁を截り立つ、余はこの二大巨人の禿頭に辷べり上りて、億萬年の昔、これらの山の兀起するとき、先づ地底にて赫奕たる溶液を作り、その上に横はれる片岩砂岩等の岩層を左手右手に押し退け、高く霄漢を突破したる草創史の初一卷を色讀し、且つおもふ、此石の一半性、脆剝の弱點を有するを以て、その同血統なる片麻石と結托するや、頓に高邁を成すこと、筑波の如く、比叡の如く、木曾飛驒の諸山の如く、天龍峽谷の如くなれるは、中興事業全く成るものにあらずやと、山を下りて金峰山下に紫の黑水晶を鬻ぎ、甲府平原に紫の葡萄を産するを見るに至りて、中古史を去りて現代紀に遷るおもひあり、しかもこの山一夕の紫色を染め成して、天外空水を別たざるところに、濃く澱むを仰ぐに至りて、人間六千年の歴史、畢竟何物ぞやと叫びぬ。

山是に至りてはじめて活く、山の活くるにあらず、色の活くるなり、色の活くるにあらず、紫の活くるなり。

鬱科の山紫に明け易き

山と紫色の說を作る。

第七章　裾野及湖沼

山嶽といへば、何人も先づその「高」を豫想す、飛驒の天生峠、大天井岳、秩父山脈中の大雲取、小雲取の如き、名詮已に靡天捉雲の靈嵩を想はざるはなし、「峻」を意味するものには、劍山(阿波)立山(越中)等の名、口角を載し來る、「大」も亦山名に冠らすに適當なり、大山(伯耆)大山(相摸)より一切經山(岩代)の隆起を大巓といふが如き、皆然り、ひとり山に最も飲けたるは、夫れ廣濶か、則ち山といへば何人も狹隘を連想し來る、殊に山頂は突立して地積局々、從ひて地熱を反射すること尠し、寒烈一層を加ふる所以なり、然らば山岳竟に廣濶なきかといふに、必ずしも肯んぜざるは、裾野の延展あればなり、日本は山嶽國、曠野大原に乏しきは素よりなれど、冲積及び洪積

の新紀層より成れる平野を外にして、火山の裾野あり。

所謂裾野の成分は、一樣ならざれど、火山噴出物の霧爛したる赤土、及びそれより解弛せる火山砂の原層、或は膠結したる火山砂層より、多く臺礎を作るものにして、或は被らすに塊塊質の土を以てす、故に必ずしも潤翠滴るゝ如き森林を有すと言はざれども、一旦秋草の花亂咲するや、紅綠黃摺、不斷不綴の蝦夷錦を布き、野馬薇莽の間に奔蹄長嘶して、會ま秋天の高朗は、一層裾野をして寥廓無邊ならしむ。

本州中部にては不二の裾野(甲、駿)の如き、八ヶ嶽(信、甲)及び之に連なる蓼科山裾野(花牧原)相對する淺間山の裾野(六里ヶ原追分ヶ原)の如き、飯綱ヶ原(信州戸隱山、飯綱山、黑姫山の麓に展開す)裾野の如き、中國にては大山(伯耆)三瓶山(石見)の裾野の如き、東北にては所謂「南部駒」蹄を振ふて秋に嘶ゆる岩手山の裾野、牛馬群游の別天地を成せる鳥海山裾野の如き、はた東西凡そ九里、南北約七里に亘れる茫々水平なる那須活火山の麓、那須野ヶ原(全體悉く裾野といふにあらざれど)の如き、一々列擧するに遑あらず、孰れも山岳の垂直的肢節より、水平に近き大乾盤を緩斜して出だす、これらの裾野に色衣せる草は、概ね桔梗、女郎花、男郎花、野菊、積撫子、ハシバミ、

ウメハチサウ、木楡、山躑躅、刈萱、キツチザサ、ギボウシ、ヒメユリ、ホタルブクロ、欵冬、虎杖、鬼薊等にして、木は楢樅、楊樹を主とし、波系八千艸の糾紛を指揮して、色彩を流動せしむる魔杖の如く立つ、而して粉蝶燦然、アサギマダラ、クヂャクテウ、コムラサキ、オヽムラサキ等(那須野ヶ原所見)この間に宿を借り香を吮ひ、翩々然として無心に翔ける、是れ豈茫々渺々たる「草の海」併せて「色の海」にあらずや、山岳に曠濶なしとは、必竟裾野を見ざる無火山國民の言のみ。火山國民にして、恬然他の口吻を襲ふて恠とせざるに至りては、忍ぶ可らず。

就中風光最も豪放寥廓なるを、秋の裾野となす、詩人島崎藤村氏、著はすところの『藁草履』八ヶ嶽裾野を舞臺として、その背峭を描くや、文字優に盡域に入る。

晴れて行く高原の霧のながめは、どんなに美しいものでせう。すこし裾の見えた八つが嶽が、次第に嶮しい山骨を顯はしてきて、終に紅色の光を帶びた巔まで見られる頃は、影が山から山へ映して居りました。甲州に跨る山脈の色は幾度變つたか知れません。今、紫がかつた黃。今、灰がかつた黃。急に日があたつて、夫婦の行く道を照し始める。見上げれば、ちぎれ〳〵の綿のやうな雲も

浮んで、いつの間にか青空になりました。

あゝ朝です。

男山、金峰山、女山、甲武信嶽、などの山々も殘りなく顯れました。遠く其間を流れるのが千曲川の源。かすかに見えるのが川上の村落です。千曲川は朝日をうけて白く光りました。

筒袖の半天に、股引、草鞋穿で、頰冠りした農夫は、幾群か夫婦の側を通る。鍬を肩に掛けて行く男もあり、肥桶を擔いで腰を捻つて行く男もあり、煙草入を腰にぶらさげ乍ら隨いて行く兒もありました。氣候、雜草、荒廢、瘠土などを相手に、秋の一日の烈しい勞働が今は最早始まるのでした。

既に働いて居る農夫も有ました。黑々とした『のつぺい』『土の名』の畠の側を進んでまゐりますと、一人の荒くれ男が、汗垂になつて、傍目もふらずに畠を打つて居りました。大な鋤を打込んで、身を横にして仆れるばかりに土の塊を鋤起す。氣の遠くなるやうな黑土の臭氣は紛として、鼻を衝くのでした。夫婦は他の働くさまを夢のやうに眺め〳〵、茫然と考へ沈んで、通り過ぎて行きましたのです。

板橋村を離れて旅人の群に逢ひました。

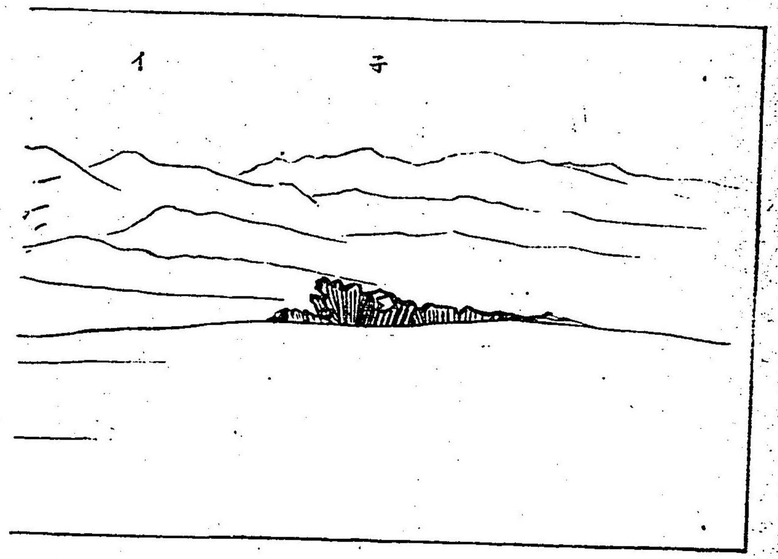
高原の秋は今です。見渡せば木立もところどころ。枝といふ枝は北向に生延びて、冬季に吹く風の勁さも思ひやられる。白樺は多く落葉して、高く空に突立ち、細葉の楊樹は蹈るやうに低く隱れて居る。秋の光を送る風が騷しく吹渡ると、草は黃な波を打つて、動き靡いて、柏の葉もうらがへりました。こゝかしこに見える大石には秋の日があたつて、寂しい思をさせるのでした。

『ありしをて』の葉を垂れ、弘法菜の花をもつのは爰です。

『かしばみ』の實の路に落ちこぼれるも爰です。

爰には又、野の鳥も住隱れました。笹の葉陰に巢をつくる雲雀は、老いて春先ほどの勢がない。鶉は人の通る物音に驚いて、時々草の中から飛立つ。『ヒユヒ〻、ヒユヒ〻』と鳴く聲を聞いては、思はず源も立留まりした。見れば、不恰好な短い羽をひろげて、舞揚らうとして、やがてばつたり落ちるやうに草の中へ引隱れるのでした。

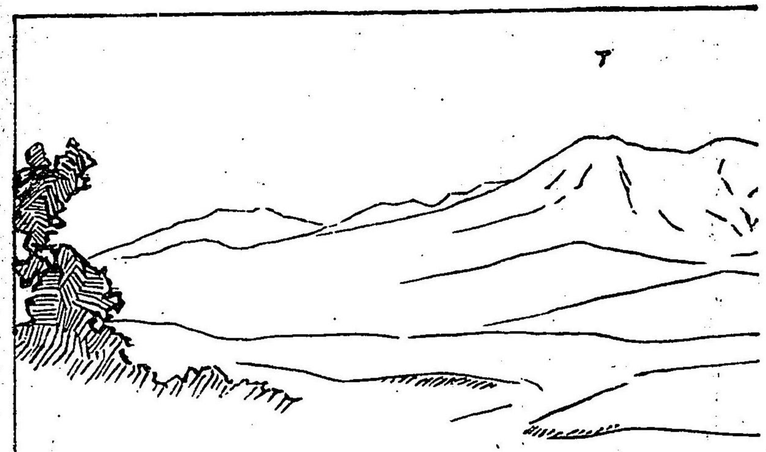
第五圖



八ヶ嶽東方裾野より

外の樹木の黄に枯々としたる中に、まだ綠勝な蔭をとゞめたところもある。それは水の流れを旅人に敎へるので。そこには雜樹が生茂つて、泉に添ふて枝を垂れて、深く根を浸して居るのです。源は馬に飲ませて通りました。今は村々の農夫も秋の勞働に追はれて、この高原に馬を放すものもすくない。八つが嶽山脈の南の裾に住む山梨の農夫

第五圖



八ヶ嶽群山ヲ望ム（チ）根石岳（イ）硫黄岳（ア）赤岳

ばかりは、冬季の秣に乏しいので、遠く爰まで馬を引いて來て、草を刈集めて居りました。

日は次第に高くなる、空氣は乾燥いでくる、夫婦は渴き疲れて休場處を探したのですが、さて三軒居は農家ばかりで、旅人のために蕎麥餅を燒くところもなし、一ぜんめし、おんさけさかな、などの看板は爰から平澤迄の間に見ることも出來ないの

てす。據なく、夫婦は白樺の樹の下を選つて、美しい葉蔭に休みました。

裾野の美、斯の如し。

人あり曰く、山嶽の美は、その行雲に兀立する「男性」美に在り、流水を吐く「動」美にあり、未だ「女性」美にあらず、「不動」美にあらずと、然れとも山中千古の止水あることを知れりや、即ち山湖是れなり、奔流雷の如き溪谷のみが、何ぞひとり水の美を恣にすと謂はむ。

本邦湖沼の美に乏しからず、東京附近には、若藻參差、浮萍夢の如く、蘆芽寸寸青き霞ヶ浦、印幡沼、手賀沼あり、第三紀の海底陸地となり、その深さもの殘存して湖をなせるものなり、周回七十三里、霞ヶ浦に二倍する琵琶湖の如き、おそらくは古代の海灣ならむ、はた東洋のゼヂバを以て稱せられたる出雲の宍道湖（湖上寒威霽更添、銀濤亂走北風殿、夜來新下仙峰雪、削出雲間白一尖、釋天鱗）周回十一里、大小諸川を呑吐して、馬潟の瀨戸を通じ、東は中海湖に達し、遂に東北日本海に出て、秋風と共に鱸を思はしむるより松江の別名ある如き、或は羽後八郎潟の如き、若狹三方湖の如き、加賀の河北潟の如き、砂丘を海口に搆へて、その內側に湖を作りたるものにして四國九州には著大の湖を見ず、僅に薩摩開聞岳の麓北、周回四里の池田池を有するのみ、各屠美を一方に擅にすと雖も、岸坦平にして水濁淺、或は海濤に拍たれて鹹臭あり、塵俗の氣を脫せざるを奈何。

山中湖ひとり然らず、その極小なるは三州篠島（知多半島の岬と、伊良胡岬間の小島にして、全島花崗岩より成る）の頂尖に湧ける帝井の如き、方五六尺の小池なれど、水滾々溢れて小流を成し、潺々聲を作す、蓋し岩塊に存する縱の裂線は、毛細管引力により、地下水を吸收して山頂に上らしめたるものならむ、その他甲斐金峰山頂、花崗の大塊に湛へたる方寸不凋の晶水、飛驒乘鞍嶽頂三十餘個處の小窪水、木曾御嶽の五ノ池を初めとして、その大なるものに至りては、火山湖中最大の猪苗代湖（周回十六里）磐梯、安達太郎の群嶂を倒影して、湖水透徹、帶黃藍色、滄波渺として烟るが如く、その會津高原より高きこと百米突に在るを信じ得ず、抑も東北の絕勝十和田湖中央の水心深邃にして、三百尺の垂繩猶到底せず、殊に其周圍は、絕壁にして嵯峨の老木鬱翠、綠晶の湖水と反映し、八甲田山五千尺の影を折りて之に累なり、湖水その重きに堪えざるを見る、更に北して北海道に入るや、摩周山下の同名湖、腎臟形を成し、外

壁の周圍約五里、樺(高處に)椴松(低處に)綠雫を揮ひて湖水愈よ佛頭青に澱む、又近くは有珠山、遠くは海拔六千七百尺なる羊蹄マッカリの高峰に對し、周圍十里の大圓鏡を開ける洞爺湖、水深碧にして油の如く澄み、沿岸火山の凝灰熔岩、渥丹色を作し、累々として三方に峭立し、楢は銀色に、オンコ蝦夷松は亭々雲を衝き、黄葉、楓、楡、樺、青に一味の淡黄を交へて、空色と反撥し、その間に交はれる欵冬殆んと人を凌ぎて高く、桂、白楊、亦葱茂し、啄木鳥飛び來り、鵼啼く、其光景は眞に神代以上の物なり。斯の如き神祕なる風物は、山中湖殊に火山作用より作られたる湖に在りてのみ、見るを得べきものにして、等しく火山湖といふも、噴火口に湛ゆるもの、噴岩溪谷を遮斷して、こゝに水を滙ゆるもの、噴起の際山岳間に窪地を生じて湖と化生したるもの、地辷にて水路を壅きたるもの、地の陷沒したるもの等、成因一ならず、山中湖の本邦に名あるものは、前に述べたるもの以外に、訓路湖、阿寒湖(訓路)大沼、蓴菜沼(渡島)支笏湖(膽振)恐山湖(陸奥)鳥ノ海(羽後)藏王沼(磐城)檜原、秋元、小野川、五色沼(岩代)大沼、伊香保沼(上野)中禪寺湖(下野)蘆の湖(相摸)不二の五湖(甲斐)大池、大丹生池(飛驒)千蛇池(加賀)等、本州中央より以北に偏在す(信濃の諏訪湖は、從來

火口湖として知られたるも、今や全く火山に何等の關係なきものと定められたるを以て算せず。)これらの湖の多くは、山頂或は山腹に在り、海拔極めて高く、就中白山の千蛇ヶ池の如きは、氷雪之を殿封して、無水池たり、一朝氷雪溶くれば、千蛇横行すと稱す、しかも氷底雪底より、先づ溶けて刃を植ゑたる如く峨々の斷崖を急下し、日本第一の白水瀑となりて、直下一千百六十尺、白粉を飛ばし、白醴を流し、白石と映發して、霧四迸、海の如く、滔々射水川の源流となる、白山の神、泉源にて供米を洗ひたまふが故に、水彼が如く白しと土俗はいふ。

多くの火山湖中には、赭土澁水、丹を揑したるが如く、氣味惡しきもの亦是れなきにあらずと雖も、晶水玻璃の如く、神骨冷肅、之に臨めば邪念雪の如く消ゆるを覺ゆ。

余かつて一萬尺餘の飛驒乘鞍嶽頂に佇立し、山腹の「大池」を下瞰し、之に擬して文を作りぬ、まことは實在を離れたる、我が假設の火山湖のみ、しかも傳說や、俗謠や、人物や、光景や、皆實見したるところを、湊合したるものに係はるが故に、未だ高山幽邃の絶湖を知らざる人のために、左に示す。

湖心記

三才駒に乘鞍置いてよ――おいとし殿さをお迎ひに――。

とは蕎の蕎麥畑にて、姉さま冠りの清しき音色に聞きし。その鄙唄に因みたる銀の乘鞍を象りたりとにはあらず、楕圓尖頭を成せる山毛欅の葉の影、ふわりと淨玻璃の水のおもてに落ちて、そが上になだれて躍り入りたる落葉樹針葉樹の千朶萬葉は、音なく水色絹の皺をする〳〵と這ひ、吾が乘りたる小舟の搖ぐに伴れて、櫓を推すところ利鎌に刈られたる稻穗と仆れ伏したりしが、縫ひ目も知らぬ一碧萬頃の襞、いつしか襞されて素との鏡と靜かなるや、水上の梢は梳がれて離れ〳〵になり、太くして疎き圈線を、瓔結し、層疊し、透かし視れば翡翠の羽を漂はせるに似たり。

船は渚を離れて、はや十反ばかり遠し。ころは十月の初めつ方、この湖を圍める太古の森は、神木犇々と襖を作りて、風も洩らさじと密やかなるものから、日の光線は木蔭に幾本となき縱縞を描き成して、扁柏の木などの青く翳せる間より、ミヤマモミヂ、オニモミヂ、ハウチワカヘデ、櫨の葉なんどの、さすがに奥飛驒の深山なれば、はや

色づきて籐黄なるが、兩々對比して、はかなき綠色を凝り成しつ、慘たる秋色、湖の緣を罩めてけぶれり。

空を仰げば砥きわたりたる連翹色を掠めて、をり〳〵摘み綿よりさゝやかなる白雲の、何物かの魂の如く、ふわりと流れ去るばかり、森の頭を挺きたるわたりの湖水は、日に煌々として洋靛を溶かしたる段だら染め、おッとりと重く沈みて、――淸水なれば輕しといひたまふな――我手ながら、浸せば象牙より白し。

森を離れて水のひた寄する岸の斜面には、摺附木の原料に宜しとか聞きたる、ドロの下枝の俯向きて梳けづれるところ、何といふ禽ならむ、禽としては輝くが訝しく、星としては唄ふがおもしろし。峭壁は乾の一角に高く、水蝕作用といふものにや、陶器の釉藥にふさはしかるべき褐色の粘土、鮮やかに剝がれて、これのみは生きたる色にあらず。三方は皆淺渚、弓狀に灣入して、船を前むること七八町、深きも五尺には過ぎざりけらし、さるにても搖き方烈しくなるに隨ひて、湖底は頓に急斜をなすとおぼえたり、もとより何の準備もなき飄遊の身の、錘鉛法にて測りたるにはあらねど、六七十米はありぬべし。たとへば湖の底より水の面を突き破りて、挺き出てたる（この

世にはなくして佛典には見えたりといふ）自然生の大木の、小俣いくつにも岐れて、駱駝の背の如き瘤を湖上に波うてるは、わが乘鞍嶽にて、彼はこゝなる嬰兒を抱ける乳母にてありけるなり。その山の麗はしき色よ、雪ある頃、日を吸ひて紅玉の如しといはゞ塗に過ぎたり、山腹より裾にかけて碧玉に似たりといはゞ索に失はずや、圓けれども紫衣の聖僧の化現にあらず、崇れども白衣の觀世音のさらびやかなるにあらず、たゞ念ふ「自然の伽藍」の朝暾を受けて、白堊の天壁、高く高く萬有に聳ゆるなりと。この路を指せる路すがら、男、我に語りぬ。恋に湖水の靜けさを領する人は、山丈の妬に遇はざるもの稀なりと。男はこの湖の傍に板小屋を結べる獵夫の忰なり、小紋付の短布を上衣に、タテツケといふ股引めきたるを着けたる常服一襲、木曾の樵人と違はず、腰には鉈一挺、臀のほとりには、方一尺許の熊の毛皮を下げたり、歩む毎に腰をひた〳〵と叩くこと、小兒の提ぐる巾着といふものに似たり、木の根岩角ところ嫌はず、柔くして厚き好個の布團を有す、山家の富も亦おもむきある哉。

その山丈よ、髪をおどろに振亂したるが、ざわ〳〵と木の實の礫を雨らすばかりに、森に波うたしながら、渚まで歩み寄り瓜先立てつ、兩掌を光りたる口に宛て、錆びたる聲にて、オーイ、オーイと呼ぶなりとか、赭らみたる頬の間より、聞らかなる眼の光り、おもひやるだも毛骨堅つなり。

船は櫓聲ゆるやかに、軋々として一個の靈魂を湖心に泛べぬ。大氣は乾きたり、天は冴えたり、空間は亂れ燒刃の匂ひいと高うして、手もて招いて之を嚙はゞやとぞおもふ。洋靛の水益す濃くなり、深くなりて、鹽味こそなけれ、紫の潮の永刧渦けるわたつみのごとく威くなりて、一歪一辷一皺一裂幾ど神經纖維の微妙なる活動を試るに肖て、猶熟ら仔細に視るに、寂寥夜の如しと想ひゐたるぞ不覺なる、蜘蛛手に亂るゝ水は、もの狂はしき精神的幻戯の、うつゝにはかなきに似たりけり。生平書冊に封死したる眼、忽焉としてこゝに睜くとき、船上の靈魂は水中に。

第八章　日本の高山深谷を跋渉したる外國人及び其紀行

一

一昨年の夏八月、余は同嗜好の一友を拉して、信濃と飛驒の境上に、雪漢を衝いて奇雲の屯ろする如くに屹立せる、本州無二の連嶺深く分け入りたりしが、その中の最高

山、海拔一萬一千六百餘尺、即ち高さは日本全國中、[illegible]のみ遜り、形は槍の穗を尖立する如きによりて、其名を負へる槍ヶ嶽を、攀づ[illegible]平にして日昏れたれば、土人が「赤岩の小舍」と呼べる自然の岩窟に、主人なる[illegible]共に合宿したることありき。その夜、樺を燃やして明を取り、熊肉を味ひながら[illegible]師と語り明かしたりしが、彼の言へるやう、かゝる深山なれば、我等の仲間か、岩魚釣りの外には、絶えて人の蹄りたりといふを聞かざりしが、只一度駭かされたるは、今より八九年前、思ひもかけぬ西洋人が登山し來れることにて、その日は大雨のため、頂上に垂んとするところより引き返し、此小舍に一泊して下りゆきたりしが、思ひ切れずや翌年同じ人亦來りて、こたびは絶巓を窮め、悅び勇みて下山しぬ、初めは鑛脉水晶などを目懸くる山師のたぐひかとも思ひしかど、二年三年登山に、させる振舞なかりしは、只好奇よりの游山にやあらむと、余も聽いて駭き呆れぬ、蓋し槍ヶ嶽の位置と、其異常なる雄峻の山貌とを知る程の人は、殊に好みてかゝる山の登攀を企つる外客が、尋常一樣の愛山家にあらざるを知ればなり、よりて其人の鄕國氏名を訊ねたれど、何事も知らずとのみ、毫も獲るところ無かりき。

しかも覺に、この心にくき外客を識る機會は、偶然にして來れり、當時余と同行したる友は、横濱なるスタンダアド石油會社に執務せる男なりしが、翌年の春、或日彼は主人なる外人より、一冊の洋書郵送方を囑せられたれば、何氣なく受けて標題を看るに「日本のアルプス」とあり、山を愛すること、我に劣らぬ彼なれば、早くも興ある書よと頷きて、偸み〳〵忙はしく飜展したるに、突兀として鼻先に尖り出でたるは、心臟を三ッ打ち違へたる如き山形の寫眞にして、一瞥するより槍ヶ嶽の麓を流るゝ梓川の急湍を渉りながら、仰ぎ視たる海拔一萬一千五百餘尺の、穗高山なるを知り得たり、既にこの山在焉、この山と肩を駢ぶる高嶽大嶽の、簇々書中に收められたるや知るべきのみと、猶仔細に檢するに、槍ヶ嶽登山記前後二章ありて、二ヶ年つゞきの二回登山、即ち知んぬ、この著者こそ獵師が語れる外客なるを、著者は誰ぞ、余が是より紹介せむとする、牧師ウォルタア、ウエストン氏°(Rev. Walter Weston)

しかもウエストンとは、何國の人なるか、出版書肆の倫敦なるに據りて推すれば、必定英國人とは思はるるものから、其人今何處に在るやを知らねば、茫として書中隔世の人と相識りたる感ありたるのみ。

されど偶然は踅獨にして來らず、氏に面識する機會は、端なく一葉の英字新聞紙の媒介によりて、吾友に捉へられたりき。

某日のジャパンメイルに、アルプス登山探險談を、横濱山手なる公會堂（メブツク、ホール）に講ずる旨の廣告あり、講者の名は夢寐の間にまで忘られざりし彼の人と知りえたる歡びは、譬へむ方なかりし。

ウエストン氏は山手なる某館に寄寓したり、曩日のアルプス登山談が緣となりて、友先づ彼と生面の交を訂し、後幾何もなく、余は友に伴はれて或土曜日の夕に、彼を訪ひぬ、忘れもせぬ春雨しめやかに、新泥靴の踵に膠くほどのときなり、地藏阪を四分の一許上りて、右へと折れ、なほ細徑を屈折して平坦なる高地に出づれば、間もなく彼が家なり、常春藤に纏はれたる墻を入れば、軟芝の綠氈を布きつめ、庭内淨うして一塵を留めず、刺を通じて、入口より直ぐなる應接間に待つこと暫時、室内に掲ぐるところは悉く是れ山嶽の寫眞にして、アルプス山最も多く、天空、皺皺、自ら西歐の物なり。やがて隣れる書室より、出て來りたる紳士こそ『日本アルプス』の著者なれ、英國人としては寧ろ短軀の方なるべけれど、肩胛濶くして肉緊り、骨勁く、その方形の顏に、

英人特有の剛毅なる硬性を眉端口邊に皺描したれど、眼細く頤肥えて、半面宗教家たる忍辱相を示す、過般みまかりだる探險家スタンレイ氏、亦短軀にして溫貌なりしと聞く、おもふに同型の骨相ならむか、友の紹介にて握手一番、日本人と違ひて寒暄を叙す世話もなく、率直に導れて氏の書室に入る、圓卓を圍みて椅子三五臺あり、寛懐腰を下す、壁間農商務省製の日本大地圖を懸く、卓上新渡戸博士の英文武士道あり、氏が日本を研究するに熱切なるは、その他書架に挾める冊子の題名を瞥見しても知らる、氏は槍ヶ嶽以下の寫眞數十葉を出だして示されぬ、その多くは『日本のアルプス』に挿まれたるもの、山毛欅の林、雪を吐く奔湍、天を摩す高山、奇醜なる容貌扮裝の獵士等、列ね來らば宛として日本中央大山系地の說明圖幅に値ひす。話次余問うて曰く、槍ヶ嶽や、實に日本に第二位を占むる高山、之をアルプスに比す、高さは勿論及ばざるべきも、嶮は如何、氏首を掉りて曰く、槍ヶ嶽の嶮の如きは、アルプスに幾峰もあり、日本山嶽中、嶮絕アルプスに比すべきは、先づ赤石山か、白峰（しらね）ならむ、しかも白峰を尤とす、優にアルプス最嶮のものと匹敵するに足ると。

又客室に導かれて、氏の夫人に紹介せらる、俱にアルプスに登りたることありといふ

に吃驚し、去年の秋も二人して富士に登り、雨りこめられて室に宿ること二日に及べりといふに、愈よ夫人の健氣なるに感嘆す。其他日本山嶽に關して余の質疑に應へられたるもの二三ケ條あり、今一一錄せず、余自ら踏破の山嶽多きを許すも、氏に較べ來らば、褒貶の材料薄きに靦愧の情なき能はず。

絮談數刻、辭し去るとき、氏は諄々として人間に宗教なかる可らざるを說き、己の胸間に閃ける金十字標を指して曰く、日本人の姓に源平といひ、藤橘といふ、皆代表的の紋章を被ぶりて、自家のプライドとなす、僕の如きは仰天帝地、この十字標を戴くを榮とすること、猶公等が祖先の紋章に於けるごとしと、因つて山嶽對宗教の小話あり、余等好意を謝して退く。

二

アルプス登山講話會にて、ウエストン氏を聽衆に紹介したる某宗教家の言に聽く、アルプスは同氏の數回探險したるところにして、泰西の地學辭彙、アルプス山の條に、ウエストン氏が取りたる登路を註記するものあるに至るといふ。氏が日本に渡來したるは、何年の頃なりしか聞くを得ざりしかど、初め神戸に永留して、その地の教會堂

を牧し、毎年夏に至れば、中央大山系を跋渉して倦色なく、その踏破了したるものを擧くれば、富士山、淺間山、御嶽、駒ヶ嶽、立山、大蓮華山、乘鞍嶽、槍ヶ嶽、穗高山、常念嶽、燒山、笠ヶ嶽、赤石山、及び白峰等にして、その中三分の二は、一萬餘尺の高山として且つ人跡稀なる深山として、本邦の地學者、山林家、植物學者、氣象學者等と雖も、此點に於て氏と競ひ得る者幾人かあらむ、氏の登山を語るは、氏の著『日本のアルプス』詳密に之を能くせむ、日本は山嶽國といふと雖も、全國民に山嶽の知識至つて乏しき今日、玆に此書の梗概を左に語るも、無益なる業にあらざるべきか。

本書の標題は、『日本アルプス登山探險記』（Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps）なれど、その長きを以て普通に『日本アルプス』として知らる、一千八百九十六年倫敦のジョン、マアレイ（John Murray）より出版せられたるものにして、一卷なれど大冊なり、氏の山嶽を愛するや、英國に在りてはアルプス倶樂部の會員として、斯道の人に知られ、日本に來りては、日本亞細亞協會（ニッポン・アジアチック・ソサイエチー）、及び東京地學協會員に名を列す、卷中に地學協會の會員承認狀を寫眞版にして出だせるは、イザナギ、イザナミの二尊が、左右に直立正顏して、海山を瞰下せる枠畫を、外人の眼に奇とした

ればなるべし。

表紙の覆紙（バーンサンド）の模樣は、氏自ら語るところに據れば日本登山結社中の尤物として、幾千の會員を有すと稱せらるゝ巴講なるものの徽章を寫したる由にて、氏は此講中を絶東のアルプス倶樂部と稱せり、所謂徽章は赤玉にて旭日を現はし、その中に黃色にて不二形を描き、巴紋を捺す、不二の直下㊫字あり、盡し不二の東口を意味するのもか。

著者の白するところに據れば、本書植物及び地質學の有益なる記錄に對しては、かの嘗て鑛山局の雇ひ外人として、且つ信濃飛驒山脈の探檢家として知られたる、ウヰリアム、ゴウランド氏に負ひ、風俗、習慣迷信等に對しては、帝國大學の講師たりし、チャムバレイン氏の『日本事情』（シングス、オブ、ヂャパニーズ）に負ひ、寫眞挿畫等は、登山の同伴者たりしゲルケル氏、及びハミルトン氏に負ひ、その他獨人ドクトル、ラインの日本地學に關する述作、また種々の點に於て、參考に資したるを謝すとなり。

本書の寫眞は、三十五枚、いづれも高山深谿にあらずんば、原人時代を憶起せしむるに足るべき土人の風俗等にして、此種の撮影としては、空前の奇品、邦人の旅行家と稱し、寫眞機を擔ひて砥の如き坦路を車行する輩の、夢にだも覗ふこと能はざる境地

に屬す、別に地圖二葉を卷尾に附す、其一葉は日本全國の大躰圖其第二葉は信飛地方の切圖にして、自己の行踪を逐ふに易からしめんため、朱線を引き、卷中の記事に一目連絡の便を與ふ、即ち南の方木曾の寢覺の床及び駒ヶ嶽より起り、北の方姫川及び富山灣に終る、東經百三十七度より百三十八度までの間なり（赤石山は除かる）

本文は十六章より成る、第一章より第十三章までは所謂日本アルプスの記事にして、第十四十五兩章は、日本の風俗習慣に說き及ぼし、神おろしの濫觴、弘法大師の靈驗記、狐憑の話などにて充たさる、第十六章登山準備論を以て結ぶ、登山外客のために、服裝、食物、用具等のヒントを與へたるものにして、ガルトン氏の『旅行術』（アート、オブ、トラベル）を愛誦する程の人は、邦人と雖も聽くべし、況んや是れは特に日本山嶽のために立言せられたるものなるをや、その第十三章までの遊跡を、順序を追うて示さば大約左の如し。

一千八百九十一年（明治二十四年）七月の下旬、東京を發し、汽車にて横川に到り、（當時は汽車未だ輕井澤に通ぜず）輕井澤まで馬車を僦ひ、淺間山を登り、追分驛に下り（以上第一章）上田より所謂『文明』に告別して保福寺峠を下り、信飛境上、屏風を結ひ繞ぐらせる崇嶺の大觀を讃嘆し、松本に至り、それより槍ヶ嶽に登りたりしが、絶頂を窮む

る能はずして松本に返る、(以上第二章)かくて桔梗ヶ原を經て、舊木曾街道に入り鳥居峠を踰えて福島に宿し、上松より駒ヶ嶽に登り、裏山越えに伊那に出で、天龍川を下りて神戸に返へる(以上第三章)之を第一回遊となす。

翌二十五年八月初、ドクトル、ミルラアと共に岐阜にて汽車を棄て、飛驒を横斷して乘鞍嶽麓の平湯溫泉に浴し、乘鞍嶽を踏査す(以上第四章)次いで笠ヶ嶽の天嶮を攀ぢむと欲して果さず、再び槍ヶ嶽を征して目的を達す、この時斧斤未だ入らざる深林に、ハムモックを吊りて夜泊し、滿身に月影と白露とを被ふること雨の如くなりしといふ、かくて松本に凱旋す(以上第五章)それより人跡未到の赤石山を探險せむと思ひ立ち、松本より鹽尻、鹽尻より本山峠を踰えて松島に達し、高遠より市の瀨市場を經て、大河原に至り、七釜の犇湍險流を溯りて、赤石の絶巓を踏破し、下山の途次、大雷雨に遭ひ、峽底に露臥して、詩聖バイロンがチャイルドハロルド中の一節を憶起するを禁ずる能はざりしといふ、已にして元の路を高遠に戻り、金澤峠を下りて甲府に着し、秋澤より富士川を下りて岩淵に舟を棄つ、(以上第六章)第二回の登山旅行は、是を以て終を告ぐ。

明治二十六年の夏は、同志の伴侶なかりしため、一人旅に決め信州長野より大町に入り、針木峠の絶嶮を越ゆるに野臥二日して、立山溫泉に投ず(以上第七章)是より立山に上り、一旦富山に出でたりしが、踵を回して二たび飛驒に入り、二たび笠ヶ嶽の登山を企て、又失敗して平湯に戻る(以上第八回)平湯を發して本州無二の急河梓川を渡り、穗高山を懸猿して山中に夜營を張り、松本に返へり、次いで上田に至る(以上第九章)第三回の登山行は即ち是れなりき。

一千八百九十二年五月、英國劒橋(ケンブリッヂ)なるトリニチイ校の教授、モンタギユ、ハフォルド氏と共に、岐阜より美濃の最高山惠那山に登り、信州伊那街道に出て再び天龍川を下りて、濱松より汽車にて鈴川に至り、表口(大宮)より五月十五日といふに富士に登りて神戸に歸る(以上第十章)こは中央大山系の踏査と關係なし。

明治二十七年同行者二人を獲たり、一人は名古屋のハミルトン氏にして、此人嘗て加那陀(カナダ)落機(ロッキー)山頂に天幕生活の經驗ありと、他の一人は邦人の通辯なり、直江津より糸魚川に至り、姫川の左岸に沿ひて越後の大蓮華山を登攀し、信濃の青木湖を周ぐりて大町より松本に入る(以上第十一章)かくて梓川に沿ひて、橋場より三たび飛驒に入り、

平湯蒲田の二溫泉を經て、三たび笠ヶ嶽に登山を試ろみ、始めて之に成功し、然れども大難處を踰えて、松本に歸り、引き返へして海拔一萬五百十一尺と註せられたる笠ヶ嶽に登り、絶巓に露臥して、又根據地なる松本に歸る(以上第十二章)これより木曾の福島に着し、御嶽に登る(以上第十三章)以上第四回の旅行を以て、日本アルプスの登山探險、全く是に完了す

若し夫れ、白峰の登山に至りては、後遊に係はるを以て本書に收錄せられず、白峰の麓に白蛇の蜿れるが如く流るゝ野呂川の窈冥なる深谷は、去年八月、親しく渉査して、當時のジャッパンメイルに紀行を寄せたり。この他、氏の登山に就いて、親しく余に語れるところに據れば、明治三十六年、淺間山に第三回登山を試み、甲斐の駒ヶ嶽に上り、三十七年には甲斐の金峰山、及び鳳凰山に上り、地藏ヶ嶽に轉じ、白峰に第二回登山を試みて成功し、間ノ岳、千丈ヶ岳等無人境を踏破し、野呂川溪谷を傳ひて、甲州より信濃高遠に出て、後夫人を同伴して戸隱の高妻山頂に昇り、妙高山八ヶ嶽を究めて歸へり、甲斐吉田口より、不二を踏んで、御殿場口に下れり、この中鳳凰山の外人登山は、氏を以て嚆矢となし(或はおそらく日本人も絶少ならむか)戸隱山に外國

婦人の登攀は、氏の夫人を以て嚆矢となす、夫人亦不二の噴火孔底(內院)に下り、內外人の覩るものをして、膽を寒からしめぬと、これらの紀行は未だ公にせられず。或は言はむ、如上の山嶽、險は則ち是れあらむ、本邦の寒邑僻地、素と是れ凶暴獰惡なる蕃人を見るにあらず、山川沼澤に疫疾を釀もすべき蠻烟毒霧を吹くにあらず、されば本州いづこを跋渉したればとて、敢へて探險(エキスプロレーション)の二字を冒す如きは、僭の極にあらずやと、然れども外客にして、是等の山地に踏歩するとせむか(一)言語に不自由に(二)平生美味爽衣に慣れたるが故に、粗食垢衣の二事、輙ち身體を毀損せしむ、我等片田舍の粗糲に慣れたるものと雖も、かゝる山中の食物は一層堪へ難きことあり(三)儲偷宿泊を托するに、富士の如き堂室なきを以て、山頂、谿澗、深林、石床、いづこにも風餐露臥せざる可らず、是等の困苦は中央大山系を知らざるものゝ、寧ろ了解に苦しむところにして、我等僅に二旬の登山行も、被髮毳として皮膚赭黑なるを致せるに、自ら駭くことあるを以て推すも、いかに此地方の旅行が外客に困難なるかを知らむ。

氏自ら曰く、飛騨國山民の言語は甚だ奇異なる訛とアクセントより成るが故に、都人に

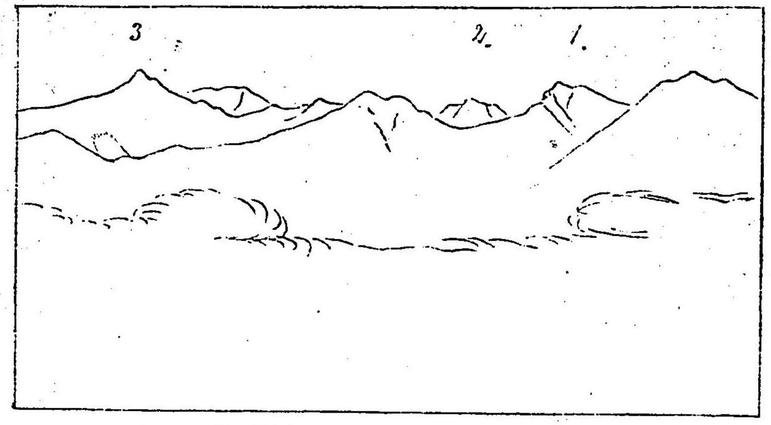
は解し易からず、殊に母韻の不規則は普通となりて怪しまれず、例へば二里といふことが、いかにしても「ヌル」と明ゆるの類なり、余は數回旅行の後、山民と遠來の旅客(日本人)との間に立ちて、通辯の勞を取りたることあり！と。

三

從來日本に關する外人の旅行記にして、出版されたるもの、尠きにあらざりしかど、その多くは人事に局し、しかも輕浮皮相の觀察に止まりたれば、切つて寃を我國に被らすもの、十の六七に處る、偶ま自然を說く者と雖も、眞に日本の自然を代表する、是等の大山嶽を擧げたるものは絕無なり、蓋し邦人と雖も、中央大山系の山嶽に至りては、其名を知るだに多からず、此時に當り獨りウエストン氏の、日本山嶽のために、熾に氣を吐き、絕東の島帝國亦この絕大の巨人あるを弘く知らしめたるは、日本山嶽の恩人として、我等愛山家に、永く其名を記憶せらるゝの人なり。

日露戰爭の起るや、世界皆瞠目して『駭(アッマイアレーブル)　魄(ジャッメニース)すべき日本人』といへり、氏の日本と日本人を絕愛するや、既に早く日清開仗の當時に之を豫言せり、曰く『東洋人にして泰西の文明を同化し、適用する力を、匹儔なきまでに顯はし、しかも猶國粹を銷磨せずに

第六圖



(1)白馬岳　(2)立山　(3)槍ヶ岳

戸隱山五地藏峯より西に白馬連山を望む(三十七年七月廿日)

保存せるもの、世界は日本に於て始めて之を看たり、豈啻に是に止まらむや、今先見するを難んずるほど、啓發の未來は、この駭目すべき人種を待てり、國民が國威宣揚の前程に向ひて進めるは、幾んど想像以上に在り』と、然れども氏は『日本アルプス』を著はす所以を述べて曰く、是の如きは本書に於て論ふべき我が題目の外に在り、余は却つて四年間、中央日本の山系に放浪したる記錄を附與することを企つるに止む、余はかしこに在りて、所謂代表的日本風景と、幾んど相涉らざる豪壯宏大の

風象を觀じたりき、一方に於て余が娯しき交遊の特權を獲たる、慇懃なる葛藤の、原人的風俗、及び迷信も、尠き注意に値ひするとは言ふ可らず。

かくて從來日本を觀察せる外客が、行李忽忙の途上に得たる瞥見を典據として、その瞬間の印象を廓大するを陋なりとし、

只だ余にありては、此非議より免かれ得るに庶幾らんか、以下の紀行及觀察は、多くの方面に於て日本國中最も趣味ある土地なるにも係らず、從來幾んど世に知られざりしものを、冒險し探究するに、六星霜を費やして、献げられたるなりき、そこには本洲が最大なる幅員を有し、山脈は壯大なる比例を保ち、住民は最も嬐容ありて親しむべし。

又曰く

旅人もし、大都府、若しくは條約港を後にして、中央日本の內地に突貫せんか、大山脈の豬內には、原始的小舍の中に蠢動せる、單純愿愨なる田舍漢と驢唔して、吾人は幾んど別世界に搬ばれたるを感ずべし、いかにしても此時、吾人の四周は十九世紀よりも、寧ろ九世紀のそれなり、著者は數年前、その恠奇なる山貌のために、

博士チャムバレインをして、いしくも『日本のアルプス』と呼ばしめたる大山脈に眼を轉じ、かくて數回探險の結果は、この國のいかなるところにも四儕を見る可らざる壯嚴と、美麗を信ぜしめぬ、地面は是れ山嶽にて八分の七を占め、他の全國が人間に侵掠せられたるに對して、是れは依然天然によりて分離せられたる「仙郷中の仙郷」なりき、而して今猶島帝國の全域中、いづこにも是の如く大變化に饒多なる天然美を認むるを得ず、たとひ山嶽に氷河の偉觀を有せざるにもせよ、その他に至りては、亞熱帶植物の豐富より、アルプス帶的氷雪まで、缺くるところなく備はれり。と、中央大山系の風物を讃嘆して盡くせりと言ふべし、思ひきや同胞五千萬人、頓首して之を外客の口より聽かざる可らずとは。

彼が如き讃美を以て、毎頁に威嚴ある山嶽の幻畫を開展したる本書は、終に臨みてかくの如くして、余は日本のアルプスに告別しぬ、げに彼等(山嶽)は氷河によりて尖截せられたる、奇峯の光榮を有せず、彼等の天外に懸列するや、尺度は僅に瑞士アルプスのそれに比して、三分の二に當るのみなりといへど、その谿谷の畫樣美なる、その大塊腹に衣せられたる、幽闇にして太寂なる深林の如き、余が歐羅巴アル

プスに邂逅したる、何物にも克つを覺ゆ。

と嘆稱して、中央山嶽の幕を閉ぢぬ。

なほ進みて彼が日本アルプスと、歐羅巴アルプスとの間に立てたる、比較觀察を略叙し、東西兩巨人の性質を知らむか、彼は先づ日本登山家の風俗を、アルプスのに比較して言へらく、

日本のアルプス倶樂部は、歐羅巴のそれと異なり、只だ是に先達あるは猶彼に Conductor あるがごとく、山の祠前にて着衣に押判するは、瑞士アルプス登山講中の一種の、或階級に流行せる、賓習慣の一を憶起せしむ、日本山嶽中の堂室は、瑞士アルプスの『倶樂部小舍』に類似したり

といひ、飛驒の險流高原川に沿ひては、マットロック岸、及びダアウエント河を憶ひ起したれど、是れ遙に彼等を拔いて大觀なりと賞し、山地特有の牧場小舍を視察して、その家族組織の團欒を奇とし『瑞士のスゴー(Sugo)は、却つて日本に在りて存す』といひぬ、殊に高原川谿谷を激賞して『全光景はアルプス谿谷を總躰に搬び來りたるが如く見ゆ』といひ、東西の姉妹美にあくがるゝこと斜ならず、その他槍ヶ嶽を「日本

のマテルホルン」と稱へ、常念ヶ嶽を「ウエイシホルン」(共にアルプス山中の嶮峰なり)に比したるは、後段の記事に看よ。

若し夫れ日本山嶽總督の天授を佩びたる、不二の女王に對しては、氏の之を崇敬すること、決して日本人中、最も多く不二を愛するものに遜らず、氏は不二山がいかに日本人と相渉りたるかに道ひ及ぼして曰く

不二の色彩、及び形態の美によりて、いかに日本人の藝術的本能——日本の各個人は、多きにまれ、少きにまれ、生れながらの藝術家たり——が印象せられたるかは、生活の各方面に於て、日常の用品が、その魔色の再生に向ひて、多くの機會を供するを以て知るべく、各種の扇、屏風、茶器、漆器、室内裝飾の彫刻品、庭内の築山、さては毎日着る婦人の衣裳まで、凡そ全世界中の名山のために、この天然を絶愛する國民が、親しき驚嘆を無言の中に立證せざるはなし。

と、好個の富士譜。

不二の登山は、毎年七月十五日に始まり、九月十日に終る、今より一百年前、春季に登山を企てたるものあることを、ジャパン、メイルの記事に見たることありしが、近

代春季と冬季とに登山したるは、野中至氏なるべし、是より先、ウエストン氏は五月に一回、十二月に一回、登山して剛力を駭倒せしめたり、殊に後者に至りては、氏のいかに富士に忠實なるかを知るに足るものあれば、左に抄記す。

一千八百九十一年、十月廿八日の大地震後、間もなく大なる缺陷が、俄に東側の登路、三分の二許なるところに生じたりといふ飛報一たび傳播してより、此國在留の外人中にも、尠からぬ驚愕を惹き起したりき、然れどもそは大山壞れて鼷鼠出づる底のものなりき、事實は全く山形に、何等の變化を與へざりしなり。

翌年の十二月、余は不二の西麓なる、白絲の瀧を訪ひたるが、いやがる導者を強ひて、西口(村山)より登山したりき、而して所謂その大缺陷なるところに達したるとき、余は只だかの大坎が、一千七百九年の最後の破裂に作られたる以來、存在したる寶永山の舊穴なることを發見したるのみ、山麓を繞くれる村落の農夫や僧侶等は、この山の大變に就きて、何等與かり知ることなきに、飛報は刧つて日本の外人社會にまで普ねきのみならず、或歐羅巴の地學協會の一雜誌すら、次の如き記事を掲ぐるに至れり。

「高さ一萬四千呎(フイート)なる、日本の聖山、日本風光の背景に於ける永劫的標本なる、不二山は、輓近の地震のために、今やその崇高なる圓錐形の大部分を壞されて、幾何的整齊の體式を缺損せり」

と、斯の如くして、氏が挺身の踏査によりて、訛傳は訂されたるなり、我等の祖國を代表する唯一名山のため、一言の謝辭なくして可ならひや。

是より氏の文藻を覗はむ、氏の文章は、宗教家一流の乾燥枯淡なる弊に陷らず、色あり、脩あり、故に書味に潤ふ、しかも一面には輕光淡彩、觸れて惡氣味ならざるユーモーアを出だす、質樸太古に似たる山中の頑民が、初めて外國人を視て駭倒する光景を叙するとき、往々にして、頤を解かしむ、山頂大霧に遇ひて"Viewed the mist but missed the view"(霧を觀たり、しかも景を失ひたり)と言へる如き、音調上より來りたる地口なれど、上品なる洒落と言ふを失はざるべきか。

信州保福寺峠より、始めて信飛境上、日本アルプス連山を仰いで、その大觀に茫然自失する一節は、就中余の愛誦する叙景文字なるを以て、左に譯出す。

余は今まで放心したりし大山脈の全景を、初めて俄視したり、事不意に出でたるを

以て、余は殆んどその壯嚴に駭仆されたりき、山鎖の中央、及び南部の全體は、吾人の脚下に横臥せる松本平と、その外方飛驒の「荒寥國」の間に、大障壁の如くなりて、吾人の前、西の方へと昂まれり、高さ一萬呎(フィート)、及び其以上を雪に縫はれたる隆帶と、壯嚴なる高塔は、沈みゆく日の猫眼石的の諸色を呈する空に、聞く且鋭き外廓を作して突起せり、日本のマテルホルンなる槍ヶ嶽や、その高雅なる三角形は、ペンナイン、アルプスの女王なるウエイシホルンと呼ぶに足るべき常念ヶ嶽や、遙か南方には成層二重尖頂の乘鞍嶽や、各特性ある横斷鋭角面を呈して眼を眺へり、我等がこの壯重なるパノラマの大觀を縱まに樂しみしとき、夕は直に夜とすがれゆくなり、これらの窪みたる高地にては、日光を洩らすこと微けくして、日は俄に弱く死するなり。

以上にて本書の一般を解說しえたりと信ず、しかも我は、全然本書に敬服するものにあらず、恐らくは著者の版圖以外なるべき字義の詮索となりて、穂高山は穀穂の如く、高く挺くの謂ひなりと附會したるが如き素と「穂」は「秀づる」を約めたる「ホ」の宛て字に過ぎず、上州伊香保の「嚴秀(イカホ)」に於ける、日向の高千穂に於ける、その例いと多か

るべきを知らず、又立山の別名を「リウザン」と言へるは、支那の古風名稱(クワシカル・ネイト)、龍山の事にして、この龍といへる奇怪(ミイシカル)なる妖物(モンスタア)は、島帝國の多方面に傳說的關係を有すと言へる如き、前と同じく假に便宜上欲せられたる漢字を原名として、正面の解釋を試みんとしたる過失に墮したるものにして、まこと「リウザン」は立山を音讀したる土人の稱呼なるをや、嘗て某外國の雜誌に富士山命名の由來を解剖して、『フジとは富士(Rich Scholar's mountain)の謂ひ』と言ひたると、其笑ふべき誤謬を一にす。これらの小疵を除きては、我等にすら多惱なる地名の讀み方の如き、叮嚀に土人に質して然る後記するを以ての故に、寧ろ日本人の紀行に見えたる早合點のものより、正確なるに感ずるのみ。

四

余はウエストン氏を日本山嶽の紹介人といへり、然れども徒に自己の嗜好に阿ねりて、山水の形骸を彫るもの、假令之を能くしたりとも、僅に刀鋸の功を誇る工人の事のみ、氏に取るところは、その眞人なるに在り、氏自身塵寰に居りて、高山的性格を發揮し來るに在り、尋常の外客が、ゲイシャを羨談し、リキシャ(人力車)を嘲罵して、得意

の色を外はすにあらずんば、自然は則ち瀬戸内海、工藝は則ち奈良日光を說くものゝみなるに當り、氏ひとり刻苦して名山記を艸するの嗜好は、之を氏の人格より發ひ來らずと言ふ可らず。

嚮に東北飢饉のことあるや、氏單身その地に入りて食を獲るの匱乏に堪へながら、審に視察してその愴惻骨を刺す如き通信文を、ジャッパン、メイルに寄せ、遍ねく外客の同情に訴へぬ、その精力の悍絕せる、さすがのメイル記者をして勁人（ヴイゴロウスマン）の稱を附與せしむるに至れり。

先年甲斐の白峰に登るや、雇聘するところの獵師某嚮導介抱頗る努む、氏竊に之を多とす、後件の獵師は、事を以て居村を出奔し、氏を便りて來るや、氏之を憫れみ、邸內に置いて活を得せしむること、僅に兩三日の面識者を遇するが如くならず、彼亦從僕の如く唯々虔服して事ふ、這般の情誼は、勞働と金錢の外、何物をも眼中に措かざる外人に見ざるところなり。

今年、日露開仗の事あるや、横濱在留の英米人等、軍人家族救助費を醵出して、之を愛國婦人會に托するの議を決す、宗教家にしてその發起人中に選ばれたるものは、實

に氏一人のみ、氏の愛鵬慈心、概ね此類なり、しかも氏は殆んど一身の顯晦を以て、意となさず是を以てかの口辯を費やして自ら售るの徒に比すれば多く世に知られざるが如くなれども、深厚なる心服者を青春の人に獲ること、氏の如きは內外人を通じて稀有なり、余は幾多、木綿の紋付羽織を着け、高履を踏み鳴らせる、剛健なる青年が、聖書を抱いて氏の邸に出入し、一夕の清話を聽くを歡ぶの狀を親しく目擊し、氏が頃日宗教學校を建て、我がために未來の健全なる國民を作る準備に忙はしきを聞き、平生横濱に在りて、營々錙銖を拆くに一生を勞役する猶太的白人中氏を識りて始めて景仰畏敬の念を生じぬ、況んや我の氏を識るに至りしは槍ヶ嶽登山に端緒し、アルプス登山談に握掌したるをや、この間我等が絕愛せる山嶽を介して、纒索を二人に繫がれたるを想へば、豈多少の奇緣なきを得むや、即ち玆に日本山嶽の紹介者を、紹介して、我が山嶽の恩人に、酬恩すること爾り。

附記

本年（三十八年）春、氏は招かれて本國に歸れり、歸るに臨み、氏が親しく撮影せる中

央大山系の寫眞帖を、英國公使マクドナルド氏の手を經て、宮內省に献し、乙夜の淸覽を賜はる、氏は又日光在住の畫家、五百木文哉氏に托して、日本高山植物圖幅を作らしめ、之を珍藏し、歸つて倫敦のアルパイン倶樂部に一幅を寄附せんと語れり、歸航の前數日、友人岡野、武田、高野の三氏と共に、氏をオリエンタル、バレース、ホテルに訪ひ、絮談數刻、氏、我等に囑して曰く、他日日本に高山倶樂部(アルパインクラブ)の設立あらば、必ず余を會員に加ふることを忘るゝなかれと、余等歡諾、しかも今猶その時機に達せざるを憾む。(氏の手翰は載せて卷首圖版第十一にあり)

第九章　森林美論

余は平生、懷に抱藏せる一個の疑問あり、曰く何故に日本の森林は、古代より今日に至るまで、詩人のために好題目とならざりしかと。

日本は海國なるが故に、浦島太郎の如き傳說を有して、今日は已に露伴子の『新浦島』鷗外逍遙二氏の新曲浦島の如き傑品を系統的に有するに至れり、然れども同じく日本は山嶽國なるが故に、鬱蒼なる自然の大森林を有せることを知らざる可らず、日本の

森林に就きて一の神話を有せざりしことは、余の遺憾とするところにして、支那小說『搜神記』の飜案とおぼしき三保松原の羽衣を以て、滿足する能はず、希臘古代に於ける森林に對する神話は、頗る興味と訓誡とを有す、詩人ホーマアは曰く、山嶽林は神の住所なりと、希臘にては都市の近傍に遊林を以て諸神を祭りたりき、「樹木女神」及び「森林女神」なる語ありて、これらの女神は孰れも樹木より生し、又は樹木と生死を偕にするものと稱せられたりき、ホーマアに據れば、女神は泉源及び神聖なる遊林より成立せるものなるが故に、神話にありては森林と泉源との結合を以て、假人と見做し、之を女神と呼稱したるが如し。我邦に在りても、森林もしくは樹木を以て、神の棲處もしくは何物かの靈を宿せるものとして、之を尊崇したる俗說無きにあらず、「三十三間堂棟木由來」の如きは、大木を以て神通力あるものとし、有情の眷屬となしておもしろく脚色したるものにして、『千早ふる香椎の宮のあや杉は神のみそぎに立てるなりけり』の古歌の如き、亦單純なる木材以上の觀念を以て、敬仰せられたり、吾人田舍に旅行して、往々「神木」と稱せられ葛蕘のために注連を張られ、村醪を献ぜられ、無心の生物にあらざる待遇を受くるものあるを見受くることあり、例へば陸前宮城野

の大銀杏は、銀杏老母大神と稱せられ、乳を祈る母の詣づるが如き、又磐城の椿明神の如し。おもふに斯の如きは、日本人が樹木もしくは森林を對象として、多少の宗教心を火の燧石に發する如くに迸らせたる一例として擧ぐるを得べきなり。

吾人は淺草觀音や善光寺に賽するよりも、高野山や、比叡山や、伊勢大廟に詣づるによりて、息を展け神を潔うする想ひあるは、必ずしも人寰に遠かりたるためのみにあらずして、背景に森林を負ひたるがためのみ、獨人ヤンゾン、亦日本神社佛閣の建築を論じて、伊勢の內宮及び外宮に言及し、『此神殿は大なる森林の中にあり、材料は常にこの森林中より供給せらる』といひ

若し周圍の森林なくして、かゝる建築を想像すれば、誰か其神聖なるを想はむや、實に此の如き古朴の神殿が神聖化せらるゝは、全く周圍の大古の森林に基く、これ歐州の建築と大に趣を異にす、蓋し希臘の神殿、又は中世紀の殿堂は、常に獨立す、周圍と何等の干聯なし、日本古代の神聖建築は、全く自然と密接の關係を有す。

と。

色彩の潤澤、色彩の變化、皆かしこに兼ね備はる、蟲に禽に自然の樂音は、皆この幽

邃にして底を見はさず奥を示さゞる森嚴の境地に、悠々自適するにあらずや、水はその源にて酌めば最も淸しといふにあらずや、水が呱々として生るゝはかしこの庇の下よりならずや左手に「宗教」あり、右手に「美」あり、隻手の音聲もし聽く可らずんば、趣味の源泉、この二手の一時に一拍するを見て漲らむ。まことに宗教心と審美心と相距ること僅に一歩のみ、その宗教心はいかなれば神話を孕まざりける、その審美心は何故に詩歌となりて煥發せざりしぞ、古代詞人の巢窟なりし奈良や平安やが、平原地なりしため、竟に森林の趣味を解せられずして了りしためならむも、吾人豈恨みなきを得んや。

日本人は古來木に依りて生活す、王笏は一位(水松)より造られ、其衣は綿木にあらざれば、桑樹の營養を受けたるものなり、其家屋は殆んど悉く木造にして、食を煮るにも木材樹葉を以てしたり、美術品なる漆器も、漆木を有せずんば初より造られざりしなるべく、有名なる中尊寺の光堂の美術的價値は實にその漆に在り運慶の神技も、木像により發揮せられたり、一日も缺く可らざる紙も、楮縱その他の原料より製せられ、薪炭も木をのみ用ひ、交通機關なる橋梁舟筏も、皆木なりき。

木を要すること昔日の如く多からざる今日と雖も、森林は禽獸の游獵地となり、その落葉の堆積は肥料となり、水源地として涵養せらる、況んや神饌にも葉を敷き、糧食をも『旅にしあれば椎の葉に盛る』と歌はれたる古代をや、又況んや今日にても、飯を包むに朴葉を以てすること、木曾御嶽途上の如きあり（『鮓つゝむ朴の廣葉の二つ折』高樓）之を家屋は石、船は鐵、箸は獸骨、衣服も獸毛等より成れる他の諸國に比す、森林樹木等が、日常の經濟にすら大關係あるは、今日特に奇らしげに之を說くの要あらざるなり、されば『孟子』に『斧斤以時入山林、材木不可勝用也』と說破せられたりしかど、支那森林の大部分は、早くより豬芟せられ、哲人の嘆息を實にしたれど、日本のみは古來心をこゝに用ゆるもの多く、諸藩の山林には「留木」「御用木」なるものを定められ、官を置いて嚴重に之を守られたり、例へば木曾の五木、紀州の六木、阿州の七木、秋田の靑木、熊本の三木、平戸の三木の如きは、皆是れなりき。殊に木曾人士の如きは、木を誇りて、居常

『おもしろいぞや木曾路の道は笠へ木の葉が舞ひかゝる』と謠へるなり。

又土地に「森」「林」「木」等を以て名くるところ甚だ多く、今の軍港の吳の如きは、土佐

材木、安藝榑と併稱せられたる、榑の老深林より來りたる名目なりといふ。これらの大森林まことは物質上の必要より、保護を迫られたるにて、敢へて宗敎上もしくは觀賞的よりせられたるにあらずと雖も、その結果は美なる大森林を隨所に屯ろして、殊に大川の產ふ聲を響くるところには之に哺む處女の森あらざるなく、聖母の林を見ざるはなく、天と地とを接續せしむるために、山の起りたるところ、必ず地と水とを握手せしむる林の生るゝは、大井川の駿河田代山林に於ける、天龍川の赤石山脈に於ける、木曾川の信州御嶽山林に於ける、軍艦天城の龍骨を作りたる狩野河畔の天城山林、その他逐一擧ぐるに堪へず。かの七時雨山の如き、雨降山の如き、いづれも森林蓊鬱潤翠滴らんとするより來りたる名稱にあらざるなきか、非耶。

殊に日本を森林の分布上より觀察すれば、千島の極北北緯五十度餘より臺灣の極南二十二度に亘りて、森林の面積は殆と全國約七割の大部分を占む、之を西伯利亞の森林が一割弱、米國が三割を占むるに比すれば天惠厚い哉、殊に樹木の種類に富みて「木國」の名あるところすらあり。植物帶によりて區別すれば、第一榕樹帶（最暖地）第二黑松帶（暖地）間帶（溫和地）第三山毛欅帶（微寒地）第四白槍帶（寒冷地）第五偃松帶（極

寒地)この帶別は山林局報告に據る と變化して、しかも水平的(平地)に之を有するのみならず、垂直的(山嶽)にも之を有するに至りては、乾燥なる土に幾億萬本の詩的光線を加へたるものとして、苟くも些の詩情を味ひ得るものは、之を掌に取るを要す、抑も旃檀の林に雜樹なしと雖も、雜樹の林を旃檀となすもの、公等詩人の技術にあらずして何ぞ、今や本邦の詩に最も缺くところのものは、朴茂蒼遒の材のみ、詩人乞ふ靈情の羽翼に飛翔して、之を本邦の太古的、原始的森林より採り來らんか、庶幾くは人間迂腐の氣を脫せむ。

第十章　日本山嶽の生物

日本の地形地勢は、寒熱兩帶に跨がり、弓形狀の奚囊をなして、內に日本海を呑み外に太平洋に面し、たとひ汪洋たる大江に乏しとするも、大嶽兀々全國を十字斷し、地相之歪をきはめ、裾野は平蕪を布き、森林は幽暗に、溪流は險犇飛ぶが如く、加ふるに氣象萬千の變化ある天堂なるを以て、諸ろの生物一たび日本に渡來するや、飛來の蟲を膠着する機能ある蟲取スミレの如く、全國土はその土を以て、原を以て、行雲流水を以て、之を內地に卷旋し、彼等亦大洋を以て四周を包繞せられたるが故に、次第に

純日本的に性化せ　氣候の多變、溫度の高低に伴ひ、棲處を展轉推托する間、新種變種を作り、動物共に種類に饒多なるは、外人の駭目するところなり、啻に生物のみならず、人間も亦風土の感化上、至つて美を愛し、春は桃李を以て性情を染め、秋は桂蘭を以て言語を薰すといふもの是れにして、その極、氣象の變化の如く、人間亦『倏而晴兮忽而雨、悲兮欲啼喜欲舞』の感情兒となり、往々小兒らしといふ觀察を受くるは、大和民族の密みざる可らざるところならむ。

然れとも人間に亘るは素と本論の事にあらざるを以て、之を措く、試に生物の種類を說かむか、ライン氏のジャッバンに憑據すれば、東京平原の昆蟲を採取するも、一擧にして能く大英國全島所產の種類を獲といふ、況んや北海道には、寒帶の昆蟲發生し、九州には熱帶のもの多きが故に、彼の歐羅巴の如く、熱帶性の昆蟲を得むがために、亞米利加へ航し、寒帶性の昆蟲を得むがために露國の北邊へ跋涉せざる可らざる不便に比すれば、轉た天與の我に厚きを感謝せしむ。總べて島國は、その近接大陸に比して、植物動物尠なしといへる通則は、ひとり我が日本にのみ、適用するを許されざるなり。之を植物に見るも、シコタンマツ、白枠、椴松、假松、白樺、オホナラ、山毛

樺等より次第に南下して、椰子、洋菊、荔枝、龍眼、甘蔗、橄欖、檳榔、鳳梨の絶南境に至るまでの植物地理を一目し易からしめんため、到るところの大山系に、雲級圖の如く、藍を抹し、紫を凝らせる、高さは一萬尺前後、低きものも比例を越えて植物鬱葱せる山岳に就いて、垂直的分布（バナペンヂキヲラフィヂストリビューション）を作り、登躋一兩日にして自在に之を撿分せるに任せたり、殊に日本の中央は、動物となく、植物となく、山嶽それ自身となく、南來北來のものを衝突せしめ、交綏せしめ、調和せしむ、名和昆蟲研究所が、中央日本なる近海の岐阜に起り、全國中信濃の地實に兩日本間の地辷線にして、又關門なり、廣袤南北七十餘里、東西亦五十里に垂んとし、婆娑たる棕櫚、芭蕉等を有すると共に、蒼健の白檜、勁伏の偃松とを有するのみならず、大山巔の上、往々北海道千島等に限りて產せらるゝと思惟せられたる、草本を見るに至りたるは、やがて全國中信濃の地、最も博物思想に發達し、長野縣產岩石化石鑛物等のオーソリチーとして知られたる、奇人、兼ねて篤學者なる保科百助氏あるに至りたる所以ならずや、まことに信濃川と木曾川とは、日本中央を南北に流れて、所謂南日本北日本兩區劃のために、天型の溝渠を作れり、余かつて飛驒乘鞍嶽の北麓、平湯溫泉にて銀河を仰ぎたること

ありしが、この地亦兩日本の接合點なるを以て、北日本を代表せる檜は、南日本林界の棟梁なる樫と柯を交へ、森々然として空を衝くところを、天の川倒懸して水色天地に流る、嵐外句あり、曰く『山風や樫も檜も天の川』と、一枚石を以て全淵を壓する力あり（天の川の句としは、芭蕉の『荒海や佐渡に横たゝ天の川』と雙絶ならむ、彼は海、故に豪宕、是は山、故に崇高。）こは僅に其一例を擧げたるのみ、その天涯を咫尺にして、南北兩極を比隣したるところは、日本の把手（ハンドル）なり、この附近の山は、實に兩日本の關門を啓くに必須なる秘鍵なり。

平生萬人目睹するところの動植物を說くは、こゝに之を休め、山と動物、及び植物の關係に言ひ及ぼさんと欲す。

一　草に花の文あり、禽に羽の文あり、昆蟲に翅の文あり、翅の文中最も綾絹楚燦の美をきはむるものは、蝴蝶に在りて然りとなす、本邦產の蝶類、百七十餘類にして、臺灣產を加ふれば、二百種の上に出でむ、その中全國普遍のものもありと雖も、亦ヱゾシロ蝶の如く、津輕海峽以南に產せざるものあり、ギフテウの如く、本州をのみ畫廊として、こゝに翩々然生を聊んずるあり、フイリツヂン蝶の如き、沖繩臺灣諸島以

北に上り來らざるものあり、中に就いて這の高山性の郎女を擧ぐれば、日光白蝶の石灰白色的透羽を翩へして、一野黄白の花雜糅せるところに、仙遊せるあり、淺間山下の高原、土は赤褐に、山は鐵鏽に蝕され、淡蒼色の瓦斯、熔岩の厰隙より逆立し、噴下の石礫、磊々たるところ、衣するに野菊、桔梗、女郎花の芳芬を以てせる間に、粉黛せるミヤマヲツチンの如き、秋風披拂、百草摧くるも年々この故土を去らず、今に至るまで、猶全國中ひとりこの地をのみ限りて發生するなり、若し夫れ「さあげは」に至りては、處々の平原に珠履の童女の如く彷徨するが故に、必ずしも奇とするに足らざれど、夏形のもの、羽色瑰麗、飛翔力亦强く、偶ま海拔一萬二千尺の不二山頂、白山ケ嶽にオヽミドリシジミ等と共に、仙遊するを見ることあり（さあげは蝶の食草の如きは、不二山麓、太郎坊附近より以上に生ぜざるを以て、或は風に吹かれて飄揚せるならむと雖も）その他我は槍ケ嶽の登山に、八ケ嶽登山の花畑に、花瓣化魂して黄蝶、銀月を鈎して白蝶となれるが如き、可憐の小動物を多く見たりき。

二 之を魚に見る、谿谷流激迅、峽間を劈き、大石を抱いて走り、石石跳躍、滾翻して互層轉顛し、水之を嚙むて雪を噴き藍を濺らすところ、大サ針の如き魚あり、閃々

として隊伍を組み、游行す、偶ま人影を見れば低下して、黑子の如く小に、深潭に潜んで出てず、溪魚なる岩魚（イワナ）、山鮠（ヤマメ）即ち是れなり、鉆も溯り得ざるところを、彼等は刀の如き冷峭寒絶の水を衝いて、偶ま石の溪を斷つものに遇へば、潑々として二三尺も空を飛び、苟くも一水の滙するところあれば、方一尺の凹渚にも身を投ず、その剛健駭くべし、故に夏に入れば、獵夫は一竿を肩にし、三四日分の米糧を荷ひて、萬山環立の間なる大磵深潭にこの魚を漁る、獸獵は却つてその餘業なる奇觀あり。甲、信、飛、越の峽谷に最も饒產す、針の木峠間の黑部川、槍ケ岳山麓の梓川、白峰山下の野呂川等、尤も好漁場なり。（二魚の區別法は、岩魚は色やゝ黑くして、赤星を點じ、口圓らかなり、山鮠は白身にして、縱に藍色條あり、口少しく尖る、味最も脆美なり、大さは兩者七八寸に至ることあり）上流の魚は是れのみに止まらず、鱒の如きは幽暗の峽流中より、躍出して、水を覗へる紫蛇を捉へ、水中に引き入れて、之を食ふとは、伴の獵夫數の住々確見するところなりといふ、蕪村句あり『蛇を追ふ鱒の思ひや春の水』と、故に京都鴨川の上流岩船邊にて、川鱒（マヽ）を漁するには、蛇を餌にして激湍に伏するといふ、かの信飛境上に垂直線上の巉岩亢立して、雪白天に參し、高さを槍ケ嶽と競へる

穂高山、全山堅硬なる花崗岩より成り、山中の三湖、麗水晶透して玻璃の如く、

上池、中池、俱に大さ凡徑百四五十間、横二百間、魚多くあり、いわなどいふ、常に筏を浮べて、杣人等これを漁る、大なるものは一尺四五寸許、下池は大さ上池の半といふ、石楠花、池の周に繁茂して、花の色殊に麗し。(善光寺名所圖繪)

といふが如き風象は、中央大山系、殊に多く之を有す、深山幽谷の靈魚他になほ鯢魚(サンセウウオ)を產す、鯢魚は實に大古動物の遺孽、歐米に往々その化石を發見せらるゝ事ありと雖も、生物としては、全世界中ひとり我日本に殘存せるのみ、即ち日本の中央山脈より、本州の極西端に出で、伊勢、伊賀、大和邊の山脈に沿へる溪流に棲息す、最大なるもの五尺に垂んとす、土人或は之を祀れるものあり、主として北緯三十四度より同三十六度間の大山系、海拔二千尺より五千尺の高地なる、花崗の岩盤を奔れる、晶明流水に潜み、岩魚山鮀を喰ふて活く、生產力微弱にして絕種の時近づきたるが如くなれど、山中獨往の客にして、初めて之を窺見するを得べし、筥荷山中の所謂山椒魚は、寧ろ蜥蜴狀を成し、之と異種なりと雖も、亦一奇品なるを失はず、その他黑魚(サンセヤ、カジカ)(信州別所、

氷澤と稱する涼谷中に產す)の如き、殊に信濃の大黑姫山頂の大火坑中より、小黑姫を重椀形に噴起し、その雙壁間に横はれる弓狀の窪地に、一泓の淨水を湛へ、外腮甚大の深山黑魚(ミヤマ、サンセヤ、カジカ)をして游行せしむるが如き、高山魚の純粹標品ならむ。

三 日本禽鳥の啼かざるは、花の香なきと共に、大なる遺憾なり、西人曰く日本に啞禽多しと、惡謔と雖も然るを如何、是れやがて音樂の最も日本に幼稚なるを暗示したるにあらざるなきか、遮莫高山常住の禽として、奇なるものに雷鳥あり、

有鳥、烏形雉文、靑音低飛、性能慣寒、曰鵜鳥、見紹述文集、又栗山堂文、有雷鳥、雷鵜音同、蓋同物矣、而皆云、惟居加之白山與越之立山耳、蓋三山不生一草木、非鳥獸所宜棲止、而獨有此鳥、則亦一奇事也。(源士業、登立山記)

といふも、雷鳥の棲むところ、何ぞひとり白山と立山とのみに止まらむ、甲斐の白峰、鳳凰山、駒ヶ嶽。信濃の八ヶ岳、御嶽、乘鞍嶽、穂高山、槍ヶ嶽、祖父ヶ嶽、白馬嶽等、其他諸州の高山に普遍し、北海道千島の如きは、平原地に產す、歐亞大陸にも是れあり、その居る處は、決して「不生一草木」にあらず、風勁くして偃松の蒲伏するところ、岩高蘭クロマメの木等の狼藉するところに潜み、時に孤獨零丁、呱々と啼い

て寥立人を怖れず、形鳩に似て大に、夏褐冬白、脛脚趾距に鱗甲毳毛を生して獸脚に似、眼上一凹の紅を點ず、(北海道にては獵して之を市に售るものあり、人々毎冬二三羽を味はざるはなし、肉白味美、羹に炙に、皆可なりといふ。)その靈山雲霧變幻の間奇木珍草を衾として清唳するや、宜なり登山の道客、之を靈禽視して、加賀白山の道客、觀れば以て瑞となし、木曾御嶽に詣つるものは『御嶽大神の御使鳥』と稱し一二枚の落羽をも、十襲珍藏し、神官亦之を捕ふるを嚴禁するをや。友人河井醉茗、雷鳥の歌あり。

ふりにふりくる白雪は
群山秀れし頂上に
三冬眠る生物を
封じ籠めてもやむまじく

若き血、胸に溫ひる
鳥の柔毛は雪にして

宙に碎けし白銀の
星の塵こそ地に積れ

根は岩に這ふ落葉松の
瘠せて力のあはられぬ
雷鳥靈を傳へてか
冬の木、單り威を示す

帝座を降りし雷鳥の
變じて白し只白し

月の輪しるき荒熊も
恐れて洞を出てざるに

六合凍れる息を吸ひ
双の翼をはたくと見れば
天に渦捲く雪けぶり
氣象萬千眞白なる哉

雷鳥の外、山鳥として特種なるものに、佛法僧鳥あり、壯美なる深瑠璃色の羽毛を被ぶり、羽翼裏に各一個の白紋あり、嘴脚共に滑黄赤色（對馬產の標本に據る）その日光を浴びて翠蔚の森林を飛翔するや、美彩閃流、加ふるにその啼くや凄怨、上田秋成をして絶世の文辭を搆へしめたる所以也、その高野山に棲むもの、早くより世に知らる。

四 動物は先づ以上を以て足れりとせむ、乃ち植物に移り、本邦の花木を看んか、本邦の花は、之を歐羅巴產の物に比して、概して彩色鮮美、瑰麗、大サ亦彼に倍加するものあり、少なくとも彼にありて小咲する花は、是に大咲す、香氣に至りては之を缺く、然れども『朝日に匂ふ山櫻花』の、我國躰を代表せるあり、所謂ヤマザクラは、樺

太、滿州、朝鮮、及び清國の北部、中部に自生すと雖も、本邦に入りて、最も適處に生存したるものにして、殊に眉雪の老僧時に箒を輟め、落花深さ處南朝を說くを連想する、ヨシノサクラの如き、純乎なる國產にして、我が二十四番の春を矜式す、若し夫れ秋の代表者としては、本邦獨特の植物色美として紅を溯するもの、即ちモミジあり、誠に凋落性に附隨せる一大現象にして、歐米には秋山に紅葉なく、秋野に鳴蟲なし、蟲聲なきところ、又月と調和せず、『鈴蟲聲咽萩花路、月冷宮城野外秋』の清味を解する能はざるが故に、秋の重視せられざるは素よりそのところ、本邦にても所謂モミジは、低濕溫暖の地に無けれど、關東より東北高原地に亘りて、愈よ多く、且つ紅葉といへばとて、其色彩の多變なる、何ぞ必ずしも單簡なる「紅」に止まらむ、其深紅色を呈するものには、ミヤカヘデ、イヌザクラ、ツタウルシ、ヤマウルシ、ナヽカマド、ウリハガヘデ等あり、其緋朱燃ゆるが如く、岩石をも焦爛せむとするものに、ヌルデ、ニシキヅタ、ヤマボウシ、ニシキギ、ツリバナ、ゴヨフツヽジ、ミツバツヽジ等あり、恰も夕陽の朶雲の如く、櫻色を一抹するものには、ニレ、ブナ、トチ、ナラ等の喬木天に攢せるあり、淡として黃色素を漲すものに、チドリノキ、ヒトツバガヘデ、ダンカウバ

イ、クロモジ、トキハカヘデ等あり、十月中旬より十一月初旬に亘りて、本邦中央高原の「モミジ」を萃め、最も絕觀をなせる碓氷の、モミジ色美標品を、試に左に列ねん。

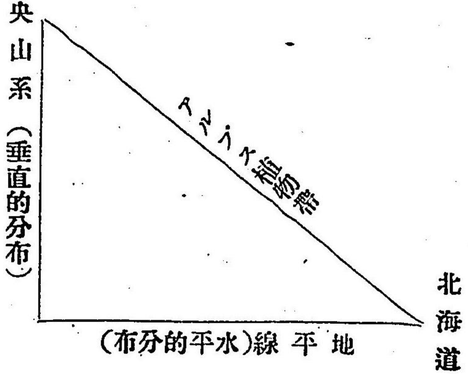
スヽキ、リンダウ、ツチグリ、ヤナギ、イヌタデ、ヲヅミガヤ、ガマズミ、カヘデ、フウロサウ、キンミヅヒキ、イヌヨモギ、サンカクヅル、オオバコ、シラヤマギク、ヤマウルシ、ヨモギ、ウツギ、ドクウツギ、ヲカトラノヲ、カウヤハヽキ、タラノキ、キイチゴ、ウナギツカミ、ケヤキ、コウゾリナ、タニソバ、イヌムラサキ。

これらの物、秋色の二原色なる、黃と赤とより配合錯綜せられたる、鮮新色を醸出し、一齊に黃紅朱櫻赭丹を揑し、火の如く燃え、亂雲の如く參差し、或は豬水と伴ひて奔放し、或は赭土に屯ろして流れず、到るところ千萬反の錦繡を織り成す、何物の天地か、秋より美なるものあらむ、何物の秋か、モミジより美なるものあらむ。

五 猶多く、純美にして粹奇なるものあり、曰く高山植物即ち是れなり、抑も本邦人の植物を愛するや、家紋にまで之を意匠するにあらずや、澤ひとり高山植物に及ばざるは何ぞ、日本の如き山國に在りて、日本人の如き山國民に在りて、高山植物の世に知られず、人亦之を知らざるは大遺憾なり、日光の太郎山を初め、高山に多き所謂「御

花畑」(陸中岩手山、及び越後苗場山にては「御苗代」と呼び、木曾御嶽及び羽前月山にては「御田ノ原」と稱す)なるものは、實に自然手づから之を培ひ、之に滋漑して成せる、天上の極樂園(パラダイス)なり、『名は知らず、草ごとに花あはれなり』(杉風)の句、一幅高山花圖の讃に値ひし、日本特有の奇草靈草、實に高山に在りて存す、戰國時代の人豪佐々成政をして、悶死せしめたるローマンチックの恠草として、早くより平原人士にまで名を知られたる黒百合の如きは、寧ろ枚擧するに遑あらず、所謂アルプスの山花は、遠く歐州まで渡航するを須ひず、千島北海道より津輕海峽を超えて、東北地方の高山と、連鎖絡繩し、本州中央の大山系に至りて、彩美を極盡す、但だ九州以南に至りては、緯度の熱帶に近づけると、高尺の山嶽に乏しきより、この物を缺く、即ち耶馬溪を以て有名なる豐筑境上隨一の高山、英彦山の如きは、九州一面を包める半熱帶林上に僅に拔頭し得て、溫帶林に入るに過ぎず、最高山と雖も、概ね八合目以上、絶巓までは山毛欅帶に入り、山躑躅の岩屑に嬰守するのみ、アルペン、フロラを見る能はず。

北海道より本州中央までの高山植物分布は



中央山系(垂直的分布)

狀を成す、即ち本州にては、一萬尺附近より五六千尺までに垂直布せる、地衣や、草本や、偃松や、ミヤマハンノ木、石楠花の類は、千島の極北占守島にては四百尺以上の高丘なきにも係はらず、到るところの原野は所謂高山植物を開花し、雪未だ全く消えざるに、黄花のコマノツメ、キバナノアマナ、千島キンボウゲ、千島ヤナギ、エゾノコザクラ(以上六月下旬)雪の大部分消えてクロマメノキ、イワムメ、グンジサウ、キ

バナシホガマ、コメバツガサクラ、バマカンザシ、カタヲカサウ、ウラシマツヽジ、ミチスタウ、チシマアマナ、イタセキセウ、ムシトリスミレ(以上七月中旬)エゾフウロ、エゾノヨツバシヲガマ、ハマナス、千島センブリ、千島リンダウ、エゾツヽジ、千島キケウ、イワキクウ(以上八月)の一齊に咲綻放香するあり、ミヤマハンノキ、偃松、ナヽカマド、黄花石楠花の諸木は、平地より却つて低卑なる、窪谷に見るに至る、九月に至れば、如上の色潮紋甃も、悉く雪の白布を被ふり了すといふ。

我が中央大山系の諸高山、亦斯の如く、一年中冬長くして四分の三以上に亘り、偶ま七八月の交を以て春夏一時に來り、雪漸く融くを以て、千草萬草、氷蕾瓊花を一齊に競發し、遠くアルプス山や、落機山や、ヒマラヤ山を羨やむを要せず、樺太、千島、北海道の氷境を踏むを用ひず、遠望して突兀赭禿、寸青を衣ざるが如くに見ゆる大山は、頭頸より胸部に懸けて、皆この仙草靈木を簪し、平原人士の到底想像し能はざる絶觀を作る。

所謂高山植物の特相如何。

(一)同類の分布圖を作る。同類各一廓を作りて、之に據る、偶ま他種の交はり來るに遇へば、團結的生存競爭を以て、之を仆し、自己の領域を確守するを以て、例へば蟲取スミレの群落をなせるところは、一望紫花丁々として、豫じめ紫泥の地圖を作るが如し、その隣りに他の色を列ね、類は色を束ね、色は層を作り、彩色分布圖を自然に描けり、平原にては、人間の耡輙ち入るを以て、この圖は破壞せらる。

(二)高山の花は、平原のものに比して、皆大、皆美、故にラスキンは、下界の花に比して熱情ありと言へり、その原因は、外より言へば、日光の通過する氣層薄さを以て、光力純粹、且つ強く、花色をして愈鮮麗ならしむるに在り、然れども內より言へば、土地磽确にして、營養分少なく、草は自己の永代生存を計るため、生殖機關たる花を大にし、美にし、蟲媒を呼ぶ要あるためならずとせず、故に現存せる高山植物は、この自然淘汰に及第して、適者として生殘せるものなるを以て、平原に見る如き、醜惡の花は皆無なり。

(三)一般に形矮小にして、莖葉の生育阻礙せらるれども、根は完全に發達して、勁風に堪へ、且つ土塊岩石に遇ふも、回旋して吸水に力む、その葉は面積小にして、厚く毛茸を被ふものあり(例へばカタヲカサウ、ヒメウスユキサウの如し)偶ま平滑なるも、

革膜質なるあり(例へばキバナシャクナゲ、コケモヽの如し)是れ山頂素と水分に乏しく、之を蓄ふる要あればなり、即ち水分の蒸發を妨ぐるため、自營の計をなせるは、岩高蘭、ツガサクラ、姫雲間草等、他に猶甚だ多し。然れども葉濶大にして人間の掌の如きものも、無きにあらず、(例へば戸隱升麻の如し)さまで大ならずとも、葉肉薄きものあり(例へばハクサンイチゲ、チシマフウロの如し)是等は陰濕沮洳の溪澗近傍に生ずるを以て、水分を儲滅する必要なきためなり、好んで葉面を卷縮するものあり(例へば石楠花、黃花石楠花等の如し)蓋し水分の蒸騰漸く多きを加へむとすれば、忽ち葉裏卷縮して、氣孔を閉戸し、且つ內外空氣の連絡を遮るためなり。又地に匍匐するものあり(例へば長之助草、林娜草の如し)蓋し地に接觸するは、溫氣を享けて、凍死を免るに利すればなり、又斷崖に懸生して、飛來の蟲類を捉へ、食するものあり、(例へばムシトリスミレ、コウシンサウの如し)蓋し土壤剝落、水分不足せるを以て、根の發育充分ならず、昆蟲の躰を消化して、自己の營養に資するなり、啻に草木のみならず、山中落葉松や、濶葉樹の落葉、亦蒸發妨禦のためなるに似たり。

概ね以上の如し、抑も高山植物分布の奇なる、アルプス山や、北米加那陀(カナダ)や、落機山(ロッキイ)

や、ヒマラヤ山や、その他に生ずる名草にして、本邦の高山に生ずるもの甚だ多し(卷頭の彩畫第三版に挾みたる九品は、皆アルプス山及び本邦高山に生ぜる同草の中より、選びたるものなり)又北海道千島にのみ產すると思惟せられたるものにして、本州の高山に發見せられたるもの尠らず(例へばウルップ草の如き、シコタン草の如き、千島アマナの如き)これらの奇なる分布は、いかにして來りしかといふに、之をダアウイン其他碩學に聞く、即ち第三紀の終より、第四紀に移る間、地質學上の所謂氷田紀には、北半球の氣候漸次に寒烈となり、歐州の全部及び北米の大半は、氷河を以て被覆せられ、北極地方の生物は相率ゐて南方に漸移し、現時の溫帶地方は、一旦極地植物の占領するところとなりたるも、氣候回復、植物亦北歸するに際會し、件の植物の一部分は北地に回へり、一部分は歸るを肯んぜずして高山に適地を求め、こゝに永住して、現代に殘存せるものなりといふ、高山頂に佇みて寒風に高嘯し、眼下燦星の如き花を踏む、何千万年の前、氷河時代の氣候斯の如く、北半球の生物斯の如し、周圍の小圈は、我を拉して永劫に入らしむ、什麼の仙術。抑もかくの如き絕世の女性的仙客、之を保護し、之を高絕の天閣に安臥せしめんがために、天、高山を日本に附與し、最も自

然を敬虔する人口のみ雲雖を颺けて覗ふを許す、平原に在りて柔弱の花、運命を風媒に委する劣等花、汚色の花、盈尺に雜糅せる紫黄の俗花をのみ目に狃れたる人、焉くんぞ高山、峥絶麗絶の氷肌仙媛あるを知らんや、之を知るも咫尺し得んや、憫れむべき哉。

本邦古より山嶽崇拜の風あり、隨ひて山中の草木を異常視し、之を重んずることなきにしもあらず、「山上(木曾御嶽)に一草を生ず、葉胡蘿蔔に似たり、小花咲て革の如し、色紅紫なり、名づけて駒草といふ、又一草あり、蓼に似て大なり、軟にして里人採て喰ふ、これを御蓼といふ」(信濃奇勝錄)の如き、百年前より有名なるを見るべく、又近江の伊吹山、藥草に富めるを以て、最も早くより古歌に入り(「かくとだにえやは伊吹のさしも草」云々の歌、最も人口に上る)我が從來の本草學者、屢ばこゝに登山したるが如き、即ち是れなり、現今漸く高山植物研究に志す人多きを加へ、華胄の裔にして山草陳列會を發起するものあるに至りたるは、頗る悦ぶべし、只だ研究の進むに伴ひ、自己の虚榮心を滿たさんために、濫採漫取を敢てし、絶種に至るが如きは、嚴に之を遏めざる可らず。歐州にては好んで高山植物を栽培する風あれども、多くは山より種子を獲來り、之を平原暖地に適發せしむるに工風す、本邦の山草家なるもの、計是に出

てず、大株を縱まに根拔して、家園に移植するを以て、一年の開花あるも、翌年は枯死し、無益の生を殺すのみ、アルプス地方にては、高山植物保護の道立ち、斯學專門家と雖も、大學その他の許可なくして、濫に採取するを得ず、某瑞士人の如きは、本邦日光邊に採集するすら、實をのみ摘みて、決して根拔せずといふ、蓋し是れ一個「自然」に對するの公德、學者最も重んせざる可らず、無人の境にして且つ何等の法令もなく制裁もなきを奇貨とし、稀種の草卉を殘虐するは、最も誡しむべし。

本邦にて高山植物を覯るに最も宜しき地は、木曾の御嶽、加賀の白山、(高嶽草本が、山名を冒すに至りたるは、實に白山產の物より初まる、例へば白山イチゲ、白山ナヅナ、白山オミナヘシ、白山ハタザヲ等の如し)近江の伊吹山(この山名を冒せる植物、亦前者に讓らず、曰く伊吹トラノヲ、伊吹ボウフウ、伊吹フウロ、伊吹ジャコウの如し)越中の立山等、古くより著名なれど、今は濫採の結果甚だ饒多ならざるが如し、下野の日光山、信濃の白馬嶽、(長野より大町に達し、こゝより六里にして北城村字四ツ屋に泊し、導者を貸して翌日早朝より登るべし、午後四時頃、容易に絶頂に達す、途上白馬尻の大川渡しの左岸、絶頂に近き葱平(チブカタイラ)及び絶頂、最も植物に富む)戸隱山(長

野町より路一淵線に逝ずるを以て、直に登り得、前山まで約五里、但し裏山に到り、高妻山より虚空蔵を窮むるを更に可とす）八ヶ嶽（諏訪郡澁溫泉よりも、南佐久郡本澤溫泉よりも、甲斐大泉村よりも登り得）の三山、最も斯學者の間に重んぜられ、年々植物採集の目的を以て、登山するもの、次第に多く加はり來る、路は四山いづれも登攀容易なり。

日光掩蔽　地上清涼　靉靆垂布　如可承攬
其雨普等　四方倶下　流樹無量　壅土充治
山川險谷　幽邃所生　卉木藥草　大小諸樹

（藥草喩品）

六　既に高山草本を説く、高山森林帶として、針葉樹の美を説かざる可らず、信州木曾の材木を以て有名なるは、この般の喬木多きに居る、扁柏（ヒノキ）、花柏（サワラ）、椙（スギ）、檜（ヒバ）、樅（モミ）、落葉松（カラマツ）、栂（ツガ）の如き皆是れにして、その高山に簇生するものは、將さに低緯度の寒帶に衝き入らんとし、偃松に至りては、巨石恠岩、石礫倚疊の間に突生し、風雪寒烈なるを以て、皆屈曲鏝を當てたる如く、葉は針、枝は鏃となりて尖る、偃松の狼藉なくんば

幾んど高山の光景を缺く、岩木山の偃松は「雷除け」の靈符と稱して、道客齋らし返べるものあり、越中立山の裏に當れる「針ノ木峠」の如き、高山の闥を排して急湍怒吼する谿谷の上流に「松川」を以て名けらるもの多きが如き（奥羽の大河最上川に入る枝流に「松川」あり、藏王山より發して白石川に合するものに「松川」あり、信濃白馬嶽麓を蜿蜒して、姫川谷に落つるものに「松川」あり）いづれか針葉樹、偃松、落葉松の頑陰を突破して、潺々潺々、聲を作せるものにあらざらむ。

第十一章　谿谷の美

一

大地の乾面、茫々として平なるや、絶大意匠家なる自然は、却つて平なる能はず、即ち之を凸彫して、山を作り、虚空に紫白の尖筆若干を立つ、バイロンの所謂、地はいかばかり、高く天を衝き得るかの意氣を示すもの、是れなり。

然れども一方山の隆起するだけの「加」を、平地より「減」じて別個の凹刻を施したるもの、之を山側の缺線なる谿谷となす、山と谿谷とは、地の上下に凸凹の異相を呈すれ

ども、必竟外延的（エキステンシイヴ）と、內包的（インテンシイヴ）の差あるに過ぎざる異匠同工の彫刻美術品なり、一は弓の如くに張れる土を肉とし、一は鏃の如くに飛ふ水を血液とす、彼は永く留まり、是は竟に回らざるに似たりと雖も、山素と不動にあらず、水の性固より不止なるが故に、山と水とは、いつしか握手の公堂を求めざる可らず、谿谷は、即ち是れがために共通するなり。

英語に Valley の文字あり、河の義なり、世に「谿谷」を以て其通譯となすは、聊か妥當ならず、溪流、溪水、皆水線あれども、谷に至りては必ずしも然らず、峽間の底地窪地は、皆所謂「タニ」也、深谷窮谷等の熟字は、敢へて多大の水あるを豫定するを許さず、鎌倉地方には「ヤツ」なる方言あり、宛つるに谷字を以てす、例へば扇ヶ谷（上杉管領の居なりし）松葉ヶ谷（日蓮の安國論を起草せる）葛西ヶ谷（北條高時が一族郎黨を提げて最期の腹戰せる）月影ヶ谷（阿佛尼が假棲の地）等甚だ多し、これらは必ずしも普通の谷なる意義に恰同せずと雖も、その地は悉く山趾の狹隘なる卑低地に在り（例へば『十六夜日記』に曰く、住むところは、月影谷といふなる、浦近き山本にての類、現存のこの地は、縱に方二十間許の谷地なり）これらの例を以て推すに、谷を以て Valley に宛つるの妥當ならざるは論を俟たず、たとひ溪谷二字を一ッの意義に溶解するも、大磵深潭も皆溪谷に過ぎざる故に、「溪谷」にては或は汎きに過ぎ、或は狹きに失す、蓋し磵や潭の在るところは、寧ろ Ravine といふを以て、適當となすべく、Valley とは谷地を流るゝ河の稱なれば、寧ろ改めて「河谷」と譯するを可とせむ、西人は則ち曰く、富士川ヴァーレイ、天龍川ヴァーレイ、木曾川ヴァーレイと、日本人は地學者の間にこそ、富士川溪谷云々の語を用ゆれど、普通にては富士谷、天龍谷、木曾谷と言はざればなり、即ち曰く Valley は水を有する谷の義にあらず、谷を流るゝ河の義なり、故に「溪谷」よりも「河谷」といふを適譯となすと、唯因襲の久しき、「溪谷」なる字は、學者間一般に通用せらるゝが故に、こゝに姑く之に從ふのみ。

日本にて普通に稱する「山水」の中、もし水を以て、海を除外したる他の總べての水なりとせば、ヴァーレイの語義に換りたる谿谷の美は、則ち水美中の王なるものなり。

我が日本の四大島（北海道、本州、南海道、西海道）には、中央の脊椎骨として、二鏈以上の山系を縱に併行す、（富士帶の橫行もあれど、）その縱行の脊椎骨より、幾多の百足蟲脚の如き肢骨を南北に背を反けて出だし、所謂縱谷の態を作りて、兩大瀛（北の

日本海、南の太平洋）に朝宗するものは、皆我が普通にいふ河にして、前律を以て言へば、谿谷なり、形象文字を使用し得らるゝ限りにて言へば、山と谿谷との交渉は、「非」字形を成せるなり、北海道にありては、天鹽川及石狩川は北に、釧路川及び十勝川は南に、背合せになりて注ぐにあらずや、本州に在りては最上川の北上川に於ける、阿賀川の阿武隈川に於ける、信濃川の利根川に於ける、神通川の木曾川に於ける、日野川の加古川に於ける、江の川の太田川に於ける、前者は北向、後者は南行して、頭々枕藉するにあらずや、四國には吉野川北上し、仁淀川南下し、九州にては筑後川玖摩川北向し、大淀川南走す、もし輕氣球に駕して、大虚に颺がり、假に蜻蛉州の首尾南北を通觀し得るとせよ、我が八十餘州はヒヨロ長くして凹凸あり、しかも毛立せる山の芋の如くなるべくして、纖美なる絹絲にて之を括りたるは、谿谷ならむ、その中胴に該當するところ、最も高くして最も幅ひろし、是れ富士帶の横絶せるところ、那須山系、飛騨山系、木曾山系、赤石山系、白山系の駢頭的に嚙噬するところ、即ち山國中の山國なる駿河、甲斐、信濃、飛騨、越後、越中の比隣するところにして、その低地と稱せらるゝも、猶且日本の中央高原を形成せるところ、こゝに南北に亂流犇奔する

谿谷の如きは、急迅をきはめ、變化をきはめ、自然より觀察すれば、風流の谿となり、人と交渉しては多情の谷となる、人文史上に亘るは、本題の事にあらず、乞ふ我が所謂谿谷美を語るを聽け。

二

谿谷を別ちて、上流、中流、下流となすは、何人も氣注ぐところの系統的區分なるべしと雖も、旦本の谿谷、即河川は、多くは屋蓋の如き高地より發源し、斷山を束ねて迸注するや、國土素と狹隘なるを以て、輙ち他の川と丁字形に衝突し、同水にして異名を冒すを以て、一川毎の名によりて、上流中流下流を別ち能はず、例へば飛騨川の如きは、觀る人によりて、上流のみにして、中流下流なしとも言ひ得べく、又上流中流ありて、下流なしとも言ひ得べし、必竟下流は、平原地に入りて寂寞聲を呑むが故に、容易に識別し得べきも、上中流を劃然甑別せむことは、本邦の如き急峻の山河に在りては、譚容易ならず。

今三流の特相を言へば、上流もしくは中流は、山に近きため、多くは巉岩兀立、外皮を蒙らざる壁を以て繞ぐらすが故に、水の逞ましき破壞力も、如何ともする能はず、

避けて紆餘するを以て、S字形をなして流る、しかも下流は自ら作れる洪積、もしくは冲積土の中を行くものなるが故に、觸るゝところ披かざるはなく、電光的折線を引いて、Z字形やX字形を穿つ、大川にして屈折愈よ甚だし、本邦第一の長流信濃川は、八千八水を併呑すと稱せらる、上流の川に「千曲」を以て命名したるは、偶然にあらず。上流中流は股脈少なく、下流に至れば幹より細枝小朶を翳す如くに分派す、是の如きは、最も重要なる殊貌ならずとせず。

然らば上流中流の區別如何、之を識別する最易の法は、水の運搬する石の、大小によりてトするを可とせむ、即ち上流は水葬放にして、亂峰環峙し、大石を破りて之を搖流すと雖も、搖流久しければ、石は幾回となく碎け、中流の水勢やゝ緩漫なるところに流轉して、休息す、水汪々として靜穩なるに至りては、底に噪ぐところ、小石細沙にして、その斯の如くなるは、下流にあらずんば見る能はざるところなり。

故に上流の美觀は、大石を按排するにあり、即ち誕生地なる山父の俤を刻める缺片を臚列して、その目錄標本を作るに在り、一たび多摩川(武藏)野呂川(甲斐)の上流に討ね入らんか、秩父岩地より發源するところなるが故に、その石質も玄黑にして緻密な

る粘板岩や、純白雪の如き石英岩屑や、赤褐色なる硅板岩の取次に起臥するを指すべし、又木曾川(信濃)天龍川(同上)の上峽に溯れば、駒ヶ嶽山塊の裾を東西に併行せるところとて、片麻岩や石英斑岩や、黑雲母花崗岩等の如き、前者とは全く別なる火成岩の、冷峭水に泳げるを見む、殊にその上流に横はりて、水を妨ぐるや水之を跳躍して走る、大なること櫃の如く、その太だしきは城廓の如く兀座するあり、甲斐昇仙峽の如き、越中庄川の上流なる天柱石の如き、皆その大觀なるものなり。中流は概ね人頭大より拳大に至り、圓陀々として摩拭人工を加へたるに似たる石多し、況んや下流は、俗に所謂多摩川砂利の如く、小彈子以上のもの、殆んど稀にして、觀るに足る無きをや。故に曰く上流第一の美觀は、石に在り。

之に次いでは水の百相を呈することなるべし、日本大河の上流には、或は溯水あり、或は瀑布あり、澗の大なるもの、潭の深さもの、悉く上流の區域に備はる、例へば鬼怒川の上流に大谷(ダイヤ)川あり、大谷川は中禪寺湖より落つる華嚴の瀑に出づるが如き、越中射水川の上流は、日本第一の險惡谿谷、大白川にして、その發源は海拔實に八千餘尺、北陸道中に儼として、覇王の威を挾める白山の頂なる、千蛇ヶ池より、白氣を吐け

る一瀉二百十六丈なる日本第一の白水瀑より來るが如き、『この大白川といふは、みなかみは、すなはち白山より流れ出て、此國におきてもまたなく荒き川にて、たゞいさゝかのよどみもなく、その高嶺の白雪をさながらに、おし流すらんが如く、岩こす波水晶のやうに澄さかへりて、たきち流れぬところなし、岨づたひなる道をおりのぼりゆくほどに、一枚壁といふところにいたりぬ、名さへもしるく高きいはほ、壁のごとく、川つらにのぞみて聳へ立てるに、くづれそこなはれたる所々には、梯をぞかけわたしたる、ほそき丸木を岩のくぼみに打かけ、藤がつらを、岩かどへひきかけて、それに渡しかけなどしたるが、あまたところにて、又かりそめなるやうに危げに、藤もてかちみたる梯子の高さ、九尺ばかりより二丈ほどなるを、たてたるところ五つところばかり有て、さらぬ所は幾なるはざまに足うちかけて、跨がりてはひ下り、はかなげに生ひ出たる草木の枝を、力とたのみて取すがりゆくも、あやうくかしこし。（中略）九郎五郎道の名桂谷なりといふ邊、濃麻のおし出たるあとなりとて、大きなる木どもの、うち折れたるも、根ながらなるも、いと多くしがらみのやうに横たはり、大きちいさき石どもいくらともなく、まろび出て、ゆきは猶消ざりがてに、土やあくたや、うち交りてこ

り殘りたるもさたなげなり、そも此濃麻といふものよ、冬よりして降積りたる雪の、春にいたりてしたとけぬる比ほひ、かなたこなたの谷よりすべりきて、山のかひより谷間になだれ入るほど、只しばし間に、大山の崩るゝやうに木さへ石さへみなおしに、押落し來て、さばかりあらき川瀨をすら、しばらくは堰きとむるなむ』（越白山紀行、山崎弘秦）或は神通川が名稱自詮の高原川より一系を引き、高原川實に日本アルプス中、最も峰巒をきはめたる乘鞍嶽に哺める平湯の大瀑より生るゝ如き、又信濃梓川に來會する一支流に、石灰の洞穴や自然橋多くして、水を白刷し黑寫する如き、決して中流及び下流に見られ得る苟且の布置にあらず、又諏訪湖より落つる天龍川の如き、「靜」より俄に「動」に移る變化を見るべく、人間一生の命運、數奇をきはむるものある如く、水の歷史亦然るを想はしむ。故に水の本然は、最も谿谷の上流に在りて、靈活に生動す、下流の拘束幾んど暢びざるに比すれば、神幻も啻ならず。

故に曰く、上流第二の美觀は、水の曲折變化する本然相を、遺憾なく發揮するに在りと。

然れども上流に建てられたる不朽殿堂の、尙存在するを閑却するを許さず、森林是れな

り、森林は實に谿谷の長子なる上流の慈母なり、その口は津液を吐いて、上流に哺まし む、千萬水一時に糾紛交錯して、垂玉地に落つるや、一絲となりて乾面に緯し、こゝに眞箇の谿谷を銀繻す、冬涸れの候、水尠き如くなるも、涸大の葉に富める樹木多く、斧斤太古より未だ入らざるを以て、落葉厚く滿地を掩ひ、能く地濕の蒸發を妨ぐ、木曾川の支流、御嶽川を溯りて木曾大森林を覗ひ、大井川を探源して、田代森林に駭絶し、伊豆狩野川谿谷の天城森林に於ける、常願寺川を溯りて北陸第一の立山森林に通ずる如き、いづれも上流の起生點を、森林に置くが故に、水は碧玉綠珠の聚合體の如く、純晶、純潔、上流の美を倍層にす、地球外部の彫刻は、素より風化作用を除外す可らずと雖も、實に生物(殊に植物の社會團なる森林)水(その変通窟なる谿谷)の作用に出づるものにして、その觀面なる協力戮勢は、上流にありて、最も多くを見る、故に曰く、上流第三の美觀は、森林と水と母子相擁くところに在りと。

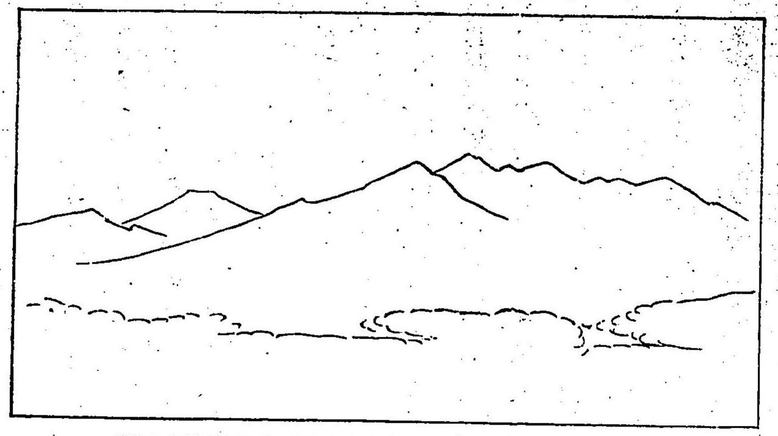
三

上流の絶美以上の如きものありとせば、中流は何を以て誇るを得むか、既に石にあらず、水の姿致にあらず、森林にあらず、剩すところ何ぞ。

曰く是れ水の結束に在り、上流の水は、綠葉に含まれ、氷雪より變融して、幾何時もなきが故に、所謂氷冷水となりて、尖峭の氣味饒かなりと雖も、未だ大放瀉をなすに力足らず、水は概して淺し、飛驒川の木曾川に入る邊は、今浸蝕力のために傾斜を急にせりと雖も、そのやゝ上流に溯れば、沿岸の寒邑に下川邊、中川邊、上川邊、下麻生、上麻生、を以て名くるものあり、麻生は則ち淺生の訛にして、その更に上流なる益田川に至れば、朝六橋あり、アサムッと訓む、或は淺水の轉じたるならむか、水淺くして迅さや、强力は或は在り聚合力の大なるは、竟に中流に待たざる可らず、例へば印度の恒河の如きは、雪山より出で、海拔一萬五千尺の高原を流るると雖も、其源流は幅僅に五間、深さ一二尺の間に過ぎず、中流に至りて奔激天地に震ふといふ、支那楊子江の如き、下流は則ち汀洲白蘋を採るところなるも、中流は巫山峽の絶景を以て鳴るにあらずや、蓋し水次第に增嵩して、聚合力大を致せば、益す浸蝕力を逞しうし、彫刻深く入るを以て、中流を繞ぐれるところの斷崖、愈よ隆起し、谿谷の底を、長藥研狀に凹せしむ。

その結果として、崖上自ら路を拓くの便利を與へ、支那詩人の所謂『官道如髮沿長河』

第七圖



戸隠五地藏より八ヶ岳を眺て、富士を望む（三十七年七月十九日）

となる、本邦にても木曾川に沿へる木曾路、天龍川に沿へる三河信濃街道、神通川に沿へる越中街道、その他最上川に、富士川に、玖摩川に、この例枚擧に遑あらず、且つ中流よりは石の碍妨物尠く、河道亦大に潤きを以て、輕舟を通ずるに至る、富士川は三百年前、角倉氏その河底を浚渫して、巨石を除き、中流なる鰍澤以下に舟を艤し得るに至り、玖摩川も、中流なる人吉より八代に至るまで、十六里間を舟通す、齋藤拙堂の『下木曾川記』の如き、絶世の名文を草し得たるも、實にこの中流以下の恩惠ならずんばあらず、更に水の聚合美を、こゝに約言すれば。

（一）絶壁を浸蝕して岩面を澤拭す、例を信濃に借り、且つ我が行踪に限られて之を言へば、八ヶ嶽の下、甲州と信濃との間を、一髮に劃して流るゝ谿谷（諏訪落合村國堺橋の對岸）斷層に、粘板岩の美麗に紅變したる、長野附近、裾花川を挾みて裾花凝灰岩の奇なる（秋の水劍なす峰を繞くりけり、無黃）御嶽登山道附近なる木曾路第一の絶景鞍坡橋畔に、石英斑岩の大露出を見る如き、或は高遠より伊那に赴く途次、鉾持（ホコヲ）棧道の絶崖に、片麻岩の崩壞變形せる蛭石を見る如き、中には上流の域に屬すべきもありと雖も、多くは中流の厚賚として、美觀を享受すべきものなり、又奥羽第一の大河北上川が、中流なる一の關の東南にて、嚴美なる峽流を成せる如き、清川新道に沿へる最上川峽が、自然に斷面を成し、水成岩層の好標本を露出せるが如き、紀伊の瀑（ドロ）八丁（大臺原より發する川と、十津川と合せむとする川域）兩岸相距る數十間、岩層は層狀直立して、片麻岩罅裂の峽流を作れども、忽ちにして數十町の間、流域俄に水平となり水透徹晶魚を指し得べき如き、亦皆是れなり。北米コロラッドの大峽谷、屈曲蜿蜒長さ二百四十餘里の大觀、皆同工より成るを想ひて、中流の讃美を禁ずる能はず。

（二）中流に至りて街道拓かれ、家屋建ち、馱馬行き、舟下り、人間と交渉し、配景を作

るところに美を生ず、殊に橋梁の如きは、上流は多くは生木二三本を束ねて、渡るに便にせるもの、その淵さに過へば、巻を吊りて行通す、しかも交通やゝ頻なるときは、有名なる阿波祖谷山猫谷の蔓橋の如き、神仙年代の物を作る、まことに山國の橋梁は、唐畫山水を宛然睹るが如くして、平原人士倘ま之を圖畫に瞥見するも、日本猶斯の品を有するかを自ら惑ふものあり、例へば飛驒にては、大白川、宮川、高原川、益田川、皆快駛して矢を射る如くなるを以て、普通の架橋を能くせず、故に古來引渡橋、籠の渡の二種を用ひ來る。

引渡橋は、獨木橋とも、一本橋とも言ふ、丸木の面を少しく削りて、足の把持を宜からしむ、長五六間、又七八間の木を、三本乃至七本ばかり繋ぎ、その繼目毎に杭を建つ、杭は木の俣を上にし、根を堅く固め、俣に懸くるに俣木を逆にし、丸木を載せたるものなり、渡るときは左右上下に動搖し、人をして面變心悸、這伏を覺えざらしむ、若し夫れ雪の時は凝結して、蒲鉾の如く、堅氷にて包まれたる圓筒形を成し、渡るときは最も險絶をきはむ、雨に水嵩を增すとき、往々流失の厄にかゝるを以て、藤蔓を以て丸木を緊縛し、引いて岸樹に繋ぐが故に、杭を流失するとも、丸木は失はざるを

得るといふ、その他富士川の藤橋の如き、梓川峽谷に懸かりたる稻核附近の藤蔓橋の如き、いづれも祖谷山の物に讓らざれど、後者の如きは現今木橋に改造せられて、三十年前の奇を觀る能はずなりぬ。

籠渡しに至りては、小説的にして最も奇中奇なるものなり、多くは對岸の岩石高く、水面甚だ低く、川幅濶く、之を俯瞰すれば水霧濛々、時に咫尺を辨せざることあるところに懸く、その裝置たる、對岸に先づ堅牢なる力杭を建て、野葡萄の蔓もて太き繩を、凡二尺廻りほどに作り、かの力杭に結びつけて彼此に張りわたす、稱して命綱といふ、別に猴藤をもて丸く四筋立となし、その下人を載すほどの籠を編みて、命綱に吊り懸け、籠の前後に又綱を曳き、兩岸に張りて之を牽引の用に供す、渡る人は籠の中に立ちて、かの柱藤を左右に搔いこみ、先づ軀を堅め、鞦韆の如く前後に振り動かし、その籠の命綱に當らむとするところを捉へて、藤蔓の輪を命綱に打ち掛け、手繰りて進み、進みては打ち掛け、打ち掛けては且つ手繰りて、對岸に達するなり、その命綱は三十間、或は六十間餘あり、常に弛みて人の渡るときは、岸より中央まで一氣に急阪を下る如くなれど、半より向岸に到るまでは、高きに登るが如く、かの蔓輪を

掛けては、手繰る危險、名狀す可らず、籠の前後に曳きたる繩は、對岸に止まれる籠を當岸に引き寄するための用にして、全く人を載せたる籠を手繰るものとは其用途を別にせり、籠渡しは、飛驒にては現に之を存せるところあり、白川郷に在りたるもの、最も著はる、其一は飛驒越中の境に在り。

北州行盡幾多山　臨渡旅魂殊冷然　身在一繩蒙勾引
籠懸三索更躊躇　只疑碧落跨仙鶴　絕勝鯉溟乘釣艇
知是千尋巖底水　劃分飛越兩交邊　（小野湖山）

其二は鳩谷と荻町との間に在り。

籠渡者、兩岸險崖、而浮槎船舟橋梁不可施之地、故設以通往來者也、其制鑿巖石、支巨柱、纏之巨繩、繩周圍可二尺、組之用藤蔓、掛之籠、籠亦搆藤作之、距高山十二里之西、白川村即此地也、爲高山與金澤之通路、白川河中絕、河廣百間餘、東爲荻町、西爲鳩谷、予至于荻町、乃備導者、至河岸、導者持細繩、牽籠、蓋前有過客、而籠未復也、導者大呼、牽者應聲、出於鳩谷岸、導者扶以納籠、措足未定、籠直降、目眩氣奪、一瞬三四間而止、俯視則水色一碧、浪聲激怒、前岸牽者極力、籠飄々然

不進、乃想鶴背之仙、風船之客未知此離也、尺進咫退、其響軋々、易曰其亡其亡繫于包桑、其是之謂乎、漸進到岸、余慰導者、導者獨舁籠、復荻町、予得小詩、

溪上途窮倚嶮巖　長繩高樹白雲陲
一籠無恙幾來往　笑見步虛人似蜘

牽者導余、而到鳩谷某、時明治十一年六月也。（櫟邨梅僊）

これらのもの既に廢されて、板橋に換へらるゝと雖も、益田川上流に在る巷渡しは、今猶存せり。

(三)水の彼が如き聚合を成す所以は、諸溪流の中流に至りて丁字形に合一するにあり、宮川と高原川と合して神通川となり、笛吹川と釜無川と合して富士川となり、犀川と千隈川と合して信濃川となり、飛驒川の木曾川と合するが如き、皆中流を交叉點となす、このところ水勢猛激、拇指大の雹を飛ばし、白刃匣を出て、精氣を四迸す、蓋し谿谷の多くは、間に分水嶺を介むものを多く、これがために支水派水愈よ多きを致すなり、谿谷中の美觀、寧ろ之に過ぎたるものあらんや。

四

谿谷その下流に至れば、屋より落ちて床に注ぐ如く、平原と海とは、終焉を送迎して止む、富士川天龍川の如き急川はいかに下流となるも、依然として山的ヴァーレイたるを失はず(『渡航喚舟舟未到、黒雲中望大天龍』是れ天龍河口の光景)と雖も、坂東太郎の利根川の如きは、關東平原に入りて、久しく一望平蕪の山無し國、下總を彷徨するを以て、陡峭の壁なく、兩岸夾立の榛の間より覗へば『一夜漲痕高幾尺、征帆半出樹梢行』の平和觀あり。その新泥にて冲積せられたる利根下流附近の土壌は、水平扁坦、海の如く一米突の高低すら無く、本邦中他に比を見ずといへるにて、いかに灑々洋々たるかを想ふべし。花は落つ嵐山の嵯峨峽、茶と螢と澱川の宇治、關西一帶の春と夏とを代表的に占領したるも、淀川は秩父古生層を浸蝕して宇治に到り、保津川も亦太古の湖なりし丹波平原より呱々の聲を擧げ、同前の地層を突破して主に粘板岩地を流れ、一は宇治、一は京都の如き平原地に至るものにして、殊に淀川の下流は、比良四明の雪解の水を併せ、鞍馬愛宕の淨溪清流を呑み、大阪を横絶して海に入るところ、俳聖にして畫聖を兼ねたる謝蕪村をして『春の水山なき國を流れけり』の句あらしむる所以なり、山無き國とは蓋し大阪を指さす、淀川の三角洲に當るが故に、山無き

は初めよりその處にして、假令支那印度の大デルタに比すべくもあらずと雖も、本邦にては、東京に次いて京都と共に、最繁盛最人口稠密のデルタ市と稱するを得べし。天保年間の一枚摺に、京阪人互に相嘲ける「問答」といふものあり、曰く

大阪者の問 京の川があるかい　京者の答 鴨川に桂川があるわい
大阪者あら河原ぢやい
京者の問 大阪に山があるかい　大阪者の答 天保山があるわい
京者あら砂が盛つたのぢやい。(米僊翁の『蕪村句解』に從ふ)

所謂「河原」の鴨川や桂川や、又所謂「砂盛り」の天保山や、皆谿谷下流の作れるところにして、平原人士の最も目睹し易き光景なるが故に、こゝに之を說かず。

第十二章　溪谷の四季

溪谷斯の如くして、人間聚散、貨物呑吐の中心なる、平原都市と離隔するが故に、その奥邃に到れば、偶ま村落あるも、山側に點在し、或は圃を斜面緩なるところに起し、層々段階を作り、人その傍に居住起臥するは、本邦信飛の山中に、累見するところの

光景、アルプス山中の最高村落は、瑞士アウエール谿のイフン、伊太利リウヰヤノ谿のトレバレ村、佛國アウエロール村等にして皆海拔二千百米突を出入す、即ち本邦東北第一の高山羽後鳥海山の絶巓と同高度にして皆谿谷に沿ひ、大山巨稜、交も天を衝き、懸崖千尺、峨々として天空に凸出するところに在り。

我が梓川は、信濃飛驒の境界に並行せる二列の大山脈中、槍ヶ嶽、常念ヶ岳の間より發し、件の並行太山脈に沿ひて南流し、穂高山、乘鞍嶽、野麥峠等、その他諸山より發する水流を合せ、曲流折流して東北行し、松本の西北に至りて、奈良井川と合し、始めて犀川の稱あるものにして、日本全國中、最高最大の山嶽を誕生郷とするが故に、その水勢急迅逞猛なる、所謂日本三急流と呼はれたる、富士川、最上川、玖摩川の比にあらず、遠江の天龍川、飛驒の大白川と併せて、眞個日本の三峻河なり、加ふるに水嵩多量、犇放石を嚙み、逼仄の硬崖に反響して、大叫喚するや、石身ために劈裂し、圭角戟を垂れ、一萬尺以上の大嶺、皺皺皆頽る、その犀川に合して後も、急流矢の如く、蒿師欵乃して、櫓聲呷喇の靜閑境に入らず、竟に日本第一の大河信濃川に合す、故に梓川の兩岸、垂直的傾斜をなせるところ、島々（シマシマ）、橋場（ハシバ）、稻核（イネコキ）、大野川諸村の人戸

の如きは奔流雷の如き一水を夾んで、碧峽に嬰り、敗棧に臨み、危欹墜ちんとす、蒼蘿翠樹、又崖に掩映して、夏は綠玉水に映じ、秋は紅火水を燒く、殊に冷絶なるはこの山谷の霧なり（必ずしもこの山谷にのみ限りたるにあらざれど）天爽朗なるや、日光地面を射り、空氣層を改むるを以て、地上近く雲を生せずと雖も、偶ま雨となるや、始めは潛溫を放出し、後に空氣の溫度を大減するを以て、滿地皆霧となり、殊に碧峽に潛み、翠樹に宿り、靜さはまりて嚶々聲を作す、峻秀なる山岳頂、白雲綿絮の如く、纒繞するも、亦同理に因る、川の兩崖、花崗の大白石を凸兀して、その堅硬なるを避けず、蘚苔秀潤之に點綴す、一里にして人家兩三點、三里にして又三五點。

這の溪谷に春夏秋冬の轉變を觀じ、自然の變々化々刻々極まりなきを知らば、無人境、豈寂寥境ならんや、寂寥境、豈無聊境ならんや。

信濃の人吉江孤雁、梓河畔に棲遲して無韻の詩『山上の家』一篇を作る、這の大峽谷の天然を描き、村落の人事を描き、荒凉奇恠の一幅を成して遺憾なし、左にその數節を借る。

『梓川の上流を遙か遠く遡つて、安曇の山の奥深く分け入ると、橡の林が遠く續いて、

秋十月頃は朱を染めた樹々の、葉は美しく、果實は黄になつて、累々枝上に懸つてる、其間を山雀四十雀其他の小鳥が、末秋の悲い節をつたへ、崖下に咽ぶ溪流の響と共に深山の秋を歌つてゐます。

谿を越え峰に亘つて危き徑に棧橋を渡し、此方より彼方へ藤の蔓などを絡げ合せて、往き來の人のたよりとなし、兎も角も道と名づくべき一條の徑が通ふてゐますのは、野麥街道と云つて信濃と飛驒の國境を越え、遠く十里高山の町へ迄つゝいてゐる其途です。此途が國境の野麥峠へ差しかゝる少し手前、梓の流が奔湍となつて一方の峰から落ちて來る溪流を合せる邊、道は二つに分れ、一つは峠に向ひ、一つは梓川の岸猶深く、山奥まで沿うて行くのです、が、此は白骨溫泉へ通ふ一筋途で、倚嶇羊腸、或は登り或は降り、飛瀑の下を過ぎ、激流の邊に出で棧橋を渡り、洞穴を潜るなど、眞に變化曲折ある面白い途筋です。

大野川村から三里、白骨途となつてから凡て一里の山奥、峰にも尾にも橡林の繁茂してゐる其中に、二三軒の藥屋があるのです。橡の大樹の根元に造りかけて、崖下には急流雪を飛ばして岩根を洗ひゆくのを眼の下に、藤の蔓もて結ひ付けた丸木の家、形ばかりの丸窓には蔦の葉が爬ひかゝつてる、此頃はもうそれが黄色となり紅となつて、入日斜めに橡の林を染むる頃は、反照深林に入つて此丸窓の上を照らし、眩いばかりの光が、見る〳〵薄らいてゆくと、橡の紅葉が溪風にはら〳〵と散つて、窓の邊へかゝつて來る、其時の寂しさと言つたら、何とも言ひやうが無い、誰でも秋の夕、此橡林の中を通るやうな時は、其寂しさが胸に泌みて、思はず涙をおとさない人は無いと云ふ位です。

さて此林の中に住んでゐる人は、如何樣風に日を送つてゐるかと云ふに、眞に寂い生活をしてゐますので、日毎行逢う者も、白骨の溫泉へ登る二三人の旅人か、或は溫泉へ食料運ぶ牛の群の、五つ六つ連れて遠くの方から鈴の音を響かせて來る、其許です、其外には尋ねて來る人も無ければ、又何處と言つて尋ねて行く處もない、三軒の家は何時立てられたのか、さまで新しくも無く、昔のままに傳はつて、昔のまゝに傳へてゆくといふやうに見えるのです。

さしもの花の眺めも、やがて若葉する夏の初となると、風無きに自と散て、峰の流に

寄集ひ、紅匂ふ一路の浪、深山の春を送り盡して、いつしかに五月雨の雲峰をこめ、溪を埋め、卯の花くたし、詫じくも、日又日晴るゝ隙なく降續く頃となつたのです。峰を洗ひ巖を穿つ雨の脚、樹々を傳ひ下草を浸す勢凄く、低きより低きを求め、峯といふ峯、澤といふ澤を分下る流の末は、一筋の梓の川に降集ひ、濁浪の轟滔々として物凄く、岸を嚙み林を振ひ、朝夕べ、峰より覆ひかゝる雲の帷の裾を打ち、彼方の流の末の山影は、浪の飛沫に朧にかすみ、山も川も四邊一つらに欝悒いろに包まれます。其頃になると、お光は日伺家に籠り、丸窓の所へ寄て、此物凄い流を眺め、此流の末は何處へ行くであらうか、其行末には如何樣處が在て、又其處には如何樣人がゐるだらうかなどゝ云ふ、おぼつか無い想像に耽てゐます。二日、三日、はては七日十日と續ても、雨はなか〳〵に止む景色も無い、橡の樹の幹は洗はれ、葉は浸され、ぽたぽたと大きな雫は、絶えず降る雨と共に、お光の窓へ散りかゝり、窓の下の青草は、房々として雨垂の中に浸てゐ、流の響は日增に高く、日頃は只遥下の方に岩間に咽ぶ泉のやうに聞きなされてゐた者の、今ではもう橡の樹の間から、濁浪の渦卷き返るさまが見らるゝやうになつて、もう五日も此儘で續たならば、林を浸し、お光の窓下迄も

押寄せて來やうと云ふ勢を示してゐます。けれど雲は未だ峰を離れさうにも思はれない、雨はいつ上らうと云ふ景色も見えないのです。彼處の棧が落ち、此處が崩れたと云ふ話も、僅軒傳ひに隣の人々から聞くばかり、枯木集めにも草刈にも、少も戸外へ出る事はできないのです。

天の大なる御惠は、再び山中の人々の上に及で、若者がお光の家へ止まつてから七日許たつた頃でした、さしも烈しかつた雨の脚も、次第に輕くなつて、八重に立ちこめた雲の鎖が、薄くなつてゆくかと思つてゐると、川上の空の一角、深碧の色が輝き出して、飛驒堺の山影が鮮かに、日の光が雲間を洩れて、其巔の上に射下すと、丁度遠くの空で碧綠の玉の輝くやう、久振て仰ぐ山の影、日の光、雨に籠つた人々には斯樣樂い者は他に無いでしやう。峰といふ峰から雪は離れゆき、谿といふ谿から霧は脫出て、眞白き厚い霧の帷が空に引上られたかと思ふと、其後はまあ何と美(うつくし)い新天地でしやう、スコットランドの雨の間に見られるといふ山河の景色も、斯(かう)でしやうか、降續く雨の中、いつか知らない間に、森も、峰も、雲も、草も、木も、なべて碧一色におし包んで、

空から落る日の光は、此に反照して滿山の綠將に燃立つばかりの美さ、脫け遲れた白雲の一片が、峭立つ崖を横さまに滑つて、峻い岩に其横腹を衝劃かれ、四分五裂し、絮となり蓬となつて、烈い光に照りつけられ、殘の雪の淡くも消えて碧の中に失せて了ます。左し右する雲の變動の急な事、谿を出て峰を繞る其姿の不思議な事、穴から落る日の光の莊麗なこと、天地山川、碧の色の目醒むるばかりの美い事、水は見る〳〵落ちてゆき、澤より、森より、立登る水蒸氣の白く、濃々として、再び凝つて雨となりは仕舞ひかを、氣遣るゝくらゐな事、其間千變萬化の不思議な景色は、此山中に入込て雨籠た人でなければ知る事の出來ない所です。雨の霽ると共に、里より通ふ途は自と通じ、落ちたる橋はかけられ、崩れたる崖は掘り片付けられ、久しく休んでゐた牛の群の鈴の聲は、又山々谿々に谺して聞えるやうになりました。友は雨が止むと早々、お光の家を出て、里に下る事となりました。けれど其時はもう、二人は樂い戀を語合て行末かけて、溫い望を抱いて居たのです。

五月雨が晴てから最早一月、椽の青葉は愈繁り、山の碧は一層深くなり、大空渡る雲

の色にも、眞夏の影はそことなく深くなり、今はもう松蟬が森に喧く鳴く頃となりました。其頃になると、毎年の慣のやうに、お光は大野川村の橋姫の祭見に、伯母の家へ呼ばれて行くのです。此橋姫の祭と云ふのは、近郷に聞えた賑な祭で、わざ〳〵其祭見に、町から登て來る人もある位です。又此橋姫につゐては一條の物語があるのです。昔時此大野川と川向の橋場と云ふ村との間に、細い一筋の柴橋が架つてゐましたが、或年の秋の大荒に、其橋が崩落てからは、崖は崩れ、流の勢は一層急になつて、如何にしても再び橋を架渡ず事が出來なかつたのです、丁度其頃此方の村に住てゐた、一人の女子が、橋向ふの或若者と互に戀ひこがれて、深い思を通してゐましたが、橋が落てからは、二人は相逢ふ術がとえたのです。只朝晩、岸の所へ來ては、二人で相見て果敢ない逢瀨を泣てゐました。

女子は毎日岸の上へ立て、いつも流の面を眺めてゐましたが、やがて藤蔓を集めて、綱を作り、毎日〳〵其を延し、遂に其はしを身に纏ひつけ、流を横ぎつて、向の岸へ泳ぎつき、それで初めて橋の形ができたと云ふ話です。二つの村の人達は、恩人だと云ふので此女子の魂を祭て、橋詰の巖の上、椽林の中に、橋姫の社としてあるのです。

さて七月の初旬になると、二つの村の若者は、わざ〳〵遠い町まで揃いの衣裝を誂へて、七日も十日も前から、御神樂の稽古に忙く、其日となると、橋の欄干へは此方から彼方まで注連繩を張渡し、橋板の上には一面厚く青草を布つめ、夜に入るのを待て、橋姫の車を引出し、御神樂の囃につれ、昔から歌ひならした挽き歌を歌ひながら、橋を越えて橋塲村の裏手の森山へ引上げ、夜中其所で御神樂を上げ、夜の明くるのを待て、又元の社へ歸るのです。此森山は橋姫の夫であつた人を祭た社で在た、年に一度祭の時に、此橋を渡て橋姫が逢に來らるゝのだと言ひ傳へてゐます。橋姫の車が橋を渡ると云ふ其日には、村の娘達、晴の衣裝に揃の手拭で、山から色々の花を取集て花笠を作るのです。紅白の岩牡丹の燦として映いばかりなのが、藤紫の薄色に、黄金山吹の取まぜ面白く、躑躅の花の深紅に燃立つ中に、一掬の雪と見えるのは山梨の眞白い花、其他夏の初めの、有りとある野の花森の花は、盡く娘達の頭の上に匂てゐます。群間の中は此美い花笠が、彼方此方行ちがつてゐるのですが、夜になると皆一つ處に集て、神樂の囃につれて、橋姫の車を引出すのです、車には二筋の長い綱が付てゐて、片方には揃衣裝の若者が、片方には此花笠の娘達が、つらまつて、神樂の囃は前と後

に一組づゝ、笛や太鼓の音につれて、車は靜に動き出す、橋の袂には川の兩岸に松火の火を明く燃し、橋の上には、近在から祭見に集た、老弱の男女が欄干に倚て推合ひながら立てゐる、お光も伯母に連られて毎年の事乍ら物珍く、又花笠の娘羨しく、其行列を見てゐました。車が靜に橋板に敷た青草の上を軋て行くと、綱引の若者娘達は、節を合せて挽き歌を歌ひだす、夫には音頭取が一人必要るのです。

お光も皆の後からついて森山まで行て見ますと、花で飾た橋姫の車は、中央に据ゑられて、二組の囃は一つとなつて神樂を奏してゐる、綱引の人々は此處に一群、彼處に一群、互に靜まつて其囃を聞てゐます。囃が一わたり濟むと、車の所から少し遠いので、勝手に休むのです。其時には皆の樂みの時で、暑いと云て衣裝の肩を脱いで、風を入れてゐる者もあれば、其花をと言つて、娘の後を追かける者もある、そうする中に東の空は白らんで又橋姫の車の歸る時となると、今度は節を更て神樂の囃は、寂い悲い調を奏するのです、聞く者は皆しんと爲つて、只遠の下て、流の聲がするばかり、姫神も今別を惜まるゝのでしやう、聽者の中には、涙をながし、咽泣する者もある位

です。人々が橋姫の、み車を社に納めて、家に歸たのはもう朝日が東の峰の端から、黄金の波を青葉の上に降注ぐ頃でした。

眞夏の景色は日增に深くなり、峰に湧く白雲の往來、恠しく、烈い雷雨の一陣擊來るかと思ふと、瞬時に晴て、水上遠い峰の小徑、灰色の雲のゆき交ふ間から、松の木立が見え、折ふし思はぬ方に旅人の菅笠の二つ三つ連り行くのが見えますが、此は何れ山路傳ひ白骨の湯へ行くのでしやう。山中の夏の景色は、なべて雄々しいもので、雨も、雲も、瀧も、流も、皆活動の姿を表現してゐます。只夏になつて苦むものは、溫泉へ通ふ牛の群です、其全身から流るゝ汗とつく息とが、如何にも苦しさうなので、其頃になると牛追等は、朝早く溫泉へ登て夕方日が入てから里へ下る慣になつてゐます。

深山の夏の姿は華やかで雄々しい代に、又至て短いのです、六月の末から算へて、七月一つき、八月の初旬になると、もう何處となく秋のけはひが立初めて、遠い峰にたなびく雲の姿も、細く長くなり、空は高く澄て、星が數を增て來て、森に鳴く蜩蟬の

聲、下を流るゝ水の響、取集めて物寂いさまとなつて來ます。恁なること一日一日に秋の色が深くなるやうで、九月の中旬から最う氣早な櫻の葉や、白膠木の下葉が色付て、葡萄の蔓は、鮮と云ふ鮮に紫の玉を連ね、樹々の實は盡く黄になり、紅となり、名も知らぬ小鳥の群は、幾つとなく其馨い木實を啣求めんとて、林に集て來る。此頃になるとお光の窓の賑な事、朝から晩まで百鳥が鳴交し、一葉一葉に朱を染た橡の紅葉が、はら〳〵と散りかゝつて來ます。やがて窓の蔦の葉に置く霜白く、十月の中旬となると時雨の雲が山を繞り、木々の紅葉は岩にこぼれ、吹渡る夕の嵐一群二群、渡鳥の群を送り盡し、夜となく晝となく、蕭々として木の葉の散るに絶間なき頃となるのです。此頃はもう日影は薄く。又大方の日は曇勝で、峰に聞え谿に谺する牛の鈴のぢあらん〳〵と云ふ響も、取分きて胸に寂い思をさせる、

噫來年の春は四軒になると言た其家も、永へに三軒だけて、殘てゐなければなりません。今はもう此三軒の家も橡の落葉に埋もれて、雪は近くの山々に降初め、森も林も、梢あらはに落葉し盡す頃となりました。白骨の溫泉の人々は、皆里へ下て了ひ、牛の

道路は、落葉と雪に埋められて、橡の林の三軒の家も、來ん年の春、鶯が谷の戸出づる頃迄は、里との交通は斷切られて、只もう眞白い厚い雪の衾の中に、眠てゐなければならないのです。

此冬の間の寂さと言つたら、何とも言ひやうが無い、折々烈い風が雪を捲き、雲を吹て荒ずさびゆく其外は、鳥の鳴く聲すら聞えない、晴た日には、信飛界の峻峰が深碧の空を劃して、白衣の姿氣高く聳え立つのを仰ぐ事もあるのですが、大方の日は、灰色の雲が空を鎖込て、只霧々として白雪のとぶばかりです。人々は燈を擁し盡夜を分たず、眠たやうに日を送てゐます。雪折の音、なだれの響が、折々遠くでひゞく許、流も氷が張詰て、潺湲の音も立てない、況して夜などは、眞の寂寥です、デットカルムです、折ふし聞こゆる狼の遠吠は、一層の寂しさを添へ、一鉤の銀月が、深碧の空に懸て、降積た白雪の上を照らす時、何とも言ひやうのない寂しさです。若し寂寥の何物かを味はほうと思つたら、此山中に一冬送て御覽なさい、寂しさは人を壓て人の命を縮めます。

第十三章　木曾の溪谷

溪谷の美、古來木曾溪を推す、余かつて文あり、今左に拾錄す。

一

橋南谿の山岳論に『先づ日本にて論すれは、日本は一つの島山にして、其島山の絶頂といふは信濃國なり。それより四方へなだれ下り、東西の國あり、南北の國あり』、とあるが、樁太崑崙兩山系が衝突した焦點が三角形を成して、その三角形の尖頂が信濃であることを道破したのは、さすがに南谿の烱眼である。とにかく、信濃は東山道第一の高地で、東は上野、南は甲斐遠江三河、北は越後越中、西は飛驒美濃と八ヶ國に隣つて、國の延長は東は碓氷峠から西は美濃境迄、凡そ四十七里といふ大國で、山水好きの旅客には、最趣味ある研究を與へると信するから、思ひついたことを摘んで書いて見やう。

先づ木曾の谿澗である、この木曾の谿澗といふのは、地文學者の所謂富士帶の支脈と、

木曾山脈とに挾まれた、東西約十里南北凡そ廿一里程の地域をいふのて、その富士帶の支脈といふのは、木曾川の西岸一萬尺以上の御嶽（木曾の御嶽さんは夏ても寒い袷やりたや足袋添へて）一帶を指し、木曾山脈といふのは、木曾川の東岸なる駒ヶ嶽や、美濃境の恵奈嶽（六千尺）や、木曾古道として古歌に知られた神の御阪（ミサカ）などの脈つゞきをいふのて、最低地と雖一千尺以上である。

昔の中仙道、所謂木曾路は、筑摩郡に屬してゐて、馬籠峠から東、贄川の櫻澤まて廿一里の間をいふともあり、又馬籠峠から洗馬驛に至るまての十三宿を指すともある、洗馬は上州街道と北國街道との追分て、馬籠は美濃の落合に隣つて、こゝの峠を信濃と美濃の堺としてある。國の界といふには、山とか川とか隔てがあるが、この兩國の界は、別に際立ちて塹溝がない、その地の人に尋ねると、平日は解らぬが、冬に至つて初雪が降ると、美濃路の方は降るとひとしく消えるが、信濃の地は眞白に積る、この雪の消えると否らざるとによりて、信美の界とするといふ俗説を『信濃奇勝錄』の著者は擧けたが、その信を措くに足らぬは言ふまでもない。とにかく木曾路は寒いところである。

木曾の今道は、この兩山脈相對峙してゐる間の谿谷、則ち木曾川に沿うて拓かだので、秦々たる良材を產するのは、この山奥てある。元來信濃の土地の高いことは、旅人が上州から發足するとして、碓氷峠を下ると和田峠が五千二百尺、大門峠は少しく傍道てあるが、四千八百尺、鹽尻峠は三千四百尺、鳥井峠は四千百尺て、人民の卜居する驛路村落も、遙に二千五百尺の上にある、和田峠にある西餅屋村は四千四百尺、諏訪湖は湖面が二千六百尺、湖畔の下諏訪驛が猶少しく高い、この湖の附近は四山重圍の底にあつて、信州では比較的に低いところてあるが、猶箱根山絶頂の蘆湖の二千三百尺に比べて高きを加へてゐる。

それてあるから、植物も溫暖地方特有の第一帶は勿論絶無て。第二帶（黑松樟櫧柯のたぐひ）も三千尺以上の高山にはないから、隨つてこの國には少ない、第三帶（山毛欅檜のたぐひ）は就中最多く、第四帶（白檜のたぐひ）はさすがに寒國たけに多く繁茂する、第五帶の偃松類に至つては、寒威嚴冽の高山の絶頂に尠からず散見する。貝原先生の『岐蘇路記』に『凡て信濃は竹と茶の木稀なり、寒甚しきゆへ栽うれとも枯るゝ、他國にて竹を用ゆるものには、皆木を用ゆ、就中桶の箍には檜を用ゆ、茶は他國より

買來る、又密橘、乳橘、金橘、木綿なし、是皆寒氣深きなり』と、竹や、茶や、密柑類や、皆熱帶の植物、信濃に稀少なのは當然であらう。

さて信濃の高山の多くは、街道から、いつれも遠く離れて、綬帶の如く、長袖の如くに列つて見えるので、その紺青色に至ては、紫派とやらの畫も及はぬ眺めてある、全體遠山はぼかしたやうに綠色に見えるのが普通であるのに、木曾の山々が紺色を染めるのは、山中人家が稀て、人煙も颺らねば、霧も少く、常磐木も、高山の半腹以上に無く、山は丸裸で何にも遮られぬから、かく冴えて見えるのであらう。それゆゑ遠くからの見物、喩へば淺間山を床の間の香爐と見做すたぐひは格別として、木曾路から分明に眉睫の間に見えるのは、わすかに駒ヶ嶽を、四里許隔りたる上松(アルマツ)驛より看得るばかりて、御嶽の如きは鳥居峠(『雲雀より上に休らう峠かな』)から見えるが、遙に遠い、況して飛驒に跨れる乘鞍嶽、鎗ヶ嶽なとは、土地によりて僅に頭髻を雲表に認むるばかりてある。

かゝる深山幽谷の地てはあるが、敢て足踏がならぬといふほどの僻陬てないのみならず、川に沿うての公道は、古來旅客の往來、絡繹てあつたから、詩歌に謠はれ、繪畫に

描かれたことは、殆ど東海道に亞いて多くを占めてゐる。或人が信濃國に關係した謠曲を調へたところ、紅葉狩、木賊、柏崎、望月、寢覺、土車、淺間、屏川、柳川、伏屋、雪翁、飛雲、海野、更科、更科物狂、戸隱、思妻、高梨、見渡鈴、善光、木槻、姨捨、神宮寺の二十三番を算へて、猶他に在るかも知らぬといふた。

夫は扨置き、山と川とは經となり、緯となり、信濃を縱橫に脈絡貫通してゐるが、單に範圍を木曾路に限つて論ずれば、山よりも川に重きを措かねばならぬ、信濃を紹介するには山を除きて御話は出來ぬ、木曾路は又川を措いて說明は困難である。

二

そこて木曾川の話にうつる。

天地創成のはじめ、軟い地皮が地壓力によつて皺皺を生じたのが谿谷てある、谿谷を器とすれば、それに盛る水、則ち河流の源は種々あるが、木曾川は湧泉類に屬するので、委しくいへば地底に浸み透つて匯瀦せられた水が、再び地上に噴湧するので、この種の川は本邦に最多い、多摩川の上流などもそれてある。

木曾川は、木曾路の奈良井と鍛原(ヤゴ原と讀む)の間の鳥居峠から源を發して、前に述べた御嶽山系と、木曾山系との間を流れ、おのづから兩山系の分界線を劃してゐる。その鐵桶の如き山彙の間を開闢して、沿岸總に一綫の木曾路を通じ、度削されたる絕壁に反響して、急灘となり、激湍となり、十八里に亘る幽邃の谿澗となつて、美濃中部に出て、漸く緩斜の平原を流れるやうになる。美濃尾張の地が肥沃なのは、木曾川の本流及び支派が、縱横に疏通して、灌漑の便利を寄附する結果なので、牧草茂り水田漲り、禾圃饒かなること、日本中土に冠たりといつても過言でない、且つ何分にも信濃といふ斜面の急な高地から奔るのであるから、年々土砂を伊勢の海に輸送して、所謂冲積層的三稜洲を作り、地圖に渺からぬ變化を與へるのである。

全體信濃といふ國は、『山高水淸』の四字に形容しつくされたところで、川を擧くれば、諏訪の湖水から出て遠江へ流れる天龍川、金峰山から出て犀川と合水する千曲川、川上山の東から流れ落ちて、武藏の隅田川に入る荒川、八ヶ嶽から源を發して、甲斐の富士川に合する釜無川、淺間山の背から流れる利根川、碓氷峠からは碓氷川と烏川、佐野の西山から姫川、野尻の湖水から越後の高田へ落ちる關川など、重なるもので、

東海道第一の大河大井川も、水源はこの國伊那郡と、甲斐と境を接するところから湧出するのである。

猶木曾川の外に、同街道の贄川驛からは、贄川が駒ヶ嶽から流れ、松本の方へ向いて犀川の名で流れてゐる、木曾川と犀川は『人』字形に脊合になり、木曾川は南の方美濃路を經て桑名海へ注ぎ、犀川は千曲川(千隈川又は筑摩川とも書く)と合して、北の方越後新潟海に注ぐのである。併し木曾路に關係するのは犀川の上流(奈良井驛では奈良井川といひ、贄川驛では贄川といふ)であつて、殊に木曾川は凡そ川としては日本本州の最高地から發するので、長さは六十六里である、本邦そのものが已に幅員が狹隘であるから、長大の水流に匱しいのは素よりそのところで、先づ信濃川を例外として、その他を比較すれば、木曾川は長大に於て多く遜色を有せぬのである、流駛の急激は日本三大急流と拮抗するに足るが、玖摩川は二十五里、最上川が六十二里、富士川が三十一里、皆その敵でない、前に述べた富士帶から、源を發して太平洋に入る水流に就いて稽へても、馬入河は富士川と同じく三十一里、大井川は四十六里、天龍川が六十里に少しく餘るので、天龍川を除いて、他は楯を突くに足らぬのである。

併しながらもし單に川の長や、幅や、もしくは水の急や、深さを以て論じたら、木曾川の右に出る川も尠くはなからうが、木も繁り、石も多く、山聳え淵深く、眺望に變化あり、開闊あり、彩色あり、比較的あらゆる方面に亘つて、人の意匠を加ふるに及ばず、おのづからなる絶好繪畫としての資格に缺けてをらぬは、おそらく日本第一の名を許しても溢美でなからう、實に木曾路の風景を絶佳にするのは木曾川で、木曾川のない木曾路は、髮を脱いた美人の如く、葉を落した樹木の如く、至て落寞の感に堪へぬのである。

三

木曾路の風景論に入る前に、木曾の古道を畧叙する必要がある、即ち木曾の古道といふて、今猶口碑に殘り、雜書に散見するところを綜合して、地圖と頸ッ引に憶測したところが、少くとも二つあるらしい。

之を系統的に説明すると、其一は美濃國赤阪から、各務野を歴て、鵜沼、小山、牧野、野上、細目、久田見、蛭川、高山、福岡、坂本と來て、坂本から木曾川を横ぎり、五里あ

まり進むと今の妻籠驛から落合の釜橋上、東北約一里許なる湯舟澤(溫泉あり)から、惠奈嶽神の御阪を踰える、『白雲のうへより見ゆるあし引の山の高根や御阪なるらむ』(能因法師)は高さを仰ぐべく、『信濃路や木曾の御阪の小篠原分けゆく袖もかくは露けき』(長房)て道筋の困難が想ひやられる。そこて御阪を下ると園原へ出る、坂上是則の和歌に『園原や伏屋に生ふる箒木のありとは見えてあはぬ君かな』といふ歌は分明にこの園原山を詠じたので、山は妻籠驛から今の木曾街道を離れて飯田城下(伊那郡)へ通ずる約十里の間道五年前までは杣人が僅に通ふところて、謂ふ所の箒木なるものを見る人は稀であつたが、中津へ停車場が出來て以來、大分行く人が多くなつて來た。この木は、『源氏物語』の卷の名にまて用ゐられた高名の木てあるから、この道筋は昔は人の往還が殷んであつたので、今のやうな深山幽谷の中てはなかつたのてあらう。さて園原から育良の間、川に沿うて聖神村に出るのてあるが、この道が洪水て頽廢して、今は網掛峠にかゝつて、小野川に出る、小野川から惡那の方へ出たらしい。

他の一は、それより新らしく拓けたので、この道は成るたけ川に沿うて開かうとした形跡が見える、勿論今道程規則正しく行はれては居らぬが。即ち美濃國大井川から折

れて、その地の千駄林(今の地圖に千旦林とあるがそれてあらう)から、今の木曾路にかゝる、現に馬籠、妻籠、三留野までは今道と大差ない、それから菖蒲平(橘南谿の『東遊記』後篇には勝負平と見ゆ、古戰場とあり、出所を知らず。)へ來ると、こゝは風越山の南で、風越山に古道のあつたことは『風越の峰こえ來れば木曾路山波もひとつにうつ蟬の聲』(鴨長明)が左券である、さて風越山を下つて吉野の里へ出る、こゝから駒ヶ嶽の麓の德原を經て、大原へ出る、大原から一里許て、初めて今道と同じく、宮の腰、鈴原と順次に過ぎるのであるから、今道の上松須原などは、古道を論ずるときには、眼中に入れてはならない。即ち今の所謂、棧橋、寢覺の里、小野瀧などはその時代の古人の知らぬところである。今道は木曾十九代の孫義在が、須原から館を福島に遷すため、天文七年から十四年までの間に拓いたのである。

古道の話は措いて、今地圖に所謂國道として掲げてあるは、德川氏のとき開いたのであるが、明治になつて美濃の落合から、馬籠を經て、妻籠に到る道路は、十曲峠(十石峠ともいふ)の難所があるから、少し迂回するけれど、落合から木曾川に沿うて新道を築き、山口を經て三留野で、妻籠から來る舊道と合した。又美濃からいへば、名

に高い十三峠があつて、交通至極不便であるから、井尻村から分岐して、日吉釜戸を經、竹折から舊道に接くことにした。これらの兩道修築は、岐阜縣震災後の設計である、妻籠から以北、長野縣内に屬する木曾街道は、それでも昔に比べると、大分樂になつたさうであるが、猶平坦砥の如しとまでは行かぬ。

四

木曾の棧橋といふは、甲斐の猿橋もしくは富士川に架した藤橋、又は飛驒の駕渡しなどと同じ觀念を抱いて、定めて崖高くして雲根に入り、搖るが如き危梁、窅然たる碧淵に懸てゐる景を冥想するが、一たび現今の棧橋の俎より長からず、溝板より大ならぬを踏むに及んで、あまりの相違に呆れざるを得ないであらう。併しこれは呆れる人が無理なので、元來木曾の棧橋といふのは、古道には數多く架せられたので、明かにこゝといふ一つを指したものでないことは、恰度武藏多摩川に萬年橋が多かつた、それと同じである、たゞし今は萬年橋も唯一つに限られたけれど。

棧橋とは、木曾古道の谷河へ架けわたした橋の總稱で、その架け方は、藤蔓で板を縛

り、鐵鏈を桁にしたもので、近代の板橋と異なつたところは、欄干と杭のないことである。又道の狹いところは、谷の方へ木を架けて、藤蔓で編み、道の狹いのを補ふところも多い。

橋の話が出たから一寸書いて置く、富士川の藤橋は、今は實は竹で編んだので、蓑俵を平たく展はしたやうに、それは恰も蜘蛛の巣のブラリ空に懸るに似てゐる。腐蝕の患ひがあるから、一年に一度架け替るさうであるが、今は人の渡ることを禁じてある、又信濃の梓川に架けてある藤橋、藤蔓を幾十筋となく縱に引き渡し、横に細い蔓を絡げ、中を窄めて、兩端を人の腰に達くぐらゐに高くして、底に板二枚を並べ懸けてある、渡ること半にして、動搖烈しく、底の板がバクりと口を開いて、藍より濃い水の渦くさまが、件の藤蔓の隙間から見えるので、歩み慣れた里人の外は、誰も腹這ひにならずば、進みえないさうである、たゞしこの橋は今は板橋と換はつた。

今の所謂棧橋は、上松から驛路の中にある。

『あやふさは名のみ殘りて今更に渡るに安き木曾の棧橋』それで實況はつきた。

五

木曾路の絶景であることは、子供のとき祖父の紀念の本箱の中から現はれた『道中袖鏡』の繪で覺えてから、跋渉して見たいとおもふ念は、毎年のやうに絶えなかつた。

然るにその後、嘗て木曾路を遍歴した人に聞くと、木曾路の景は、見ぬ前の想像があまりに大なるゆゑであつたか、それほどに佳いと思はれないといふ話であつた。

人各趣味の異るところあり、嗜好の偏するところがあつて、景色の品評などは、或點に於て人物の月旦よりも難く、人物は棺を蓋うて後論定まるかも知らぬが、天然の美は永刼に人間の手で死錠を下されぬものあつて存するであらう。

信の隣國の飛驒とを比較するに、木曾路十三驛は、かの中山七里の幽邃なるに如かず、木曾川の纖麗は、飛驒川の跌宕なるに遜色なきを得ないが、彼よりも變化がある、木曾路は木曾川に沿うて、一方には斧劈峭立する斷崖を仰ぎ、一方は懸流瀉下する川を瞰るので、遠望には乏しいが、併し多摩川のやうに狹からず、天龍川のやうに局迫なちず、棧橋、小野瀧、寢覺の里などは、皆河畔にある。棧橋は前に述へた、小野瀧は

平凡に達するだも猶距離が遠い、古人が概して蒔繪のやうな纖細奇巧を悦んだ傾向のあるは、松島や橋立ごときを、三景などと殊々しく唱へたにても知れるが、この寢覺の里は、木曾川の中で最纖である、巧である、細である、艶である、木曾川の景は比較的に跌宕に於て缺けてゐるだけ、寢覺に似た綺麗なところは、敢て珍らしくない、區々たる寢覺を擧げて、木曾川の全豹を說くは、眼を一つ描いて佳媛を說くやうなものである、美麗を以て克つところは、木曾川に甚た多いが、殊に宮の腰から須原あたりまてを尤と考へる。やゝ豪壯に近く思はれるのは、三留野から中津川に到るまての新道に沿うたところてある。木曾路を離れても、美濃伏見から太田までの間はさすがに强弩の餘勢はある、太田から以下尾張に入ては、流水緩漫になつてしまふ、齋藤拙堂が『下岐蘇川記』に『至唐李白述其意云、千里江陵一日還、平生竊疑以文人虛談、今過此際始知不誣也』は富士川などには擬し得るか知らぬが、木曾川の下流には不倫である、拙堂は伏見から舟を艤したので、このあたりからは、水勢は庶弱になるばかりてある。『木曾路名所圖繪』の寢覺の里の圖をよく見ると、獅子岩から急湍を隔て、對岸の床山に綱が斜に張つてあつて、そこを恰度玩器の猿の柿上りといふ見えて、人間が手と足

を縮めてしがみついて上つて行くところが、頗る詩的に感じられた。今はさるたぐゐの綱は取り捨られて、少しく下に方つて、鋼線を傳はつて船を行ることにしたやうてある、同じものを諸國で見たが、これも面白い。

が木曾川の水の色は、何とも口に出ぬ、透明無色の水も、分子が厚く累なれば、青色を構成すると聞いたが、その青色を染め出した水が、岩の上を奔流するので、上流は暗愴たる安山岩が多く、中流以下は雪白の花崗岩ばかりて、水の色が川底の岩に配して變化するが中にも、純粹の瑠璃色を見るのが、實に絕々奇と評すべきてある。每晚宿屋へ着くと座禪を組んて、水の形容を考へたが、偶ま掌上の紋の如くに指し得たのも、熟視すると、いつの間にか泄れてしまふた。

とにかく木曾の七日路と唱へられた街道が、今は三日で通り過されるのは、新道が開拓されて、さしもの難路が坦道に夷らけられたのが重なる原因である。新道が始終川に沿うて益す風致に富むのは、甲斐昇仙峽と同しく、新道の最成効てあらう、併しながら山中の人は、よろづ保守的て、新道は舊道より路が迂回するといふ唯一の論據から、新道をあまり善くは言はぬやうてある。

第十四章　雜記

一　不二山

(一)富士山の「フジ」は雜多の音便文字を借られてゐるが、先づ普通に用ひられてゐるのは、即ち「富士」で、最も詩的なのは「不二」であらう「不二」は即ち「無雙」といふことになる、無雙なり、故に唯一也、唯一は日の如く、月の如く、神の如く、富士の如く、なるものをいふ、外人往々「不二山」を讃嘆して Peerless Mountain といふ、この「ピーアレス」といふ字が幾んと無意識に「不二」を直譯して、妥當をきはめてゐる、故にいふ、詩歌に入る、「ふじ」は「不二」の字を用ゆるの適切にして雅馴なるに若かずと。故栗本鋤雲先生も、『海東山第一、不二字尤當』といふ詩を作られてゐる。

(二)武藏野から高く見える山といへば、東に富士、西に筑波である、古往今來、富士と筑波は江戸はいふに及ばず、所謂武藏野平原の自然を支配し、統一する帝王と妃とである、そこで武藏野の一部分が江戸となつて、江戸に人が住むやうになつて、その人

が詩を有するやうになつて、その詩に初めて「富士」といふ字が使はれたのは、寛永五年に、齋藤德元(美濃國岐阜の士)といふ俳人の關東下向紀行中の句に

武藏野の雪ころばし歟富士の山

と詠んだのが、抑もの嚆矢であらう、この人は馬喰町二丁目に住んで、醫を業としてゐた『俳諧初學抄』といふ著書を上梓したが、これも江戸に俳書の現はれた初めであらうといふことだ。俳諧史富士史上に、兩つながら傳はつてゐないことであるから、殊にこの一句を紀念に擧げて置く。

(三)富士を眺望するのに、最もいゝところはどこであらう、河村眠雪の百富士四卷(明和四年版)寫飾北齋の富嶽百景三卷(天保年間尾張東壁堂版)は、世に有り觸れてゐるところばかりを撰んだ嫌ひがあるが、余が從來の旅行中、富士を眺望するのに、孰れを孰れ、第一位に推すのに迷ふたところが四個處ある、箱根乙女峠の富士、甲斐御坂峠の富士、駿河龍華寺の富士、伊豆達磨峠(修善寺より戸田(へだ)へ下る間の山路)の富士である、殊に最後のは、最も少く世に知られて、最も多く佳くはあるまいかとおもはれる。

(四)余が從來の旅行中、富士を眺めて最も感じたのは、越後妙高山に登つて、仰いだと

さの富士山である、何故このときがさほどに特に感じたかといふと、本州を横斷してゐる富士帶といふ山脈は、先づ太平洋岸の伊豆駿河からはじまつて、日本海岸の越後越中に終つてゐる、その太平洋に屹立してゐるのは富士て、日本海に高聳してゐるのは妙高山てある、故に一方を『振り出し』とすれば、他の一方は『上り』てある、一方を『一』とすれば、他の一方は『十』である、一方を『誕生』とすれば、他の一方は『終焉』てある、即ち妙高山から富士山を仰いだのは、日本の北の端から、南の涯まて一目にした所以て、墳墓の地から故郷の土までの歴史を一線に貫ぬいた所以てある、是に於て『我』なるものが、いつしか二ッに分身して、一方は富士となり、一方は妙高山となり、互に額を合せて、一方て君が君てすかと質問すると、他の一方て私が私てすと挨拶するやうな氣がした。

(五)遠くより見れば見るほど、大きいのは富士の山て、高いところから見れば見るほど、愈よ高いのは富士の山だ、もし最も低い富士と、小さい富士とがみたいならば、御殿場なり、吉田なり、鈴川なり、最も近いところから御覽なさい、どうしても日本一の高山とはおもはれないまでに小さくて低い、併し甲斐、信濃、飛驒、越後などの高山深嶺に登れば、登るほど富士はすく〳〵とゴムても延ばすやうに、影ても漾はすやうに、高くなる、恰も年代が經てば經つほど、肩胛が濶くなる偉人のやうてある、それから月夜に覩る富士は、傍にゐてもおそろしくなるやうに、丈が高く見えること妙てある。

(六)いつぞや或草稿を書かうとおもつて、駿河判紙を二三枚刻ねたら、その中の一枚に、藍の富士山形の商標が印してある下に、無類極上といふやうな意味の文字があらはれた、紙が紙だから西洋紙のやうに商號を透かして、漉き入れるといふやうな開けた細工のないところに、一種の野味を覺えて、緣起がよかつた。

二　愛鷹山

富士山下、大石寺所藏によりて、刊したりと傳へらるゝ、異本曾我物語卷の十に曰く、

鎌倉殿富士野を出てさせ給ひて、伊豆國の住人に、尾河三郎を召て、汝曾我のものどもに緣ありと聞、彼等が首を足高に入て、曾我の里へ送り葬らせよと仰せければ、畏て悅びつゝ、二つの首を古郷へぞ送りける。

とあり、足高とは机の如き物にて、古くより物の臺に用ひしなりとか、富士山下の愛鷹山の名、古書に往々足高と書けるあり、はじめは宛字ならむと思ひたりしが、之にて解するに、或はこの器物より思ひ合はせたる名なるべきか、愛鷹の文字は後代に、宛てられたるものなること、初めより論なし、甲斐の天目山は、天目の形したるより、名けられたりとは、坊間の書に見るところなれど、足高は必ずしも形態の、その器物と相似たるがためにあらずして、山の位置たる東海道の方面より之を仰ぐに、富士の半腹以下に横はりて、この臺礎を成せるにさも似たれば、かくは名けられたるものならむ。（或はおもふ、足高は「ハシダカ」即ち兩端突起の謂歟）

三　不二の叙景

博文館續帝國文庫の内『續々紀行文集』をくりひろげて、不二山のくだりを漁る、土屋斐子の『たびの命毛』最も面白く讀まれたり、解説によるに、斐子は幕府の士三枝某の女にして、堺の奉行土屋紀伊守の室、字は士章、清風と號し、聖經諸子百家の書、通覽せざるところなく、又國學を修め、和歌を好くす、著はすところ、曹大家論語解、

枝氏家訓、烈女傳拾遺あり、この紀行は江戸より紀伊守の任地、堺に赴きたるをりの著なりといふ。

原吉原をぞ行く（略）とばかり見あぐれば、たゞこゝ許の目のまへに、不二なごりなくはれわたり、あなうれしとも嬉し、けふ見ずば、またいつの世にかなかむべき、命のほども定めなきをとまでに、思ひ入りつゝ、まじろぎもせず。

不二山が、日本人の審美心を尠からず喚起したるは、冥々の中その功大なりといふべし、余かつて甲斐の武田信玄の詞賦を悅び、駿河の今川氏眞が詠歌蹴鞠に耽れる等、當時の戰國武士に似氣なき嗜好を以て、私かに不二山の感化に歸さむことを想ひたりき、こは全く謂はれなき想像にあらず、橘南谿の『東遊記』に、駿河を以て名くる馬士に邂逅し、あまりに奇らしき名なれば、その所以を訊ねたるに、我が父天下を遍歷したるに、駿河ほど景色の好き國は非じ」とて、かしこを慕ふあまり、かく名けられたり云々と答へたるを記せるやう記憶す。駿河の景色は不二を以て契點とし、中心とし、王位となす、駿河を愛するは、やがて不二を愛する所以なるべし、蜀山人の『假名世說』又かしく坊なる畸人傳を誠す、曰く元祿寶永のころ、相模にかしく坊といふもの

あり、常に駿河に行脚して、不二を仰くを以て畢生の怡樂とす、後駿府法臺院の門前に寂す、辭世の歌に曰く『不二の雪とけて硯の墨衣かしくは筆のをはりなけり』と、この坊の事は、別に『炷霞綺談』といふ書に載せたる由、曲亭馬琴言へり、これらいづれか、不二の献身的讃嘆者にあらざりける。

同女の紀行、又曰く。

すそ野より、いたゞきに至り、隈なく見ゆ、右の方に愛鷹山をかけたり、其かげより寶永山つらなり、見ゆ、卯月のけしき、しるく、なからばかりより、雪は消て、白き絲を引くだしたらんやうに見ゆ、ましろなるいたゞきも、只白きにあらで、白きが中に濃淡あり、高きと低きと、くだりにすぢを削成せる、たとへば白芙蓉の瓣の白きすぢを引きたる如くなり、高卑濃淡のおのづからなる白妙のさまを、などて世のゑだくみは、かき分きざりけんと、口をしういへど、げに少納言のかき劣りするものと、いふにやなずらへまし、しばしありて、風止みぬれば、まだゝくうちに、見えずなりぬ、あらぬこゝちに、只おほそらをのみ仰ぐ、かう深き心を、かくや姫の、あはれみ給ひて、しばし珍かなる姿を見え給ひつるやと、いとかたじけなし、この方にのみ、心をいるれば、田子の浦人、あびきするもみず。

不二をのみ仰ぎ視て、世の常の女子の珍らしがるべき、田子の浦人の網引するさまをも知らで、過ぎたると云へる、雲の帳を颺けてかいまみえたる不二を、竹取のかくや姫のあはれみたまふてとひた悅びに悅びたる、しをらしき女子の情なるべし。しかも、その不二を熟視して、白きが中に濃淡あり、高低ありといひ、世の畫家がこの山を描くに、徒らなる八字形輪廓の中に、わけもなく胡粉を揑塗して、花瓣ともとも、白鷺とも、雪塊とも、綿帽子とも別たざるを慊らずとしたるが如き、明治以前、日本畫家の弊所に當る、まことに不二の神色を描寫するは、只だ白きが中に、濃淡と高卑とを識別するに在り、是なくして不二は活きず、是なくして不二の色は神ならず、斐女の眼光凡にあらず、古人の日記道中記の類、千篇一律樣に依りて胡蘆を描く、この精刻を缺いて、一女見に附與す、嗤ふに堪へたり。

四　美濃惠那山

同じく『續々紀行文集』を渉獵す。

太田南畝の『木曾の麻衣』中に言へるあり。

右のかたちにかくみゆる山は、一昨日より見る横長嶽にして、中津川馬籠をへて、跡にみなす山なり。

と未だ横長嶽といふ山あるを聞かず、中津川馬籠云々とある地位より判じて、横長嶽は惠奈嶽なるべきことを致へ得たり。『新撰美濃志』（尾張の人岡田文園撰。）第二十四卷、惠那郡の條に、惠那嶽は當國第一の高山にて遠國よりも見ゆといひ、吉蘇志略を引いて、是天照大神降誕時、……藏胞衣於此山、胞衣倭訓惠奈、則惠奈山名、亦復據此、と地名を解釋するに、多くは後代の人が、假に宛てたる漢字を、文字通りに正解し、若しくは音便によりて惠那は胞衣（エナ）より來れりといふの類、今も猶世に行はるゝが如し、余はこの山の形態よりして、蜀山翁の横長嶽說（翁は、故らに惠那を、横長と改められたるにあらざるべけれど）の方を採りて、寧ろ妥當に近しと思ふ。

五　農男

馬琴翁の『羇旅漫錄』三卷を閲す。

上卷に農男の記事あり、曰く。

駿府の人の說に、富士にて四五月のころ、だん〳〵雪の消えのこりたるが、寶永山の方、凹（なかくぼ）ところに人の形のごとく、雪ののこることあり、これを農男と稱す、この殘雪見ゆるとしもあり、また見えざるとしもあり、田子の土人いふ、農男見ゆる年は、必ず五穀熟す。

この條は、同翁の『蓑笠雨談』にも出てたり、雪の消えかゝりたる跡が、おのづと人形を成したるを、農男といひ、豐年の兆候と言へるたぐひは、この翁の最も歡迎措かざるところの話柄なるべし、かゝる俗說は古くよりあることにや、甲斐國誌（松平定能撰、文化十一年成、一〇九冊）の山川部、鳳凰山の條に曰く。

此山の面に、春三月頃より、消え殘りたる雪自然に牛形を作す、土人望んで之を農候となし、之を農牛と稱す。

彼は駿河、是は甲斐、一は人形にして農男、一は牛形にして農牛、形は異へど、兩ながら山半殘雪の形容なるも似たり、さればこれらの地方にては、農人間に、さる言ひ傳へありけるものにや。

六　俗謠

風土を通して顯はれたる自然の讃美歌、或は風土に托して情懷を抒べたる俗謠に、三誦すべきもの多し、萬千の調、萬人の心情齎、其二二を擧げむ。

波浮の御池の茶釜の水は湧くも早いがさめ易い
私しや大島御神家そだち胸に煙は絶えやせぬ

二首いづれも伊豆大島のもの「波浮の御池」は噴火孔趾「胸に烟」は即ち三原活火山。木曾の御嶽、木曾街道の行客より仰視せられ、往々情詩に入りて、この火山、亦有情の眷屬となる。

木曾のナア木曾の御嶽山は夏でも寒い
袷やりたや足袋添へて
木曾のナア木曾の御山はお月を抱きやる
私も抱きたやお十七を

(此他に『ぬしの心は御嶽さまよ胸のこぼりは未だ解けぬ』の情歌あり)「お十七」は十六七の若盛りといふ意、則ち娘子を言へるならむ、年齢を人化して名詞に利かせたるは、新手段、この句法殊に信州の俗謠に多し、例へば盆唄に

唄へお十七聲張りあげて胸の蓮花の咲くやうに

又流行歌に

淺間さんなぜ燒きさんす裾に十七持ちながら

淺間山麓に追分驛あり、維新前までは遊女を置きたりしといふ、裾に阿嬌を擁して、何の妬火ぞと、揶揄一番せるなり。

淺間の歌他になほ一あり。

淺間山から鬼やけつ出して
岩の缺けるよな屁を垂れた

卑俚なりと雖も、天明の大噴火以來、最も多く行はれたる俗謠なり。

敦賀地方の子守歌に、合歡の木を小兒に譬へて謠へるあり、きはめて稚簡にして、又無邪氣の至。

合歡の木々々々寢やしやんせ

お鐘が鳴つたら起きやんせ

木曾山村中の山村なる西野（御嶽の麓）の草刈歌

こわやせつなや關屋の坂を

馬の手綱で日を暮らす

「こわや」は則ち苦しやの方言、關屋の坂は信州より飛驒街道に當れる、半里に亘れる急坂、村民辛苦の狀想見するに堪へたり。

西野末川の稗燒餅は

色は黑いが味が住い

「末川」は訛りて土音「せいが」と訓む、此地火山岩上の礫确土、加ふるに氣候寒冽、僅に稗餅の味を誇り得。

うすは挽き飽く手にやまめ出かす

忍び夜づまは門に立つ

挽春の歌は即ち是れ、言々情味あり、稗餅の甘さより甘し。

七　北日本の代表的植物

信濃川と木曾川とを以て、本州に横線を劃し、こゝを南北兩日本の境界となさんか、南日本を代表する植物は黑松なり、櫧なり、樟なるべく、北日本を代表する植物は橡なり、扁柏なり、山毛欅なるべし。俳聖芭蕉は如上の區別に隨へば、南日本の人なれども、北日本の江戸に住すること多く、且つその行脚も北日本（美濃、尾張、三河、遠江、甲斐、駿河、伊豆、相摸、武藏、下總、常陸、信濃、上野、下野、越後、出羽陸奥等）に多かりしかば、その諷詠せる植物も、又隨ひて北日本のもの多かりしが如し。但だ信濃と飛驒とは、信濃川（犀川）と木曾川の谿谷を隔てゝ、南北兩日本の關門となれるが故に、この地辺線の附近內外には、兩方の代表的植物を相接せしむ。

試に上に擧げたる北日本の代表的植物を小記せんか。

（一）橡　一に七葉樹といふ、最も木曾に多し、貝原翁の『岐蘇路の記』には土人この樹の實を粉にし、燒きて之を食ふとありしと記憶す、余が木曾路にて見たる芭蕉塚には『木曾のとちうき世の人の土產かな』と刻しありたり　句は凡といへども一篇の風土史に

充つべからずや。

(二)扁柏（ヒノキ）は臺閣の偉材なり、檜の木笠なぞ趣いと深し、

(三)山毛欅　に至りては余の寡聞なる、未だ古今の俳句に入りたりといふことを知らず、畢竟この樹の本州の北部、及び北海道過半の、西半部を領するために、人目に觸るゝ機會の最も多からざるに由るなるべし、南日本に最も接近したるところにては、甲信にては海拔五千尺附近に終り、駿遠にては五千七八百尺附近に至りて絶つ。街道や村落には多く見ることを得可からず、余が箱根蘆の湖畔、信濃梓川上流の岸にて見たる山毛欅の如き、尤も愛すべきものゝ一なり、而して山毛欅の尤も愛すべきは、其葉に在り、楕圓にして互生、上僅に尖りて柿より濶く、榉より狹く、緣邊雲頭波狀をなし、上面濃綠、下面淡綠、娑婆として風聲を亂る、この樹影に身を托するとき、市氣を絶ちて、我は宛らなる大隱なりき、落葉濶葉樹中の絶品、山毛欅よ、我は汝を愛す。

八　芭蕉と東北

芭蕉は何故に北日本、殊に東北地方を長く旅行したりや、おもふに彼が俳諧の骨髓なる『寂び』は、東北地方の蒼凉疎蕩なる風光に默會して、こゝにはじめて契點を發見したるためなるべし。且ついふ、北日本の風光を寄與するところの植物は、之を南日本の物に比すれば、實用的材木ならざるもの多し、その實世間に無用なるだけ、それだけ却つて大を成す、詩に入る所以なり、朴の木、山櫻、椹、櫟、白樺、山楊、山毛欅、しなの木、唐松、山躑躅、白檜、根松等、二三を除けば皆是なり。

九　ホキといふ地名

飛驒白川村より大白川の水源に溯りて、加賀の白山に攀づる路は、日本全國にても、殆ど他に比を見る可からざる天嶮となす、こゝの深谿に沿へる路を、往々「ホキ」を以て名く、たとへばウオブチノホキ、ソーウエモンホキといふが如し、或人の紀行には、魚槽の歩危、宗右衛門の歩危と書せり。魚槽（ウオブチ）、宗右衛門（ソーウエモン）はさてもありなむ、「ホキ」の方言を歩危と塡めたるは、宛て字なること論なし。

おもふに「ホキ」は岸險（ホキ）の古言を存せるなるべきこと、他に傍證あり、飛驒の益田川に沿へる益田街道には、中山七里の絶勝あり、その中又保井戸といふ地名あること、

美濃よりするものは誰も通行するところなれば、知れる人多からむ。「ホイト」は、素と岸峻處なり「キ」は「イ」に通じて用ひらるゝ假名なること、朔日の「ついたち」、幸の「さいはひ」などいふ例多し、「ホキト」一轉して「ホイト」となり、「ホイト」又誤まられて現今の如く「ホ井ト」となれるなるべし。

因にいふ、中山七里の中山は、有名なる遠州佐夜（狭谷の義）の中山、吉備の中山、或は信濃より越後に到る間の北國街道を中山八宿（吉田、牟禮、古間、柏原、野尻、關川、鬮山、新井をいふ。飯綱、黒姫、妙高諸山の東麓に通ず）といふが如く、其他山間に介在せるを以て名けたるにやあらむ、木曾街道を俗に『なかせん道』と呼ぶも『中山道』の意なるべし。或は「なかやま」は「長山」の義なるべしといふものあれど、之を現在の地勢に考へて、余は前説を肯定す。

十　暮春雜筆

けさは雨なり、嫩き櫻の葉に落ちては、圓瑠璃を轉ばし、木爪の花に貼きては、淡紅色を透して、光れること瑪瑙の如し。顔洗はんとして、おぼえず椽側に立ちて見惚れぬ。

雨點滴、花搖落。

木爪も落ちたり、乙女椿も落ちたり、かくして春の血液は日に耗し去るなり。（四月十八日）

花を鬻ぐものは、田舍の媼と、手製の木楊の小櫛の目立ちてをかしき村娘と、はたいつも門口より聲高に訪ふを忘れざる、眇目の爺となり。この頃は互に門前を過ぎることと、殆と寧日なし。躑躅、山吹、緋櫻、牡丹など、紅白黄紫、取り交ぜて姉の花あり、妹の花あり。

花賣といへば優さしく、美くしき人のやうに思ひ做さる。

されど神、花を讃嘆するに足るべき文字を、人に與へざりし、今、こを想ふは既に晩し。（四月二十二日）

松林の間に、襷を綾取れる路より、中學校の前へさまよひ出でたり。二階の校舍にて、ピアノをかき鳴らせる音に、忽焉として、我は生れたる故郷に歸る、然り、この夕、

花も土に歸れるなり。

校より林一つ隔てたる、巽の方に當りて、さゝやかなる池あり、銹を帶びたる古鏡の如くに、あやしく澄みて、その枠には森の衣を卷いたりけり。樅、杉、柏なんど、犇々と薙刀を騷け列ねたるやうにいかめしきが、木の隙より洩るゝ空は、冬――もし冬を人に擬したらば、冬の眼の如くに冷たげなれど、柔き葉、嫩やかなる芽は、そこにもこゝにも、苗えて、森は今處女の暖みに充てり。

池をひと匝ぐりす、ふためぐりす、秩父わたりの遠山は、顏(かんばせ)故人に肖たり、永く懷に忘れざりし幻像を、夢に仰ぎたる如し。

池心澄みたり、頻に禽の影を喚ぶ。天心低うしてその間、直垂に淚腺の通ずるあるか、滴々としておもてに淚隕つ、熟視すれば水馬の點するなり。(四月二十四日)

菜の花は吾愛する春のひとつなり、横濱附近には多からず、この花の調和するは、殊に黄昏にあり、月は東に日は西にのをりこそよけれ、蜂や、虻やの宿かるとき、菜の花、すゞしろの花、一つ宛、小さき靈魂を藏するなり。看よ、今すがれ行く香を追うて、消魂ましいかな、あるは嗒き、あるは嘻く羽音のわが耳にいたきを。

老いたるは覺むるとぞいふなる、秋の冴えたるは定業なり、いかなれば若きにして猶醒めざる可らざる。(四月二十六日)

暮春を人に現すれば、剃りたる頭の淺青さ、若き尼なるべし、愁ひあるに於て、しかも自は愁ひを知らざるなり。美くしさに於て、しかも自ら美しさを忘れたるなり。彼女は華やかなり、されど寂びしきなり。

暮春を色に現すれば、若紫なるべし、暗に於て、冷に於て、しかも光あるに於て、生き生きしたるに於て、又聖なるに於て。

暮春の輪廓は赤なるべし、熱からざる可らず。綠なるべし、沈まざる可らず、哀しき調和なる哉。

知んぬ、暮春の色相は解脫にして、執着はその人相なるを。(四月二十九日)

十一　春の花秋の花

▲この世の中に、花が亡くなつたなら、人間は生存の權利を、半分だけ拋つことであらう。

▲花に物を言はせてみたら、おもしろからう、蓋が紫唇を綻ばして何かいふ、女郎花がしなくなして又何かを呀やく、花おの〳〵心あり、春の花野、秋の花野は、造化が一大理想を描いた圖卷で、この圖卷の中には、確に色の悲劇があると共に、又色の音樂があるとおもふ。

▲女郎花は有らゆる花の中に在つて、最も小説的なるものである。

▲女郎花、桔梗、萩、蓼、紫菀、刈萱、木楡、これらの花野に、おきわたされたる白露をかさあつめ、天下の麗質をして浴せしめたら、いかに。

▲『この花の一瓣の中に百種の言ごともれるおろそかにすな』この歌を一首詠んだために藤原廣嗣は、彼が全生涯の總べてを引き括めたよりも、天晴器量の名を殘したと言はねばなるまい。

▲墓前に咲く花(多くは春の花を連想させる)と、墓前に手向けられたる花(多くは秋の花を連想させる)とに對して、感謝を献くることを知らぬほどの人ならば、その人

の價値はあまりに明白に解り過ぎる。

▲春の花の中で、最も色の積極的(かゝる言が許されるとするならば)なのは、おそらく躑躅であらう、萬葉に丹管之と言はれたその赤い花の、濃彩と厚色は、やがて來るべき夏の花が、牡丹といひ、芍藥といひ、愈よ赫として眩ゆからんとするのを、豫言するが如く、前驅するが如くである、彼は春のものとしては濃く、夏のものとしてはやゝ淡く、六ッかしく言へば、時代と時代との接續に、或使命を帶びて產れて來たのであるが、その味方ならず敵ならぬために、孰れよりも繼子扱ひにされるやうな氣がする、卿が花の史上に占め獲らるべき位置を、かなしむ歌人ありや。

▲躑躅と熱情の關係に就いては、この花の別名を杜鵑花といふのでも、因緣がありさうである、尤もこれは、杜鵑の啼く時節に開く花であるといふところより來たので、必ずしも杜鵑その物に配合せられたといふのではないから、菜の花の蝶に於けるが如き密接な關係はないが、それでも李白はこの花とこの禽とをとり合せて『蜀國曾聞子規鳥、宣城還見杜鵑花、一叫一廻腸一斷、三春三月憶三巴』と哀詩を作つてゐる、この花は大久保の躑躅園などで觀ては(あすこのはキリシマッツジが多い)風情のない花